

区 分	課 程
-----	-----

(論文 様式)

地域密着型プロスポーツチーム所属選手の
ホームタウンに対する態度：

Community-based professional sports team players' sense of community:

コミュニティ感覚理論を援用した実証研究
an empirical study employing sense of community theory

スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻

学 籍 番 号

217D11

氏 名

前田 和範

研 究 指 導

富山 浩三 教授

第1章 序論

1. 研究の背景

- 1) 地域密着型プロスポーツチームの発展・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- 2) 地域密着型プロスポーツチーム経営の特徴：下部・独立リーグに着目する重要性・・・・7
- 3) 地域密着型プロスポーツチームにおける選手の役割・・・・・・・・・・10
- 4) 研究の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

2. 研究目的と対象

- 1) 研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
- 2) 研究の対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

3. 本研究の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16

第2章 理論的背景

1. コミュニティの概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

2. コミュニティ感覚理論

- 1) コミュニティ感覚（SOC: Sense of community）・・・・・・・・・・23
- 2) 責任としてのコミュニティ感覚（SOC-R: Sense of community as responsibility）・・・・25
- 3) プロ野球独立リーグ所属選手における SOC-R の援用・・・・・・・・・・30

3. 先行研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

第3章 地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する責任感（研究1）

1. プロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

2. 理論的背景および仮説の設定（コミュニティ感覚の先行要因と結果要因）

- 1) ホームタウンに対する責任感の先行要因：チームに対する個人的信念・・・・・・・・35
- 2) ホームタウンに対する責任感の結果要因：ホームタウン関与・・・・・・・・・・39

3. 研究方法

- 1) 測定尺度の設定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
- 2) 予備調査の実施・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
- 3) 本調査の設定および分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

4. 結果

- 1) サンプル属性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
- 2) 測定尺度の信頼性と妥当性の検証・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

3) 因果関係モデルの検証	46
4) 調整変数の影響分析 (t 検定および多母集団同時分析)	47
5. 考察	50
6. 研究1のまとめ	53

第4章 地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する責任感の変容(研究2)

1. 縦断的研究による SOC-R モデルの検証	56
2. 理論的背景及び仮説の設定	57
1) ホームタウン関与とチームに対する個人的信念	58
2) ホームタウン関与とホームタウンに対する責任感	59
3. 研究方法	
1) データ収集	60
2) 測定尺度の設定	60
3) 分析方法	61
4. 結果	
1) サンプル属性	62
2) 縦断データの因子分析	63
3) 共分散構造分析による仮説モデルの検証	67
4) 調整変数の検討：ホームタウン活動への参加回数が各変数の変化量に与える影響	68
5. 考察	69
6. 研究2のまとめ	74

第5章 総合考察

1. 総合考察	77
2. 本研究の限界と今後の課題	81

注釈	83
----	----

参考文献	86
------	----

参考資料	104
------	-----

謝辞	116
----	-----

本論文は、以下の論文に基づき作成されたものである。

1. Maeda, K. and Tomiyama, K. (2019) An athlete's sense of community as responsibility for the hometown: perspective on community-based professional sport organizations. *International Journal of Sport and Health Science*, 17: 155-169.
2. 前田和範・富山浩三 (2020) プロスポーツチームに所属する選手のホームタウンに対する態度変容：コミュニティ感覚理論を援用した縦断的研究. *スポーツマネジメント研究*, 第12巻1号: 35-50.

第1章 序論

1.1. 研究の背景

1.1.1. 地域密着型プロスポーツチーム¹の発展

近年、プロスポーツチームによる地域密着型経営が様々なスポーツリーグに浸透し、発展を遂げている。1990年代に入るまでの日本におけるスポーツチームの形態は、企業所有型の実業団チームが一般的であった。実業団チームは、親会社の社員として雇用したスポーツ選手が活躍する場となり、他の社員の士気向上に寄与してきた他、福利厚生や広告塔の役割を担ってきた（原田, 2015a）。しかし、1990年代初頭のバブル崩壊とともに300もの実業団チームの休廃部が起こるなどして、企業スポーツが急激に衰退していった（笹川スポーツ財団, 2017）。そのような状況下において、日本における地域密着型プロスポーツの基礎を作ったのが、1993年に発足した日本プロサッカーリーグ（以下「Jリーグ」と略す）である。Jリーグは、各クラブに対して特定の市町村をホームタウンとして定めることを義務付け（ホームタウン制度）、規約においても「自治体および都道府県サッカー協会からの全面的な支援が得られること」、「地域社会と一体になったクラブづくり（社会貢献活動を含む）を行い、サッカーをはじめとするスポーツの普及および振興につとめなければならない」、「クラブ名および呼称には地域名が含まれているものとする」などの文言を含むことによって、ホームタウンとの関係性を構築しなければリーグに参入できない仕組みを作った（Jリーグ, 2020）。Jリーグの理念は、スポーツチームが持続可能性を求めて一つの企業への依存から脱することを目指したものであり、地域住民や地元企業の支援・応援を受けながら経営を展開していくための革新的なものであった。Jリーグが発足した頃から、地域コミュニティに

軸足を置き、スポンサー収入やチケット収入などによってビジネスを展開する地域密着型プロスポーツが拡大していった。以下の図1は、国内の主要トップリーグにおいて、呼称を「地域名+愛称」とするチーム数の変遷を表したものである。

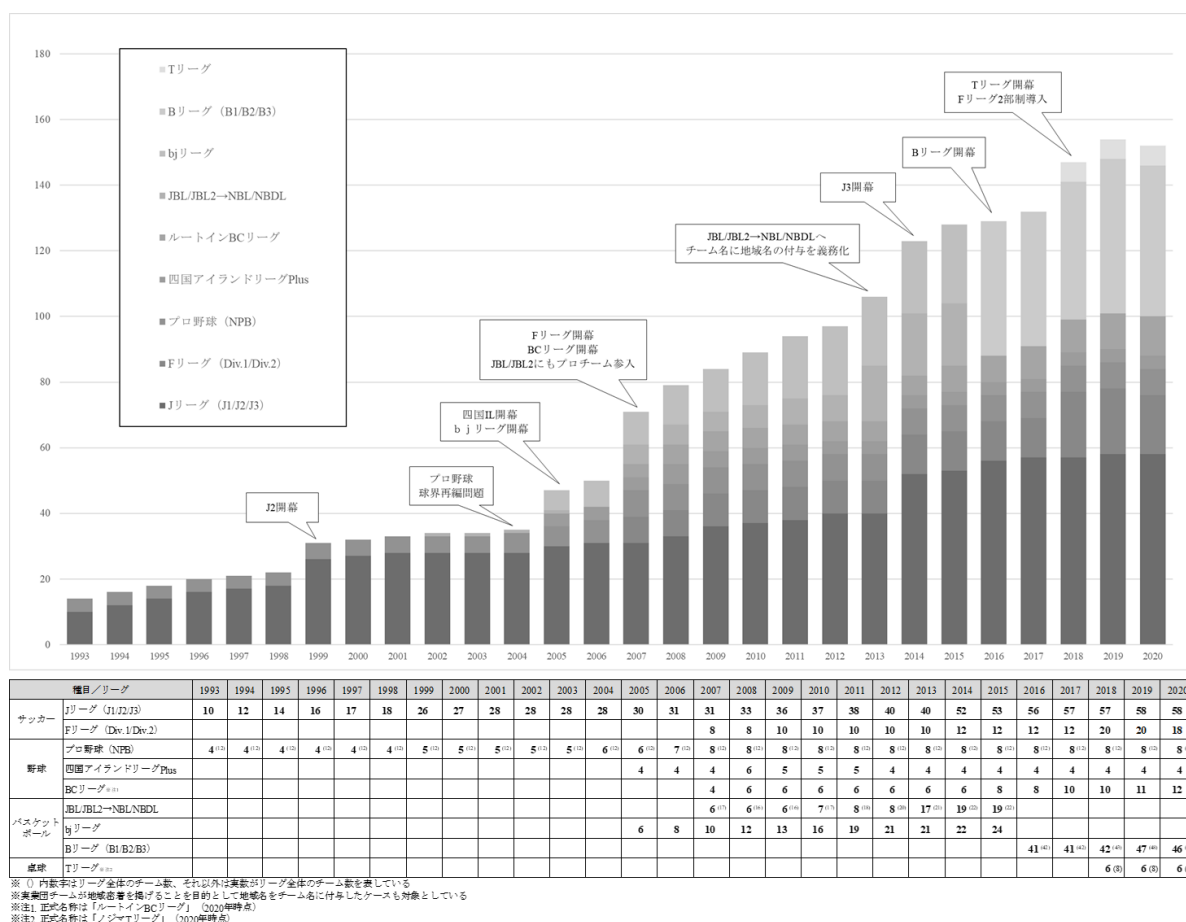


図1. チーム名を「地域名+愛称」とするチーム数の変遷

(出典：各リーグ公式ホームページおよび資料から筆者作成)

Jリーグは10クラブで開幕した後、下部リーグとして1999年にJ2、2014年にJ3が開幕し、2020年現在58クラブが活動している。2007年にはフットサルのFリーグが開幕し、2018年に2

部制が導入された。日本プロ野球機構（以下「NPB」と略す）では、2004年に大阪近鉄バファローズの消滅に端を発した球界再編問題が起こったことをきっかけに、地域密着型経営を重視するチームが増加することとなった。同年には、日本ハムファイターズが拠点を東京都から北海道へ移し「北海道日本ハムファイターズ」へ呼称を変更した他、2005年には新たに東北楽天ゴールデンイーグルスも誕生し、チームが地方都市に拠点を置く動きが顕著になった。その後も、地域名を冠するチームが増えていった（ヤクルトスワローズ→東京ヤクルトスワローズ、西武ライオンズ→埼玉西武ライオンズ）。NPBのチームの多くは依然として親会社への依存度が高く、その経営は実業団スポーツに近いものがあるが、地域名の冠だけでなく、ホームスタジアムのランドマーク化や地域貢献活動の強化によって地域密着に力を入れている。2005年以降にはプロ野球独立リーグが相次いで開幕し、地方都市における野球人材の育成と地域の賑わいづくりを理念に活動するチームも現れるようになった。バスケットボールにおいては、実業団リーグが長らく続いた後の2005年に、新たな独立プロリーグであるbjリーグが設立された。bjリーグが地域密着を掲げて全国的に発展する一方、2007年にJBL（旧実業団リーグ）もプロチームを積極的に受け入れるようになった。2013年にbjリーグとJBLの統合を目指して開幕したNBLでは、リーグ全体として地域密着が意識され始め、伝統的な実業団チームも地域名を呼称に含めることが義務付けられるようになった（東芝ブレイブサンダース→東芝ブレイブサンダース神奈川：現・川崎ブレイブサンダース、日立サンロッカーズ→日立サンロッカーズ東京：現・サンロッカーズ渋谷など）。2016年には統一プロリーグであるBリーグが誕生し、Jリーグに倣った地域密着型経営により、野球、サッカーに次ぐ第三の日本のプロスポーツの柱として躍進を続けている。卓球においては2018年

に Tリーグが開幕し、2020 年現在、プロアマ混在のリーグではあるものの、ホームタウン制を導入し、各チームの活動区域が明確に定められている。

このように、トップスポーツが企業から地域へと軸足を移したことによって、プロスポーツチームは多様なステークホルダー（利害関係者）に配慮した経営を行わなければならなくなったと同時に（広瀬, 2004）、公共性の高い事業を展開する側面から、地域に様々な経済的・社会的インパクトを与えることができる「社会的スポーツ企業」としての役割を果たすようになっていった（原田, 2015a; 富山, 2017）。地域密着型プロスポーツチームが地域にもたらす効果として、堀ほか（2007）は、地域住民がチームを応援することによる新たなコミュニティの形成、住民の地域アイデンティティや誇りの醸成、チームを核とした情報発信などの社会的効果のほか、スポーツビジネスが活性化することによる経済的効果、主にトップチームにおけるスタジアム・アリーナのハード整備効果などを挙げている。今後、他の実業団スポーツにおいても、チームの持続可能性を巡ってプロ化の動きが活発になることが想定され、トップスポーツの地域密着の流れは、ますます定着していくことが考えられる。

1.1.2. 地域密着型プロスポーツチーム経営の特徴：下部・独立リーグに着目する重要性

地域密着型プロスポーツチームの経営において重要な鍵となるのは、ホームタウンにおける多様なステークホルダーとの強固な関係性の構築である。チームは、ホームタウンの自治体行政や経済界、住民、ボランティアなどと連携しながら、ホームタウンをより良くする活動に努めなければならない（松野, 2013; 出口ほか, 2017）。

表1 上段は、国内の主要リーグにおける1チームあたりの年間平均収入の内訳をまとめたものである。J1を除いたすべてのリーグにおいて、スポンサー企業からの広告料収入が50%以上を占めており、入場料収入を合わせると、チーム全体の60~70%の収入が企業協賛やスポーツ観戦によって支えられていることがわかる。また、表1 下段には収入規模毎のチーム数を分類しているが、ほとんどのチームは、年間収入が50億円を下回っており中小企業の域を抜け出さない（林, 2016）。地域密着型プロスポーツチームの経営は、事業規模に比べて社会的な役割やホームタウンにもたらす効果が大きいとされており（原田, 2015b; Agha and Coates, 2015）、特にホームタウンにおける多くのスポンサーやファンの期待に応える必要があるという特徴を有している。

表1. 主要リーグにおける1チームあたりの年間平均収入および収入規模毎のチーム数

科目：収入 (単位：百万円)	J1		J2		J3		B1		B2		BC		四国IL	
	実績	%	実績	%	実績	%	実績	%	実績	%	実績	%	実績	
広告料収入	2,213	44.7	928	56.1	252	54.3	469	50.7	165	54.6	70	53.8	-	
入場料収入	926	18.7	199	12.0	35	7.5	204	22.1	65	21.6	15	11.5	-	
リーグ分配金	524	10.6	157	9.5	40	8.6	45	4.9	17	5.6	0	0.0	-	
物販収入	163	3.3	87	5.3	38	8.2	55	6.0	15	5.0	12	7.7	-	
アカデミー関連収入	436	8.8	97	5.9	25	5.4	40	4.3	13	4.3	10	9.2	-	
その他収入	688	13.9	187	11.3	74	15.9	110	11.9	27	9.0	23	17.7	-	
合計	4,951	100.0	1,655	100.0	464	100.0	924	100.0	302	100.0	130	100.0	103	

年間収入規模毎のチーム数 (単位：チーム)	J1		J2		J3		B1		B2		BC		四国IL	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
50億円以上	8	44.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
10億円以上50億円未満	10	55.6	16	72.7	0	0.0	6	33.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
5億円以上10億円未満	0	0.0	6	27.3	5	33.3	11	61.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0
1億円以上5億円未満	0	0.0	0	0.0	10	66.7	1	5.6	18	100.0	7	70.0	1	25.0
1億円未満	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	30.0	3	75.0
合計	18	100.0	22	100.0	15 ^{※1}	100.0	18	100.0	18	100.0	10	100.0	4	100.0

※J1-J3は2019年度、B1・B2は2018年度、BCは2017年度、四国ILは2019年度。四国ILの内訳、B3においては情報が開示されていないため掲載無。

※注1. J3八戸は含まれていない。

(出典：いずれも2020年10月20日閲覧)

Jリーグ：Jクラブ個別経営情報開示資料（2019年度）（https://www.jleague.jp/docs/aboutj/club-h31kaiji_001.pdf）

Bリーグ：2018-2019シーズン（2018年度）クラブ決算概要（https://www.bleague.jp/files/user/about/pdf/financial_settlement_2018.pdf）

BCリーグ：小林（2019）に筆者が加筆修正

四国アイランドリーグPlus：2019年5法人経営報告詳細（<http://www.iblj.co.jp/assets/uploads/2020/04/8a4925aaa09ed0f20fbad2637978710a.pdf>）

プロスポーツチームのビジネスは、利潤追求を目標とする営利ビジネスと、地域社会をより良くする使命の達成を目標とする非営利ビジネスの二面性を持つことから（原田,2015b）、試合を実施して興行収入を得ることの他、ホームタウンに対する公共性の高い事業活動（例：ホームタウン活動）を展開していくことが求められる。ホームタウン活動は、Jリーグによって「ホームタウンの人々との心を通わせるためのさまざまな活動」と定義されており、その活動目的はサッカーの普及、多様性・多文化性、まちづくり、介護予防・健康増進、環境保護、教育、震災復興・防災、その他の8つに分類されている（Jリーグ,2019）。Jリーグがビジネスとして成功を収めてきた要因は、公共的な存在として事業性を前面に出してこなかったことであると言われており（広瀬,2004）、チームにとってこのようなホームタウン活動を積極的に実施する意義は大きい。CSR（Corporate Social Responsibility：企業の社会的責任）やマーケティングの観点からも、ホームタウン活動は多岐にわたるステークホルダーマネジメントに役立つ（Babiak and Wolfe, 2009）他、チームのプロモーションの一環として設計されることによって、投資対象としてのチームの価値を向上させる役割を担っている（武藤,2009；藤本,2008）。近年では、チームがホームタウンに貢献するという一方向のベクトルだけではなく、ホームタウンの各団体と連携・協働して価値を創出しようとするCSV（Creating Shared Value: 共通価値の創造）の考え方が提唱され始めている。特に2019年から始まったJリーグの「シャレン！（社会連携活動）」はCSVの好例であり、ホームタウンの課題解決を目的とする社会連携活動は、地域におけるプロスポーツチームの意義を高めている。Jリーグが起点となったこのような発想と活動は、地域密着を掲げるあらゆるプロスポーツチームに欠かせないものとなっている。

一方で、このような地域密着型プロスポーツの課題は、経営基盤の安定化である。先行研究および過去の報告によると、プロスポーツの裾野拡大に寄与してきた下部・独立リーグに所属するチームは、人口減少下にある地方都市をホームタウンとしている場合が多く、市場規模も小さいために安定したスポンサー収入が見込めず、経営危機に瀕するチームも後を絶たない（Yokum et al., 2006; Agha, 2013; 戸塚, 2015; Agha and Coates, 2015; 小林, 2019）。みるスポーツとしても、トップチームに比べて選手のプレーの質も劣ることから、感動を生み出す要素の一つである「卓越したプレー（押見・原田, 2010）」がみられないこともまた、集客の苦戦に繋がっていることが考えられる。ホームタウン活動に関しても、経営的に安定しているチームよりも経営資源に乏しいチームにおいて積極的に行われる傾向がある（松橋・金子, 2007）ことから、特に下部・独立リーグに所属するチームでは、より少ない経営資源の中で、ホームタウン活動の展開を含めた効率的なチームマネジメントが求められている。

1.1.3. 地域密着型プロスポーツチームにおける選手の役割

元来の選手の職業的役割は、高度なスキルと身体能力を発揮することによって、チームのプロダクトである試合を成立させ、その品質を高めるというものであった（井上, 2009）。しかし、地域密着型プロスポーツチームに所属する選手は、チームの単なる成員ではなく、ホームタウン活動の主体としてチームの事業活動に貢献する重要な役割を担っている傾向が強い。ホームタウン活動の具体的な内容に着目してみると、主に選手が中心となり、地域のイベントへの参加、スポーツ教室の開催、教育機関や病棟への訪問、防災や環境保護に関する啓発活動などを展開してい

る例が並ぶ。また、選手は、試合という特殊な商品を取り扱うプロスポーツ組織の重要な経営資源であり、日々練習や試合を通じて競技力を高めながらフィールド外でも様々な活動に参加することによって、メディアを通じて消費者に認知されるという「公の人格」を持っている(勝田,2005; 猪俣,2009; 新井・浅田,2019)。そのため、ファンやスポンサーを含むステークホルダーとの関係性をつくる中核的・媒介的な役割も担っていると言える。一方で、選手は試合におけるパフォーマンスによって評価され年俵が決まるため、練習やトレーニングに時間を割くことを望む傾向があり、ホームタウン活動などの諸活動は意識の中で二の次になりがちになるというジレンマもある(村山,2011; 池田,2016)。特に近年では、地域密着型プロスポーツの裾野拡大によって、多様な人材がプロ選手という職業を選択する機会が増えていることから(松尾,2015; 石原,2015; 小林,2019)、チームは選手のモチベーションや、活動における振る舞いなどを含めてマネジメントしていかなければ、ホームタウンに対して質の高い活動を行うことができないのである。

地域密着型プロスポーツチームは、ホームタウン全体のニーズに応え、組織全体として高い倫理観を持って課題解決に挑むという姿勢を示す必要があることから(大西,2018)、ホームタウン活動の先頭に立つ選手自身が、チームとステークホルダーの関係性を築く際の中核・触媒としての自覚を持ち、行動しなければならない。つまり、選手のホームタウンに対する態度を詳細にとらえ、マネジメントしていくことが、チーム運営にとっても必須課題となる。本研究では、特にプレーとホームタウン活動などへの活動参加の両立を強いられやすい状況が想定される、下部・独立リーグ所属選手のホームタウンに対する態度形成プロセスに焦点を当てる。

1.1.4. 研究の意義

本研究は、地域密着型プロスポーツチームのマネジメントを考える上で、地域における選手の触媒的な役割に着目して行われた先駆的な研究である。ここまで述べてきたように、下部・独立リーグ所属のチームは、特にマネジメント上の課題が多く、試合以外の場面でもホームタウンの期待に応えることが求められている。ホームタウン活動の質を高めるためには、前述した選手のプレーと活動参加の間にあるジレンマの解消や、選手自身がホームタウンに対して形成する態度を理解し、適切なマネジメントを講じる必要があるとされる。本研究は、そのような選手のホームタウンに対する態度を検討することで、チームマネジメントの方向性を判断するための学術的知見と・実践的示唆を提供できる点において、社会的意義を有していると考えられる。

これまでの地域密着型プロスポーツチームに関する研究では、ファンやサポーターなどの観戦者や地域住民を対象に、彼らがどのようにチームと心理的な結びつきを感じているかに関する研究（吉田,2011; 出口ほか,2017,2018; 井上ほか,2018; 和田・松岡,2020）や、観戦者どうしのファンコミュニティに関する研究（仲澤・吉田,2015; 吉田ほか,2017）、観戦者のチームに対する評価（富山,2014）など、観戦者に関する研究が最も多く蓄積されてきた。スポーツ組織側の運営や地域密着経営戦略に関する研究も、松橋・金子（2007）や市木ほか（2014）をはじめとして一定数存在するものの、選手のホームタウンに対する態度を検討した研究は見られない。選手を対象とした研究においても、職業としての選手の課題に関する研究（井上,2009）や、選手が消費者の購買行動に与える影響に関する研究（備前・原田,2010）、選手のブランド・イメージに関する研究（Arai et al., 2013, 2014）などは一定数存在するものの、選手個々人に調査を行った研究は無く、選手が

ホームタウンに対してどのように態度形成を行うかに注目した研究は存在しない。先行研究では、選手をアスリートの側面からしかとらえることができず、特に彼らを「チームが地域密着戦略を展開するための重要な資源」としてとらえることができてこなかった。

選手のような特定の組織に属する成員のホームタウンに対する態度を理解するには、コミュニティ心理学分野で議論されてきたコミュニティ感覚理論を援用することが効果的と考えられ、中でも「責任としてのコミュニティ感覚 (sense of community as responsibility : 以下「SOC-R」と略す)」という概念 (Nowell and Boyd, 2010) が応用可能である。SOC-R は、人々が相互依存しあう特定のコミュニティ (地域、組織、ファンコミュニティなど) において、個人がコミュニティ全体をより良くしようとしたり、コミュニティ内の他者の幸福を実現しようとする際に認知する義務感や責任感を指す (Nowell and Boyd, 2010)。この概念を援用することによって、選手がチームに対する態度だけでなく、ホームタウンに対する態度をどのように形成するかを明らかにすることが可能になると考えられる。SOC-R 研究において、研究対象の拡張や多様な文脈における基礎理論モデルの検証が求められていることから (Nowell and Boyd, 2014a, 2017)、本研究は特に、学際的にも有益な学術的知見を提供できることが考えられる。

1.2. 研究の目的と対象

1.2.1. 研究の目的

本研究の目的は、コミュニティ感覚の観点から、地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する態度がどのような要因と関わり合って形成されるかを明らかにすることで

ある。

1.2.2. 研究の対象

本研究の対象は、プロ野球独立リーグの球団に所属する選手とする。前述した通り、Jリーグを起点として地域密着型プロスポーツは全国各地で発展しているものの、プロ野球独立リーグ球団は特に事業規模が小さい。そのため経営資源が少なく、他のリーグに所属するチームに比べて、選手のプレーとホームタウン活動等への参加の間にあるジレンマも強く存在していることが考えられる。したがって、プロ野球独立リーグ球団に所属する選手のホームタウンに対する態度を解明することは学術的にも価値があり、今後も拡大する地域密着型プロスポーツチームに対して実践的な知見を与えることにもつながる。

日本のプロ野球独立リーグは、一般社団法人日本独立リーグ野球機構に属する四国アイランドリーグ Plus とルートイン BC リーグで構成される。両リーグは、一般社団法人日本独立リーグ機構を合同機構としているため、合同トライアウトやグランドチャンピオンシップ（両リーグのチャンピオン同士が対戦する試合）を行っている。両リーグの理念には、野球の質向上（選手がNPB入りを目指すこと）とホームタウンへの貢献の両立がミッションとして含まれている。チームには、高校や大学卒業および中退後すぐに入団する選手、社会人野球やNPBを経て入団する選手など、多様な経歴の選手が在籍する。プロ野球独立リーグは、選手がNPB入りを目指し、毎年行われるドラフト会議において指名されることを目指す「夢をかなえるための場所」と同時に、「最後の望みをかける場所」、「野球を諦めるための場所」とも呼ばれ、近年では若者にとっての

自分の探しの場にもなっているという主張も見られる（石原, 2015; 喜瀬, 2016）。育成リーグという側面は選手の給与面にも表れており、収入は月に 10~40 万円程度であるため競技だけでの生活が難しく、オフシーズンにアルバイトや地域のスポンサー企業への就労を追加で行うことにより生計を立てている選手も多く存在するため（井上, 2009; 神吉, 2014）、基本的には選手が一つのチームに長く在籍することも稀である。

チームの事業規模は大きくない一方で、地元企業がチームを地域に無くてはならない存在とみなして支援をしている様子や、チームが多く地域活動を行うことで行政の役割を代行している点、またファンにとってはチームとの距離が近い身近な存在となっていることなど、ホームタウンにとってもチームの一定の社会的価値が認められている（武藤, 2009; 神吉, 2014; 清宮, 2016）。プロ野球独立リーグの仕組みが早くから存在するアメリカ合衆国においても、同様のチームによる地域への効果とその経営的課題が存在している。メジャーリーグの傘下ではない独立リーグ所属のチームでは、特に地域住民にとって親近感を感じてもらえるようなチームマネジメントを心掛けることによって地域に受け入れられている他（Kraus, 2003）、自由度の高い興行運営や地域独自の放送契約などを通じて経営に独自性を持たせることに成功している（Zhang et al. 1998）。ただし、人口規模が小さい地域に位置するチームは財政的に不安定である傾向は依然として顕著である（Yokum et al., 2006; Agha, 2013; Agha and Coates, 2015）。地域からの期待は高いものの経営難易度が高いという地域密着型のプロ野球独立リーグ事業は、国際的にみてもある一定の普遍性を有していることが考えられる。つまり、プロ野球独立リーグレベルの地域密着型プロスポーツチームにおいて、そのチームマネジメントのあり方を検討していくことは今後も重要であり、継続す

るべきものである。さらに、前述の通り J リーグ等の他のトップリーグにおいても、社会課題解決のための活動がさらに促進されていくことから、選手の試合以外での役割に着目し、選手のホームタウンに対する態度を解明していくことは有益であると考えられる。

1.3. 本研究の構成

本研究は、5 章から構成される。各章の内容については図 2 に示した通りである。

第 1 章では、地域密着型プロスポーツチームが発展してきた背景と、その経営の特徴や課題について概説し、下部・独立リーグのチームに所属する選手を対象とする本研究の目的と意義をまとめた。

第 2 章では、先行研究のレビューを行った。まず、コミュニティの概念を整理し、ホームタウンと地域密着型プロスポーツチーム、および選手との関係性について検討した上で、コミュニティ感覚理論の概説を行った。そして、コミュニティ感覚の一つである SOC-R をプロ野球独立リーグ球団所属選手の文脈に援用するため、SOC-R モデルの諸要因を確認した。

第 3 章では、選手のホームタウンに対する責任感に着目した SOC-R モデルを構築し、先行要因と結果要因を横断的に特定する実証研究を行った（研究 1）。研究 1 では、在籍期間による影響についても検討し、在籍期間が 1 年未満と 1 年以上の選手群で、SOC-R モデル内の要因間の影響が異なることが示唆された。

第 4 章では、追跡調査によって 1 シーズンを過ごした後の選手を対象とした縦断的研究を行い、選手の SOC-R モデルにおける各要因の変化について実証的に明らかにした（研究 2）。研究 2 で

はまた、経時変化を加味した新たな SOC-R モデルを構築することにより、これまで SOC-R 研究において明らかにされてこなかったモデルの循環性についても検証した。

第 5 章では、総合考察および総括と展望から本研究のまとめを行い、本研究の有用性と限界について検討した。

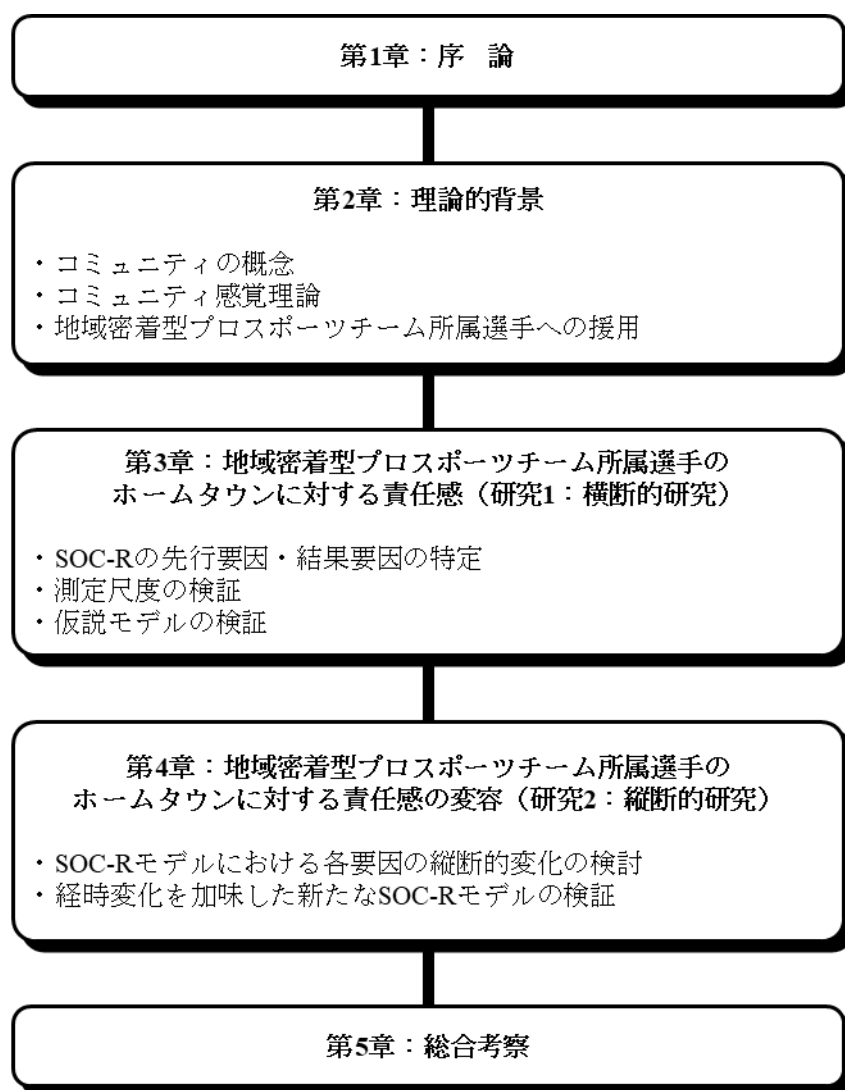


図 2. 本研究の構成

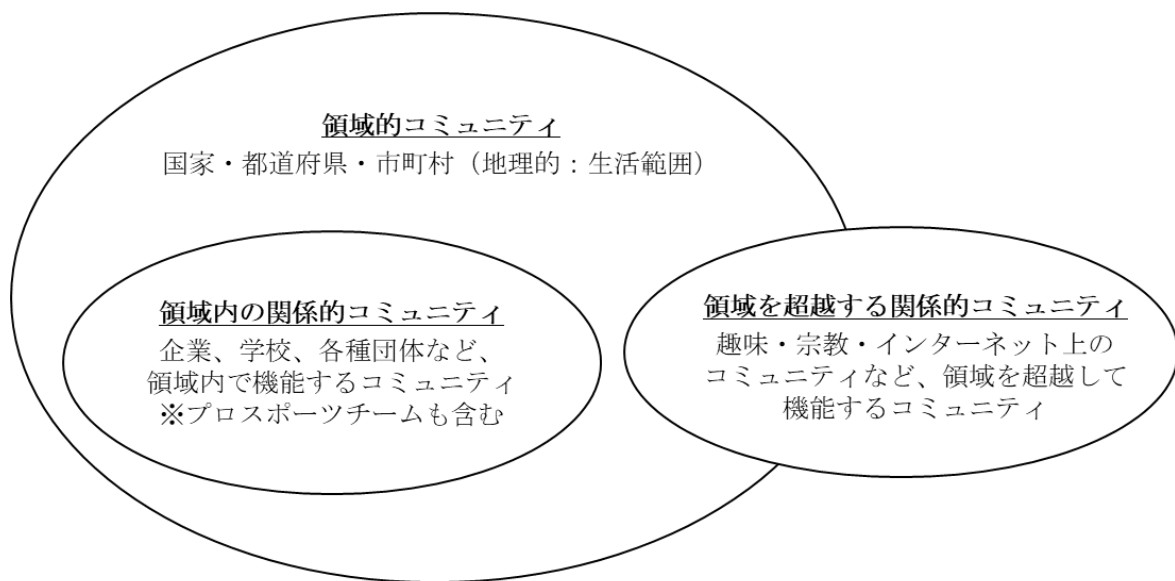
第2章 理論的背景

本章では、選手のホームタウンに対する態度を検討するにあたり、まずコミュニティの概念を整理し、本研究におけるコミュニティの定義を行う。次に、コミュニティ感覚理論のレビューを行う。そして、地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する態度について、コミュニティ感覚理論の援用を試みる。最後に、まとめと研究課題を提示する。

2.1. コミュニティの概念

コミュニティとは、ラテン語のコミュニース (*communus*) という言葉が語源となっており、「共同の貢献」や「一緒に任務を遂行すること」を意味している (鈴木, 1986)。コミュニティ研究の第一人者であるアメリカの社会学者マッキーバー (1975) は、村や町、地方や国などの共同生活のいずれかの領域を指すものをコミュニティ、特定の興味や関心を追求するための組織体をアソシエーションと区別した。また、Hillery (1955) は数ある文献における 94 ものコミュニティの事例を検討した結果、すべてに共通する要素は無いものの、その定義の多くには「社会的相互作用」「領域性」「共通の絆」があることを明らかにした。テンニエス (1957) は歴史の変遷について「ゲマインシャフト (地縁や血縁、友情で結びついた自然発生的コミュニティ) からゲゼルシャフト (利益や機能を第一に追求した作為的コミュニティ) へ」という言葉で表現した。つまり、古くからのコミュニティの概念は人の生活する領域 (地域) に基づいた「領域的コミュニティ (近隣、村、町、都市、国など)」と、領域や場所に関係なく機能に基づいた「関係的コミュニティ (組織、趣味や宗教グループなど)」の二つに区別されてきたことがわかる (Gusfield, 1975)。この二

つの区別は、コミュニティ心理学において対象とされるコミュニティのとらえ方として、現代でも一般化されている（植村・笹尾, 2007）。「領域的コミュニティ」と「関係的コミュニティ」はいずれも重層性を有しており、人々は特定の領域的コミュニティで生活すると同時に、複数の関係的コミュニティに所属していることもわかる（Bess et al., 2002）。



テンニエス（1957）、Gusfield（1975）、植村・笹尾（2007）を基に筆者作成

図 3. コミュニティ概念のまとめ

図 3 は、コミュニティの概念をまとめたものである。領域的コミュニティは、国、都道府県、市町村などを指し、さらに狭義では近所づきあいをする生活圏ともとらえることができる。一方、関係的コミュニティは、領域内外に存在しており、領域の中にある関係的コミュニティには、学校や、地域に軸足を置いて活動する企業などが挙げられる。また、関係的コミュニティには領域

を超越するものもあり、それらは趣味や宗教など、共通の絆さえあれば「お互いがつながっていること」を実感できる共同体を指す。近年ではインターネットの普及により、オンラインゲームなどにおいて、世界中の人々が嗜好するゲームを介してつながり、連帯感を感じられるような関係的コミュニティが形成されるようになってきている。プロスポーツにおいては、地域密着型プロスポーツチームは領域内の関係的コミュニティ（アソシエーション）に分類され、ファン同士で形成されるブランドコミュニティとしてのファンコミュニティ（仲澤・吉田,2015）などは領域を超越する関係的コミュニティに分類されるだろう。注意しなければならないのは、多くの研究者によって研究されてきたコミュニティという概念自体に統一的な見解が無いことであり、文脈やコミュニティをつくる人の目的によってその規模や形態、結合の強さや持続性が変わってくるものであることから（マッキーバー,1975; 金子ら,2009）、研究対象としてのコミュニティは、研究の文脈に合わせて都度操作的に定義する必要がある。次に、本研究におけるコミュニティの定義について検討する。

人とコミュニティとの関係性の理解には、コミュニティ心理学における Bronfenbrenner (1979) の生態学的システム理論が用いられてきた。Bronfenbrenner (1979) は、マトリョーシカの暗喩を用いて、人が重層性のあるコミュニティに属し、相互作用の中で生きていることを説明した（図4）。

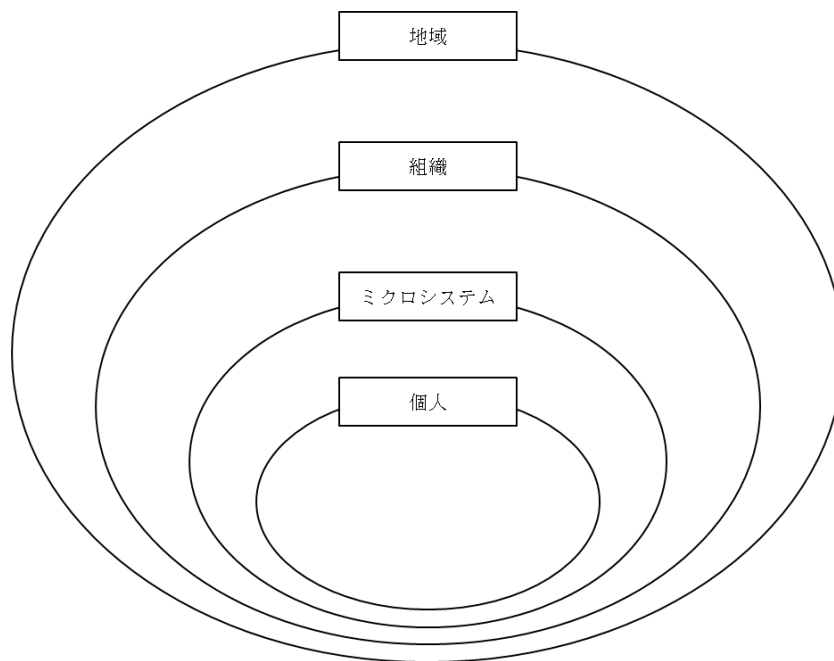


図 4. Bronfenbrenner (1979) による生態学的システム理論

このアプローチに基づいて、ホームタウンと地域密着型プロスポーツチーム、および選手の関係性を整理すると、「地域」にはホームタウン、「組織」には地域密着型プロスポーツチームの運営会社、「ミクロシステム」には地域密着型プロスポーツチームにおいて選手・監督・コーチなどで構成される競技組織としてのチーム、そして「個人」には選手を当てはめることができる。つまり、選手は、チームに所属すると同時に、運営会社の人的資源としても機能しつつ、ホームタウンに暮らす一人の住人として生活していることが見えてくる。地域密着型プロスポーツチームは、ホームタウンの中でコミュニティビジネスを展開する組織（風見, 2009）であることから、「地域」コミュニティにあたるホームタウンを意識した活動を展開することによって、初めて存在価値が示されることになる。前述の通り、ホームタウン内の多様なステークホルダーとの関係性を構築することが安定経営の必須条件であることから、チームは地域の活性化や賑わいづくりと

いう理念を掲げ、ホームタウンをより良くする姿勢を表しているのである。同心円状に広がるこの関係性において、地域密着型プロスポーツチームはホームタウンに包摂された組織であるとみなすことができるため、本研究で扱うコミュニティは、重層性を加味した上で「ホームタウン」と定義する。

スポーツチームとコミュニティの関係性は先行研究においても明らかにされている。Chalip (2006) は、地域住民がスポーツ観戦を通じて地元チームとアイデンティティを共有することによって、コミュニティ内の社会資本を形成する可能性を示唆した。ただしそれは、スポーツチームが自らのプロダクトであるスポーツを、いかに地域コミュニティに価値のあるものとして設計し、落とし込むことができるかにかかっている (Chalip, 2006)。スポーツ社会学の観点からは、Hassan (2014) や Nicholson et al. (2014) によって、スポーツがコミュニティに対して良い影響を与えるかどうかは過大評価されている場合が多いことが指摘されており、単にスポーツを良いものとみなすのではなく、その有用性がどのようなものを特定しなければならない。さらに、Long and Sanderson (2001) もまた、スポーツ政策の観点から「スポーツのためのスポーツはもはや価値を持たない」と指摘している。つまり、スポーツに関わる組織は、最終的に地域や社会に良い影響を与えられるようなマネジメントを心掛けなければならないことが明らかである。

その点において、地域密着型プロスポーツチームが、経営理念に地域密着や地域貢献を掲げ、ホームタウンとの良好な関係構築を目指していることは、スポーツマネジメントに基づく効果的な戦略であると言える。チーム名に地域名を冠することや、ホームタウンに根付く文化や特産品をチーム名、マスコット、イベントプログラム等に散りばめていく戦略は、ホームタウンのシン

ボルとしてのスポーツチームのあり方を示している。

ここまでを整理すると、コミュニティの概念は多岐に渡り、研究の文脈に合わせて定義することが必要であった。本研究においては、コミュニティを領域的コミュニティであるホームタウンとしつつも、そこには関係的コミュニティ（アソシエーション）が包摂されているものであることが理解できる。つまり、地域密着型プロスポーツチームは、ホームタウンという領域的コミュニティに包摂されるアソシエーションと位置付けられる。コミュニティの重層性を考慮すると、地域密着型プロスポーツチームによるホームタウン活動は、組織およびマイクロシステム内の個人である選手を活用し、最外層であるホームタウンに向けて実行される戦略の一つであることが理解できる。以上のことから、本研究では、選手がチームというアソシエーションを通じて、ホームタウンに対して形成する態度を明らかにしていく。

2.2. コミュニティ感覚理論

2.2.1. コミュニティ感覚（SOC: Sense of community）

人のコミュニティに対する態度を説明するには、コミュニティ感覚理論が援用可能である。本研究で援用を試みる SOC-R の起源は、Sarason（1974）の提唱したコミュニティ感覚（Sense of community, 以下「SOC」と略す）にある。本項では、まず SOC について概説する。SOC は、「他者との類似性の認識、他者との承認された相互依存関係、他者が期待するものを与え実行することによってその相互依存関係を進んで維持しようとする意欲、自分が、大きく依存可能な安定した構造の一部であるという感覚」（Sarason, 1974, p. 157）と定義される。Sarason（1974）はまた、

SOC が、差し迫った社会問題や、疎外感、利己心、絶望などの個人主義の暗い側面を理解する鍵概念であると主張した。その後 Sarason (1974) の SOC に関する理論的考察は、McMillan and Chavis (1986) によって、「メンバーが抱く所属感、他者やグループに関わろうとする感覚、メンバー同士が団結するための関与を通じてそれぞれのニーズが充足されるという信念を共有すること」と再定義され、「メンバーシップ」、「影響」、「ニーズの充足と統合」、「共有された情緒的つながり」の 4 つの要素を有するものであることが提唱された。これらの 4 要素はまた、個人の SOC を発達させる際の順序も表している (McMillan, 1996, 2011; McMillan and Chavis, 1986)。

飯田 (2014) は、4 つの要素について、以下のようにまとめている。メンバーシップは、人が領域や目的、関心によってコミュニティの境界をつくり、メンバーとして受容されている所属感を感じ、それによって情緒的安心感を得た人が、金銭や労力などの有形無形の投資活動を行うというプロセスで形成される。メンバーシップを得た人は、影響力を持つようになり、コミュニティとの相互作用を感じたり、メンバー間で親密性を生むために同調を生じさせたり、互恵的関係性を重視するようになる。メンバーはコミュニティに所属することによって、自らのニーズを満たすことが可能になり、それによって他者のニーズも充足することができるという感覚を得る。そのようにして、メンバー間で交流したり様々な出来事を共有することによって、人はコミュニティに積極的に関与するようになり、結束を深めていく。

SOC の 4 つの要素を実証するために、多くの研究が行われてきた。代表的な測定尺度として Chavis et al. (1986) のコミュニティ感覚尺度 (SCI: Sense of community index) が挙げられるが、その測定尺度の開発を含む多くの量的研究において、4 要素は確認されなかった (Chavis et al., 1986;

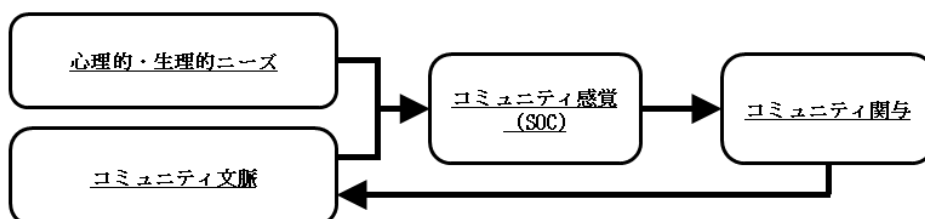
Perkins et al., 1990; Bishop et al., 1997; Obst and White, 2004, 2007; Proescholdbell et al., 2006; Flaherty et al., 2014)。妥当性の問題を解消するため、その後、Peterson et al. (2008) が、簡易版コミュニティ感覚尺度 (BSCS: Brief sense of community scale) を開発した。さらに、Prezza et al. (2009) は、McMillan and Chavis (1986) の4つの要素に「社会的結束」と「必要な時の手助け」という2要素を追加し、多面的コミュニティ感覚尺度 (MTSOC: Multidimensional sense of community scale) を開発し、地域住民のSOCについての多次元評価を提示した。SCIとBSCSは、SFファン (Obst et al., 2002a, 2002b)、ゲイコミュニティ (Proescholdbel et al., 2006)、ドイツ海軍 (Wombacher et al., 2010) など、様々な関係的コミュニティのSOC測定にも使用されている。SOC研究は、スポーツマネジメント分野においても散見され、学生アスリートの大学に対する態度 (Clopton, 2007, 2008; Elkins et al., 2011; Warner and Dixson, 2011; Warner et al., 2012, 2013)、スポーツチームのホームタウンにおける住民やファンの地域に対する態度 (藤本ほか 2012; 富山, 2014; 久保・山口, 2017) を検討した研究が存在する。このようにして、SOCは様々な文脈において研究が蓄積され、人のコミュニティに対する態度を評価するものとして取り扱われてきた。

2.2.2. 責任としてのコミュニティ感覚 (SOC-R: Sense of community as responsibility)

一方で、ほとんどのSOC研究において、McMillan and Chavis (1986) の4要素を特定する尺度の妥当性が確認されておらず、議論の余地が残っている。それについて、Nowell and Boyd (2010, 2011, 2014a) は、McMillan and Chavis (1986) のSOCが人のニーズのみから生まれるものと想定されていることが原因であると主張し、ニーズに基づいたSOCの補完的な概念として、責任に基

づいた SOC-R を提案した (図 5)。

McMillan and Chavis (1986) のSOCモデル



Nowell and Boyd (2010) のSOC-Rモデル

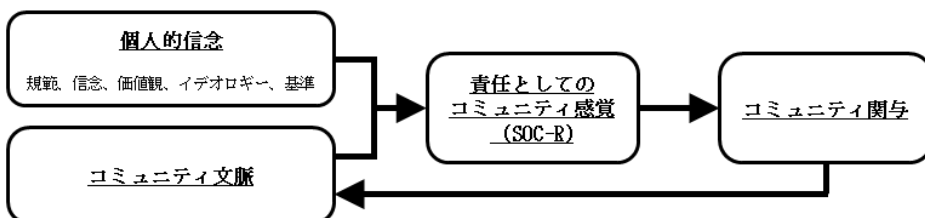


図 5. コミュニティ感覚理論モデルの対比 (Nowell and Boyd, 2010)

Nowell and Boyd (2010) によって提示された SOC-R は、個人の所属するコミュニティ全体、もしくは同じコミュニティ内に所属する他者の幸福を実現しようとする義務感や責任感を指す。それは、主に職場など、個人が外圧的なタスクによって行動が引き起こされることの多い組織において顕著に表れる (Boyd and Nowell, 2017)。Nowell and Boyd (2010) は、SOC-R は McMillan and Chavis (1986) の SOC の概念を補完するものであり、SOC 自体は外圧的なタスクを想定しておらず、個人の自発的なニーズを満たす文脈のみを想定したものであることを問題視した。その根拠として、SOC は McClelland (1961) のニーズベース理論を下敷きにしたものであり、SCI や BSCS の項目が、「所属のニーズ」「力のニーズ」「達成のニーズ」に基づいていることを示唆した。SOC

では、人々がコミュニティ感覚を形成する資源が、所属や権力、愛情など、個人の自発的な心理的・生理的ニーズや自己利益に傾倒しているが(図5)、特に組織などに所属する文脈においては、外圧的な他の要素が存在することが考えられる。

こうした主張によって、Nowell and Boyd (2010, 2014a) は、March and Olsen (1989) の「適合の論理」を参照して SOC-R 概念モデルを開発した(図5および図6)。

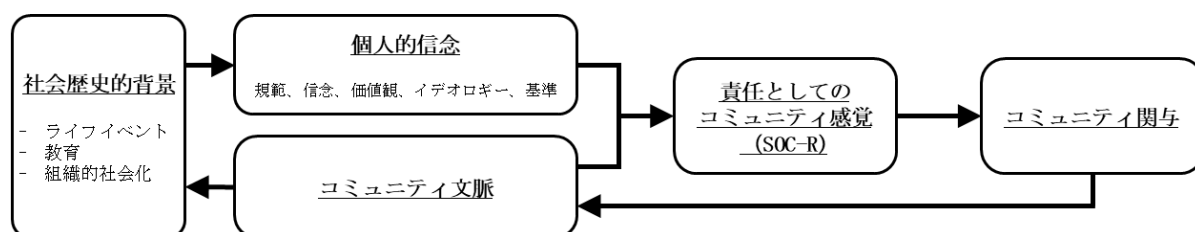


図 6. Nowell and Boyd (2010) の SOC-R 概念モデル

人は特定の文脈において、様々な出来事の経験、教育的および制度的社会化を通じて、個人的信念を構築する。そのプロセスでは、「今、どういう状況か、その中でどのような役割が果たされるべきか、その状況における役割の義務は何か」を考える (March and Olsen, 1989)。SOC-R モデルでは、人の個人的信念がコミュニティの持つ規範、信念、価値観、イデオロギー、基準などの影響を受けて形成されることによって(個人的信念)、責任感が醸成され (SOC-R)、適切な行動を起こすようになること(コミュニティ関与)が想定される。コミュニティ関与は、個人の価値観や信念に関連するコミュニティ文脈との相互作用によって促進される (Nowell and Boyd, 2014a)。

これまでの SOC-R に関する研究を概観すると、まず、Nowell and Boyd (2014a) は、協同組合に対する所属メンバーの責任感が、メンバー自身の満足度やリーダーシップに与える影響を検討

するため、SOC-R 測定尺度を開発し検証を行った。その結果、SOC-R が高い人は周囲からリーダーであるとみなされる可能性が高く、協同組合に対する関与（会議の出席率や従事する時間）も大きいことが示唆された（Nowell and Boyd, 2014a）。さらに Boyd and Nowell（2017）は、医療従事者の組織に対する SOC-R が組織市民行動やウェルビーイングに与える影響を検討した他、Boyd et al.（2017）や Boyd and Nowell（2020）は、公共サービスに従事する団体職員における公共サービス動機と組織への SOC-R、SOC、組織に対する関与などの関係を検証した。Treitler et al.（2018）は、薬物乱用防止連合のメンバーを対象として、項目反応理論を用いた SOC-R 尺度の信頼性・妥当性の向上を図った。さらに、研究対象は組織だけでなく、都市の地域住民などに広がりを見せ、Yang et al.（2020a, 2020b）は、中国における様々な都市の住民を対象とし、SOC-R がそれぞれの地域コミュニティへのアイデンティティを介して、地域住民に対する利他的な行動を誘発することを実証した。このように、2010 年以降から始まった SOC-R 研究は、広がりを見せるものの少なく、特に SOC-R の先行要因や結果要因は研究の対象によって異なるものであることから（Boyd et al., 2017）、SOC-R を様々な設定や対象において解明していくことは今後も重要となっている。SOC-R は特定のコミュニティにおける個人の態度を理解することに役立つ概念であることから、本研究の対象である地域密着型プロスポーツチームの事例にも応用できる。これまでスポーツの文脈に応用されたことはなく、本研究においてプロスポーツチーム所属選手という特有の対象の SOC-R を解明することは、SOC-R 研究の学術的価値向上にも貢献できることが考えられる。

既存の SOC-R 研究の限界は、主として 3 点あげられる。第一に、SOC-R がどのように形成されたかが十分に明らかになっていない点である。先行研究において、SOC-R はほとんどの場合にお

いて独立変数として扱われており、個人的信念の影響が十分に考慮されておらず、SOC-R の先行要因は未だ不明確である (Nowell and Boyd, 2014a; Yang et al, 2020a, 2020b)。Boyd et al. (2017) や Boyd and Nowell (2020) は公共サービス動機を SOC-R の先行要因として取り扱っているものの、公共サービス動機は個人の特定のコミュニティや組織に向けた態度を示すものではないため (i.e., 「社会で影響を与えることは、個人的に何かを達成することよりも意味が大きい」「私は社会的に良いものに多大な犠牲を払う準備ができています」等)、個人が関わるコミュニティや組織に応じた要因の設定が必要とされている (Boyd et al., 2017)。第二に、人が同時に複数のコミュニティに属している重層性を考慮していない点である (Nowell and Boyd, 2017)。従業員の組織に対する SOC-R、および住民の地域に対する SOC-R など、すべてが単一コミュニティの中で議論が収まっているため、前項において述べた生態学的システム理論 (Bronfenbrenner, 1979) の観点からも、人に対する多様なコミュニティの影響が検討できていない。第三に、時間の経過を加味した実証研究が無い点である。SOC-R モデルは、SOC-R の結果要因としてのコミュニティ関与が、さらに人のコミュニティ文脈との相互作用を促進するということが想定されている (Nowell and Boyd, 2010)。しかし、このパスの根拠は、Long and Perkins (2007) の一定期間特定の地域に居住した地域住民によるイベント参加などの行動が、個人の SOC に影響を与えるという結果を取り入れて組み合わせたものに過ぎない。つまり、SOC-R モデルを包括的に検証するためには、特定のコミュニティ文脈において、新たに所属するメンバーを含むサンプルを対象とし、同じサンプルから少なくとも 2 時点以上の縦断データを収集した上で、経時変化を加味したモデルの成立を検証することが必要となる。

本研究では、地域密着型プロスポーツチームに所属する選手を対象とし、チームに所属しつつ、主に仕事としての外圧を感じる中で個人的信念を形成させ、ホームタウンに対する責任感を持つことによってホームタウンに関与していくプロセスを検証する。つまり、地域密着型プロスポーツチーム所属選手という個人・ミクロレベル・組織・地域の重層性を反映した特殊な対象を取り扱うことから、SOC-R に関わる諸概念を再定義することで、重層性を考慮した SOC-R の援用が可能となる。さらに、シーズンを通じた SOC-R および関係要因の経時変化を縦断的に検証することによって、示されている研究上の課題を克服することを試みる。

2.2.3. プロ野球独立リーグ球団所属選手における SOC-R の援用

次に、SOC-R モデルをプロ野球独立リーグ球団所属選手において検討するため、各要因に関する操作定義を行った（図 7）。

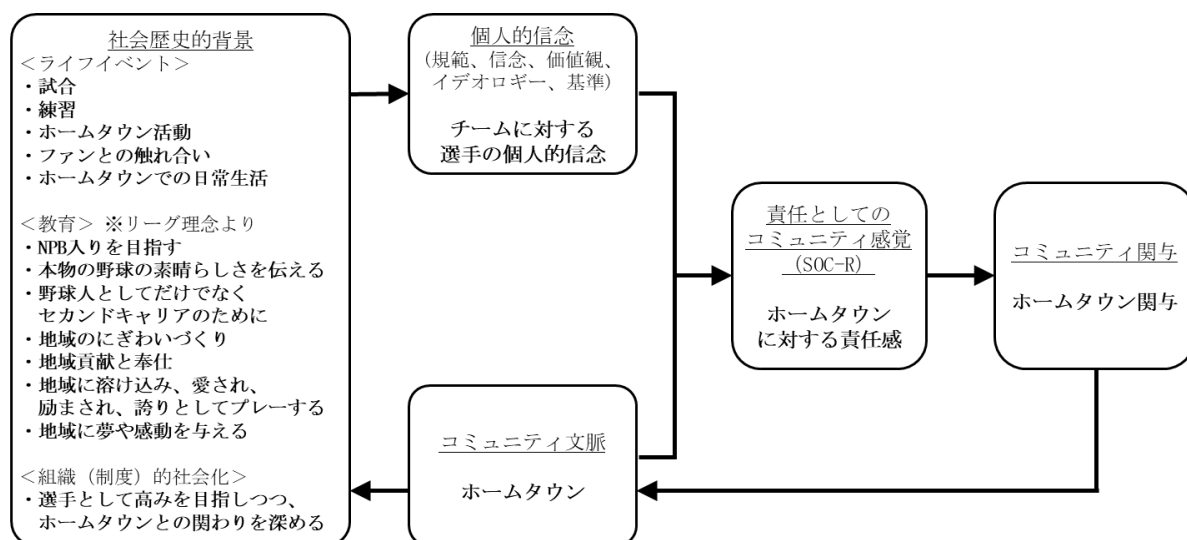


図 7. 本研究による SOC-R モデルの枠組み

本研究では、選手が所属するコミュニティの重層性（図3）を反映するため、コミュニティ文脈を最外層のホームタウンと定義しつつ、社会歴史的背景には、マイクロシステムと組織（チームと運営会社）および地域（ホームタウン）で経験する様々なライフイベント、教育、組織的社会化を想定した。そして、その中でも、選手はそのほとんどがトライアウトによってチームに入団するため、まずは運営会社およびチームの規範に従って、個人的信念を形成することが考えられる。運営会社およびチームにおける行動規範は、地域密着型プロスポーツチームの特性として、ホームタウンに向けて形作られていることから、チーム規範に沿って形成された個人的信念は、外周にあるホームタウンに対する責任感に影響を与えることが推察される。そのようにして、選手はホームタウンへの関与を強めていき、ホームタウンとの相互作用の中で自分とホームタウンの関係性を強化し、さらなる個人的信念の強化をしていくことも考えられる。つまり、本研究におけるSOC-R概念モデルでは、ホームタウンに包摂されたチームにおける個人的信念がホームタウンに対するSOC-Rに影響することが想定され、本モデルを実証することによって、コミュニティの重層性を考慮した上での各要因の関係性が検証できるものと考えられる。

本研究では、以上のように選手のSOC-Rモデルを再構築することにより、コミュニティの重層性を加味した選手のホームタウンに対する態度を実証することを試みる。コミュニティ文脈および社会歴史的背景は、プロ野球独立リーグ球団所属選手を取り巻く環境要因として説明できるため、本研究では測定可能な変数として、選手のSOC-R（ホームタウンに対する責任感）およびその先行要因（選手のチームに対する個人的信念）と、結果要因（ホームタウン関与）を再設定し、SOC-Rモデルの構築および検証を行うこととした。

2.3. 先行研究のまとめ

これまでの先行研究レビューについて、以下にまとめる。まず、コミュニティの概念に関する研究では、時代の変化とともにコミュニティのとらえ方も多様化している中で、人は複数の重層性を持ったコミュニティに属していることが明らかにされている。コミュニティの種類は、領域的コミュニティと関係的コミュニティに大別されるが、研究の文脈によって都度定義されなければならない。地域密着型プロスポーツの文脈においては、ホームタウンという領域的コミュニティをより良くするべく、関係的コミュニティ（組織やチーム）が事業を展開するという構図となるため、チームの成員である選手を対象とすることは、コミュニティの重層性を加味した研究に対して有益である。次に、コミュニティ感覚理論の概観においては、人のコミュニティに対する態度に関して、個人の自発的ニーズをベースとした SOC と、外的な規範による責任をベースとした SOC-R が存在することが明らかになった。一定の研究が蓄積されてきた SOC に対して SOC-R の研究が少なく、先行要因や結果要因が十分に明らかになっていないことから、規範が定められている組織等の影響を加味して人々の SOC-R を検証することが特に求められている。SOC-R は、ビジネスにおける協同組合や医療従事者、公共サービス提供者、地域住民などの組織の文脈で研究が進められてきており、その結果要因には、コミュニティ関与や職務満足度、組織市民行動、利他行動などが設定されている。SOC-R 研究の限界には、①SOC-R の先行要因が十分に検討されていないこと、②コミュニティの重層性が考慮されていないこと、③SOC-R モデルの循環性が包括的に検証できていないことが挙げられた。本研究の対象であるプロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R について、諸要因を操作的に定義した結果、選手を取り巻くコミュニティの重層

性を加味した SOC-R 概念の検討およびモデルの循環性の検証が可能になる展望が明らかになった。

以上のレビューを踏まえると、本研究の目的を達成するためには、先行研究で明らかになっていない以下の3つの研究課題を解決することが求められる。

研究課題1：プロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R の先行要因と結果要因を明らかにすること

研究課題2：選手がシーズンを過ごしたことによる SOC-R および関連要因の変化はどのようなものであるかを明らかにすること

研究課題3：プロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R モデルにおいて、経時変化を加味した循環モデルが成立するかを検証すること

図8は、以上の研究課題を克服するために取り組む本研究の全体像を示している。本研究は、プロ野球独立リーグ球団所属選手を対象に1シーズンを通じて行われるように設計され、シーズン序盤・終盤の2時点における2つの実証研究から構成される。

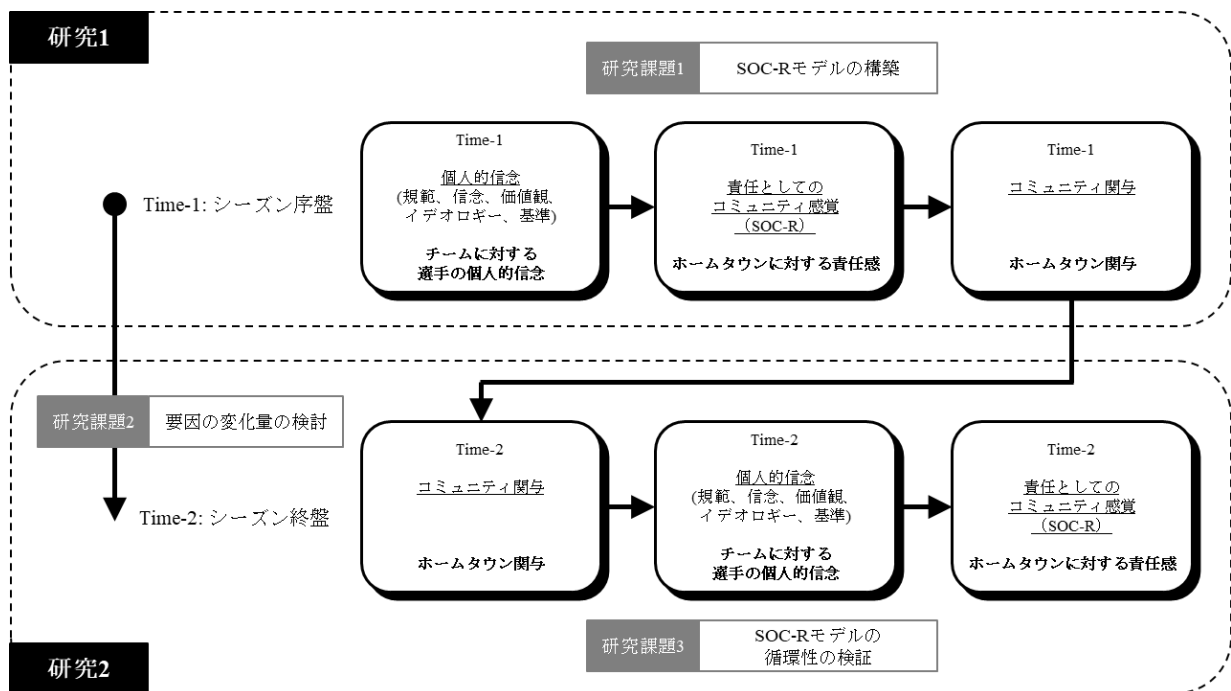


図 8. 本研究の全体像

研究課題 1 は、シーズン序盤に行う研究 1 において、横断的 SOC-R モデルを構築することによって文脈に応じた要因を設定し、各要因間の関係性を明らかにすることを試みる。研究課題 2・3 においては、経時変化を加味する必要があるため、シーズン終盤に行う研究 2 によって明らかにする。

第3章 地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する責任感（研究1）

3.1. プロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R

プロ野球独立リーグ球団所属選手は、チーム規範に従って、日々練習や試合に打ち込むと同時に、ホームタウン活動やホームタウンでの生活を通じて地元ファンと触れ合いながら個人の信念を育て、ホームタウンへの関与を深めていく。そのプロセスにおいては、ホームタウンに対する責任感が生まれていることが推察される。これまでの SOC-R 研究においては、SOC-R の先行要因が十分に検討されていない他、プロスポーツチーム所属選手を対象とした研究は皆無であることから、結果要因のホームタウン関与についても、文脈に合わせて再度検討する必要がある。研究1の目的は、プロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R の先行要因（チームに対する個人的信念）と結果要因（ホームタウン関与）を明らかにすることを目的とする。目的を達成するために、まずは理論的背景に基づいた SOC-R モデルの再概念化を行い、プロ野球独立リーグ球団所属選手の SOC-R 仮説モデルを構築する。

3.2. 理論的背景および仮説の設定（コミュニティ感覚の先行要因と結果要因）

3.2.1. ホームタウンに対する責任感の先行要因：チームに対する個人的信念

概念モデルの構築にあたり、まず SOC-R の先行要因である個人的信念の構造を検討した。Nowell and Boyd (2010) が SOC-R モデル構築のために用いた March and Olsen (1989) の「妥当性の論理」においては、人がもともとルールのある組織に属した時、彼らはそのルールに相応しく振る舞おうとし、自発的ではなくとも信念や価値観がつけられることが示されている。社会心理学におけ

る信念は、Rokeach (1968) によって「人が口にすることや行動していることから推測する無意識または意識的な単純な命題」と定義されている他、西田 (1988) によって「ある対象と他の対象、概念、あるいは属性との関係によって形成された認知内容」と定義されている。Rokeach (1968) はまた、価値観を「肯定的または否定的である、抽象的な理想であり、特定の目的や状況に結び付けず、人の理想的だと思うことへの人の信念を表すもの」と定義し、価値観は広義の信念に結びつくものであることを説明した。さらに、体育教師の信念の対象を授業観、研修観、仕事観に分類し、その構造を検討した研究も存在する (朝倉, 2016)。以上のことから、先行研究における信念の定義は、Nowell and Boyd (2010) によって概説された個人的信念と本質的に同義であるとみなすことができる。

プロ野球独立リーグ球団所属選手がホームタウンに対する責任感 (SOC-R) を形成する要因を検討すると、それはホームタウンに対する社会的使命に対する個人の情熱と、地域住民への義務感から派生するものであることが考えられる (Nowell and Boyd, 2014b)。プロスポーツチームの職員に関する研究を行った Swanson and Kent (2017) は、職員の仕事への情熱と誇りが彼らの規範と価値観をつくることを発見した。これらをまとめると、選手のホームタウンに対する責任感の先行要因である個人的信念もまた、彼らの情熱と誇りが起源となることが考えられる。地域密着型プロスポーツチームに所属するほとんどの選手はトライアウトを経て入団するため、自らチームを選択することができないことから、彼らはまずスポーツを生業にすることに力を注ぎつつ、特定の地域でプロスポーツ選手のキャリアをスタートさせる。つまり、所属したチームの方針や日々の練習、試合、ファンとの触れ合いなどを通じて、様々な活動に対する情熱や誇りに基づく

個人的信念を構築していくことが考えられる。

情熱は、Vallerand et al. (2003) によって、「人々が好きで重要であり、時間とエネルギーを掛けられると感じている活動への強い価値を持つ傾き」として定義されている。さらに彼らは、人が義務的な活動を目の前にした時に、ポジティブに受け取る自発的・好意的な情熱 (harmonious passion : 調和性パッション) とネガティブで義務的な情熱 (obsessive passion : 強迫性パッション) が発生することを説明した。

また誇りは、Smith and Tyler (1997) が「自分が所属するグループの一般的価値の評価」であると定義し、自分の仕事が周囲から評価、称賛されていることの認知は、合理的な行動に対して積極的な影響を与えることが明らかになっている。Todd and Harris (2009) はこの誇りの概念を用いて、プロスポーツチームの職員の仕事に対する誇りが、チームアイデンティフィケーションや仕事の自己効力感、仕事の満足度、職務上のパフォーマンスに影響を与えることを示唆した。

Swanson and Kent (2017) のプロスポーツチームの職員に関する実証研究では、仕事に対する強迫性パッションと誇りが、感情的コミットメント、仕事の満足度、仕事への関与、組織市民行動に影響を与えることが明らかになった。Swanson and Kent (2017) はまた、強迫性パッションは義務的な性質を持っているため、情熱と誇りのポジティブな要素にマイナスの影響を与えると仮定したが、その仮説は支持されなかった。これは、職員自身がプロスポーツチームで働くことに強い生きがいを感じており、外部からの圧力や強迫観念を受け入れて前向きな行動に移行させる傾向があることを意味している。彼らの研究において、調和性パッションは、測定尺度の妥当性と信頼性が確認されず分析に使用されなかった。

情熱が与える影響に関する見解は、従来、調和性パッションは適合的な要素にプラスの影響を与えるのに対し、強迫性パッションはそれらにマイナスの影響を与えるか、全く影響を受けないものとされてきた (Vallerand et al., 2003)。しかし、10 年間にわたる情熱研究の蓄積を分析した Curran et al. (2015) のメタ分析では、調和性・強迫性パッションの両方が、動機付け要因における適合的な要素にプラスの影響を与えることが示唆された (例えば、内的・外的規制、目標など)。つまり、情熱の影響は、結果要因の性質、領域、および文脈によって変化することを慎重に検討する必要がある。SOC-R はこれまで、情熱の結果要因としてその影響を検証されたことは無いが、SOC-R の概念の根底には動機付けの論理が存在しており、行動に対する規範的な感情に焦点を当てている (Nowell and Boyd, 2014b)。したがって本研究では、動機づけ要因に対する情熱の影響について検討していくこととし、選手のチームから指定されたチーム活動への情熱が、ホームタウンに対する責任感に影響を与えるという、重層性のあるコミュニティ構造に基づいて仮説を立てる。プロスポーツチーム所属選手は、必要な業務として試合、練習、ホームタウン活動などの様々な活動を含むチーム活動に従事しながら情熱を形成する。その時、これらの活動を喜んで受け入れる者もいれば (調和性パッション)、外圧を感じながら行う者もいる (強迫性パッション) (Anagnostopoulos et al, 2016)。

基本的に、ホームタウンの住民や自治体行政、スポンサーは選手を支援する立場をとっており、選手はあらゆる状況でそれを認識する (Carron et al, 2005)。ホームタウンが協力的である状況では、選手はホームタウンを高く評価し、ホームタウンの期待に応えるために前向きな思考に基づいて責任感を育むことができる (Chow and Lowery, 2010)。同時に、ホームタウンにおける社会的

義務と責任を果たすことを目的とするプロスポーツチームに所属するという文脈の中で、個人の信念には規範的な要素が含まれているため、選手は、規範的な意識が発達することによって責任感を育む場合がある (Godfrey, 2009; Nowell and Boyd, 2010)。外圧をコントロールすることによって、チーム活動を強いられていると感じる選手が増えるほど、規範的な意識と責任感が増すということも考えられるのである。したがって、プロ野球独立リーグ球団所属選手のホームタウンに対する責任感は、積極的かつ強制的な要素から影響を受けることが考えられる。

このようにして、選手とホームタウンの関係において、選手のチーム活動への自由で積極的な調和性パッションとチームへの誇りは、ホームタウンに対する責任感に正の影響を与えると同時に、選手がコントロールできないチーム活動に対する強迫性パッションについても、ホームタウンに対する責任感に正の影響を与えることが仮定される。研究 1 では、選手のホームタウンに対する責任感に影響を与える個人的信念を形成するものとして、チーム活動に対する調和性・強迫性パッションとチームへの誇りを挙げ、以下の 3 つの仮説を設定した。

H1 : チーム活動に対する調和性パッションは、ホームタウンに対する責任感に正の影響を与える

H2 : チーム活動に対する強迫性パッションは、ホームタウンに対する責任感に正の影響を与える

H3 : チームに対する誇りは、ホームタウンに対する責任感に正の影響を与える

3.2.2. ホームタウンに対する責任感の結果要因：ホームタウン関与

Nowell and Boyd (2010) は、SOC-R がコミュニティ関与に正の影響を与えることを示している。

協同組合内での個人の SOC-R について研究した Nowell and Boyd (2014a) によると、協同組合への関与は会議への出席率や組合内での仕事に従事した時間の他、役割の数や活動の数によって規定された。同様に、本研究で取り扱うプロ野球独立リーグ球団所属選手のホームタウン関与は、ホームタウン活動の数やそれに従事する実質的な時間として定量化できるが、一般的に活動数や時間はフロントスタッフによってコントロールされるものであり、本人の意思とは無関係に決められる場合が多い。そのため本研究では、アスリートブランドイメージ (Arai et al., 2014) の視点を参考にし、あるべき選手像とそれに対する行動的認知に基づいた、「選手としてのホームタウンに対する感情的関与」をホームタウン関与として取り扱うこととした。

Arai et al. (2013, 2014) は、消費者によるアスリートのブランドイメージを決定づける要因として、身体的パフォーマンス、魅力的な外見、市場性のあるライフスタイルという因子と、それぞれを説明する尺度を開発した。中でも市場性のあるライフスタイルにおいては、選手個人のロールモデルとしての意識や、ファンとの相互交流（関係構築に対する努力）が選手のあるべき姿として設定されている。つまり、選手のあるべき姿として決定付けられるアスリートブランドイメージを、選手自身が自らの目指すべき姿として自己概念を規定する項目へ変換することは、妥当性の論理に基づいて行動的意図を導き出す本研究の範囲において妥当であると判断できる。本研究では、Arai et al. (2014) の「ロールモデル」と「ファンとの関係構築」それぞれの項目を自己概念に基づく項目「ロールモデル」(例:「私はホームタウンの良いお手本である」)、「関係構築努力」(例:「私はホームタウンのファンに感謝の意を表す」)へと変換し、ホームタウンに対する責任感の結果要因として設定した。

H4 : ホームタウンに対する責任感は、ロールモデルに正の影響を与える

H5 : ホームタウンに対する責任感は、関係構築努力に正の影響を与える

以上のことから、プロ野球独立リーグ球団所属選手のホームタウンに対する責任感とその先行要因、結果要因を含めた仮説モデルが構築された（図9）。

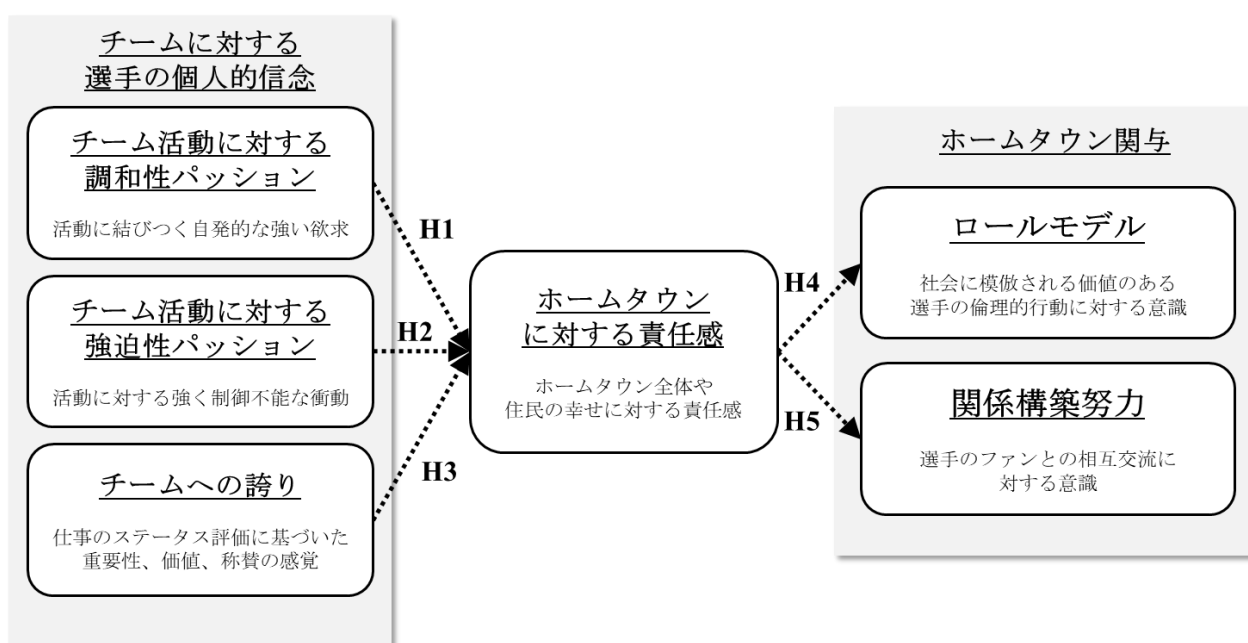


図9. 研究1における仮説モデル

3.3. 研究方法

3.3.1. 測定尺度の設定

研究1における測定尺度は、「チーム活動に対する調和性パッション」「チーム活動に対する強迫性パッション」それぞれ7項目ずつ (Vallerand et al., 2003)、「チームへの誇り」3項目 (Todd and

Harris, 2009)、「ホームタウンに対する責任感」6項目 (Nowell and Boyd, 2014a)、「ロールモデル」

「関係構築努力」それぞれ3項目ずつ (Arai et al., 2013) の、6因子29項目によって設定された。

全ての測定尺度は日本語に訳され、スポーツマネジメントとスポーツ心理学の専門家らによって精査が行われた。

3.3.2. 予備調査の実施

測定尺度の妥当性・信頼性を確認するため、複数の大学において、部活動に所属する学生アスリートを対象に直接配布回収法によるアンケート調査を実施した。本調査における測定尺度の内、チームとホームタウンの関係を表す項目は、部活動と大学との関係を表す項目に置き換えられ、さらに調査対象は大学に対する責任感を形成することが想定される、スポーツ推薦を受けて入学した学生アスリートに絞ることとした。調査期間は2017年12月4日～12月12日であり、回収数は235票、有効回答票は186票であった (有効回答率: 81.9%)。測定尺度の信頼性と妥当性を確認するため、AMOS 25を用いて確認的因子分析を行い、因子負荷量、合成信頼性 (以下「CR」と略す)、平均分散抽出 (以下「AVE」と略す) を算出した。因子間相関及び、因子負荷量の基準値を $\lambda > 0.55$ (Tabachnick and Fidell, 2007; Comrey and Lee, 1992) に設定して確認的因子分析を行った結果、6因子23項目が基準値 (AVE \geq .50、CR \geq .60) を上回り、かつ因子間の相関係数の二乗がすべての因子のAVEを下回ったため (Bagozzi and Yi, 1988)、測定尺度の弁別的・収束的妥当性が示された (モデル適合度: $\chi^2/df= 2.142$; CFI = .901; TLI = .877; RMSEA = .079)。

3.3.3. 本調査の設定および分析方法

本調査のデータは、プロ野球独立リーグである四国アイランドリーグ Plus およびルートインBCリーグに所属する7チームの選手から収集された。調査期間は2018年3月2日～5月1日であった。回収数は172票であり、有効回答数は157票であった（有効回答率：91.3%）。なお、本調査は、高知工科大学の「ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を受け実施された（受付番号128）。

測定尺度の信頼性と妥当性を確認するため、AMOS 25 を用いて確認的因子分析を行い、因子負荷量、CR、AVE を算出した。その後、共分散構造分析による仮説モデルの検証を行った。さらに、チームへの在籍期間の影響を考慮するため、サンプルを在籍期間1年未満および1年以上の2グループに分け、*t*検定および多母集団同時分析を行った。これは、選手の心理的要因の縦断的変化が、概念モデルにおける「コミュニティ文脈」と「社会歴史的背景」に大きく影響すると想定されたためである（Mabry, 1998）²。

3.4. 結果

3.4.1. サンプル属性

回答者の個人的属性は表2に示されている。すべて男性で、年齢は18～36歳まで幅広いが、23歳が最も多く（19.7%）、18～24歳で85.4%を占める若年層が多いことがわかる。チームへの所属期間は、1年未満が最も多く（39.5%）、次いで1年以上2年未満（28.0%）、2年以上3年未満（15.9%）と、在籍期間は比較的短いことが示唆された。出身地に関しては、所属する球団のホームタウン

で生まれた人が 18.5%にとどまり、ほとんどはホームタウン以外の出身者であった。ポジションは、投手が 42.0%と最も多く、次いで内野手と外野手がそれぞれ多い結果となった (21.7%)。

表 2. サンプルの個人的属性

		N	%			N	%
性別	男性	157	100.0	在籍期間	1年未満	62	39.5
	女性	0	0.0		1年以上2年未満	44	28.0
年齢	18	8	5.1		2年以上3年未満	25	15.9
	19	16	10.2		3年以上4年未満	12	7.6
	20	18	11.5		4年以上5年未満	9	5.7
	21	14	8.9		5年以上6年未満	1	0.6
	22	30	19.1		6年以上7年未満	1	0.6
	23	31	19.7	10年以上	3	1.9	
	24	17	10.8	出身地	ホームタウン内	29	18.5
	25	9	5.7		ホームタウン外	128	81.5
	26	6	3.8	ポジション	投手	66	42.0
	27	1	0.6		捕手	21	13.4
	28	2	1.3		内野手	34	21.7
29	2	1.3	外野手		34	21.7	
33	2	1.3	内野手/外野手		2	1.3	
36	1	0.6					

3.4.2. 測定尺度の信頼性と妥当性の検証

尺度の妥当性・信頼性を確認するために、確認的因子分析を行った結果を予備調査の値と併せて表 3 に示す。6 因子 23 項目にてそれぞれの因子における AVE・CR を算出したところ、チーム活動に対する調和性パッションの AVE が若干基準値>.50 を下回ったものの、合成信頼性を表す Cronbach の α (基準値>.70) と CR (基準値>.60) は全ての因子において基準値を上回った。Jiang et al. (2002) によると、AVE は非常に保守的な基準であることから、しばしば基準値>.50 を下回ることがあるとされており、参考とした Swanson and Kent (2017) もこの見解を支持していること

や、かつ表4に見られるように、因子間の相関係数の2乗がすべての因子のAVEを下回ったことから (Bagozzi and Yi, 1988)、本研究におけるすべての尺度において弁別的・収束的妥当性が示されたと判断し、次の分析に進むこととした (モデル適合度: $\chi^2/df=1.597$; CFI = .932; TLI = .916; RMSEA = .062)。

表3. 確認的因子分析の結果

因子	項目	予備調査 (N = 186)				本調査 (N = 157)			
		λ	α	CR	AVE	λ	α	CR	AVE
チーム活動に対する調和性パッション									
		.86	.84	.47		.83	.85	.48	
	1. 私は、(チーム名)での活動で、様々な経験をすることができる	-				.63			
	2. 私は、(チーム名)での活動で発見した新しい物事を高く評価する	.61				.66			
	3. (チーム名)での活動は、私に思い出に残る体験をさせてくれる	.59				.76			
	4. (チーム名)での活動は、私自身の趣向を反映している	.73				.65			
	5. (チーム名)での活動は、私の人生における他の活動とバランスが取れている	.64				.70			
	6. (チーム名)での活動は、私にとって情熱であり、コントロールできるものだ	.70				-			
	7. 私は、完全に(チーム名)での活動のとりこになっている	.82				.75			
チーム活動に対する強迫性パッション									
		.87	.88	.65		.85	.84	.56	
	1. 私は、(チーム名)での活動なしでは生きられない	.80				.82			
	2. 私にとって、(チーム名)での活動は大きな意味をもっているため、やめられない	.81				.78			
	3. 私は、(チーム名)での活動がなければ、私の人生を想像することが難しい	.74				.76			
	4. 私は、感情的に(チーム名)での活動に依存している	.87				.63			
	5. 私は、(チーム名)での活動に対する欲求をコントロールすることが難しいときがある	-				-			
	6. 私は、(チーム名)での活動に対して、やらされている感を感じる	-				-			
	7. 私の気分は、(チーム名)での活動ができるかどうかによって左右される	-				-			
チームへの誇り									
		.75	.80	.57		.82	.83	.62	
	1. 私は、(チーム名)のことを話すとき、社会的に尊敬されていると感じる	.72				.73			
	2. 私が外部の人と話すとき、(チーム名)は重要な意味をもつ	.78				.74			
	3. 社会的に、私は(チーム名)に所属していることによって、評価され賞賛されているように感じる	.76				.89			
ホームタウンに対する責任感									
		.89	.89	.61		.88	.89	.57	
	1. 私は、ホームタウンをより良くすることについて強い思いがある	.73				.75			
	2. 私がホームタウンをより良くする為にできる一番のことは、このホームタウンに貢献することである	-				.64			
	3. 私は、ホームタウンをより良くするという責任感が特に強いと感じる	.80				.85			
	4. たとえ困難だったとしても、私はホームタウンに貢献する準備ができています	.81				.74			
	5. 私は、ホームタウンをより良くしようという強い個人的義務を感じている	.84				.83			
	6. 私は、ホームタウンに見返りを求めずに貢献することが私の義務だと思う	.73				.68			
ロールモデル									
		.87	.87	.78		.76	.77	.63	
	1. 私は、社会的に責任を感じている	-				-			
	2. 私は、ホームタウンの良い手本である	.83				.86			
	3. 私は、ホームタウンの良いリーダーである	.93				.72			
関係構築努力									
		.78	.79	.56		.84	.85	.65	
	1. 私は、ホームタウンのファンの人たちに感謝の意を表す	.76				.76			
	2. 私は、ホームタウンのファンの人たちのことをよく考えている	.83				.83			
	3. 私は、ホームタウンのファンの人たちとよく交流しようとする	.64				.82			

† モデル適合度 (予備調査) : $\chi^2/df=2.142$; CFI = .901; TLI = .877; RMSEA = .079

†† モデル適合度 (本調査) : $\chi^2/df=1.597$; CFI = .932; TLI = .916; RMSEA = .062

††† 予備調査では学生アスリートを対象としたため「チーム活動」を「部活動」、「ホームタウン」を「大学」と置き換えた。

表 4. 因子間の相関係数、平均値、標準偏差および各因子の AVE 値

因子	平均	標準偏差	1	2	3	4	5	6
1. チーム活動に対する調和性パッション	3.81	0.60	.48^a	.25	.13	.28	.13	.19
2. チーム活動に対する強迫性パッション	2.85	0.92	.50	.56^b	.24	.32	.12	.07
3. チームへの誇り	3.22	0.81	.37	.49	.62^c	.28	.08	.10
4. ホームタウンに対する責任感	3.59	0.74	.53	.57	.53	.57^d	.28	.30
5. ロールモデル	3.19	0.75	.36	.35	.28	.53	.63^e	.19
6. 関係構築努力	4.23	0.64	.43	.26	.32	.55	.43	.65^f

† 平均分散抽出 (AVE) を対角線上に表示し、対角線から左下半分には因子間の相関係数、右上半分には因子間相関の二乗を表示した。

†† 因子間の相関係数は全て有意であった ($p < .01$)。

††† a: チームに対する調和性パッションのAVE, b: チームに対する強迫性パッションのAVE, c: チームへの誇りのAVE,
d: ホームタウンに対する責任感のAVE, e: ロールモデルのAVE, f: 関係構築努力のAVE

3.4.3. 因果関係モデルの検証

次に、共分散構造分析によって仮説モデルの検証が行われた (図 10)。仮説モデルの適合度は全ての基準値を満たす結果となった ($\chi^2/df = 1.600$; CFI = .929; TLI = .916; RMSEA = .062)。

まず、チーム活動に対する調和性・強迫性パッション、チームへの誇りが、ホームタウンに対する責任感の先行要因として正の影響を与えていることが明らかになった。つまり、選手たちはチームに所属し、野球に関する活動 (練習や試合) と、ホームタウンに関わる活動に対して、自発的で義務的な情熱を抱き、また自分たちが社会から称賛されていることを認知することによって、ホームタウンに対しても責任感を持つようになることが明らかになった。すなわち、仮説 H1・H2・H3 は全て採択される結果となった。

さらに、ホームタウンに対する責任感が、結果要因としてロールモデル、関係構築努力に正の影響を与えることが明らかになった。すなわち、ホームタウンに対する責任感が、選手たちに「ホ

ームタウンにとってのあるべき姿」を目指す行動の源泉となっていることが明らかになった。その結果、H4・H5 が採択される結果となった。

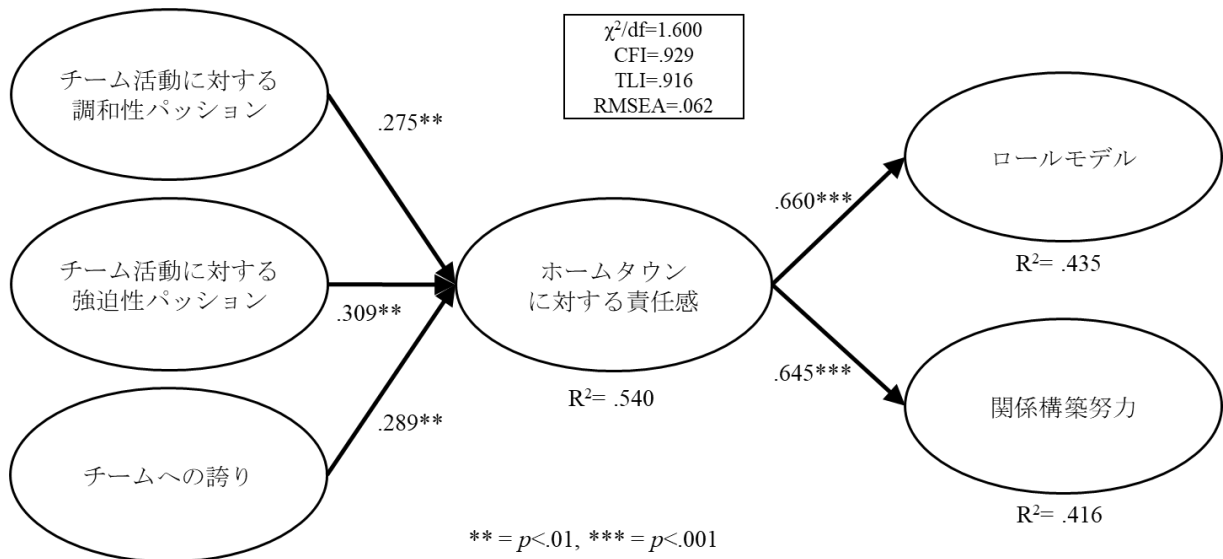


図 10. 仮説モデルの検証結果

3.4.4. 調整変数の影響分析 (t 検定および多母集団同時分析)

全ての仮説が支持されたものの、特に在籍期間の違いを考慮した際に本モデルが異なるかどうかを検証する必要がある。そこで、在籍期間 1 年未満 (グループ A) と 1 年以上 (グループ B) にサンプルを分割し、両グループにおける t 検定と多母集団同時分析によって、グループ間の要因の差およびモデルの差異を検討することとした。

表 5 は、各潜在変数の 2 つのグループ間の平均値の差を示している。 t 検定の結果、1 年以上チームに在籍していた選手のチーム活動に対する強迫性パッションが有意に低いことが明らかになった ($t = 2.012, p < 0.05$)。

表 5. 在籍期間の違いによる各因子の平均値比較

因子	Group A: 在籍期間1年未満 (N = 62)		Group B: 在籍期間1年以上 (N = 95)		t 値	p 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
チーム活動に対する調和性パッション	3.84	0.58	3.79	0.61	.540	.590
チーム活動に対する強迫性パッション	3.03	0.95	2.73	0.89	2.012	.046*
チームへの誇り	3.28	0.78	3.19	0.83	.708	.480
ホームタウンに対する責任感	3.69	0.78	3.52	0.71	1.429	.155
ロールモデル	3.17	0.66	3.20	0.81	-.250	.803
関係構築努力	4.24	0.61	4.23	0.67	.131	.896

* $p < .05$

多母集団同時分析によって異なるグループの構造方程式モデルを比較する際には、モデル内のそれぞれのパスが両グループで等しく作用しているかどうかについて、測定不変性を確認する必要がある。浅野（2014）によると、測定不変性を調べる手順はいくつかに分かれており、まず集団間で同じモデル構造を仮定するものの、因子負荷量などのすべての推定値を異なるとみなす「配置不変性」を確認することから始まる（モデル 1）。次に、両グループの因子負荷量に等値制約をかけた「弱測定不変性」を確認し（モデル 2）、続いて因子負荷量に加えて分散、共分散に等値制約をかける「測定不変性」を確認する（モデル 3）。最後に、因子負荷量、分散、共分散、および誤差分散にも等値制約をかける「強測定不変性」を確認し（モデル 4）、最終的にはどのステップでつくられたモデルが最も適合度が高いかを検討する。なお、モデルの選択基準には、適合度指標のうち AIC（赤池情報量規準）を用い、AIC が最も低いものを最適なモデルとして採用する（浅野, 2014）。

表 6 には、4 つのモデルが検証された多母集団同時分析の結果を示している。全てのモデルに

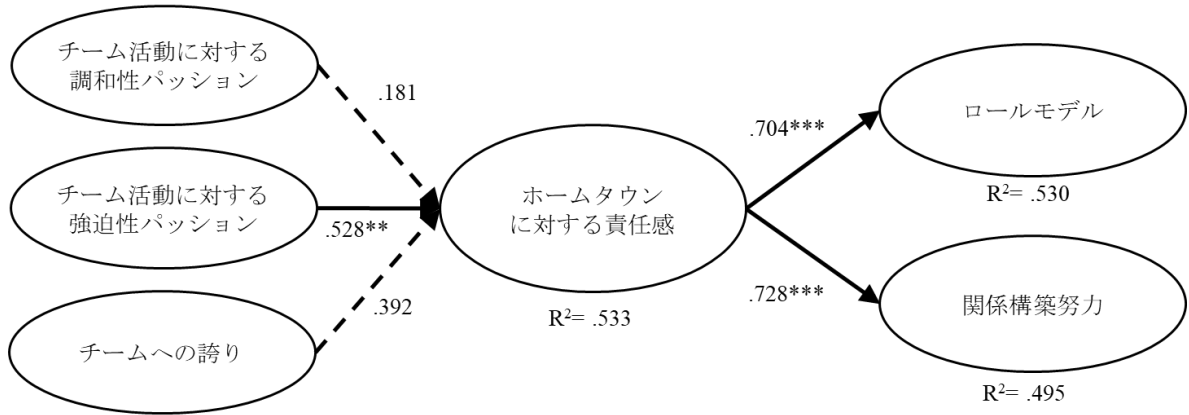
において CFI と TLI は基準値 $>.90$ (Bentler and Bonnet, 1980) よりわずかに低かったが、RMSEA は基準値 $<.60$ (Hu and Bentler, 1998) を満たした。モデルの適合度が明らかに低下したモデル 4 を除く 3 つのモデルを比較した結果、最も AIC の値が低いモデル 3 が採択された。

表 6. 多母集団同時分析結果：各モデルに対する主な適合度指標と情報量規準

測定モデル	χ^2	df	χ^2/df	CFI	TLI	RMSEA	AIC
モデル1 (配置不変) : 基本モデル (等値制約無し)	701.720	464	1.512	.887	.865	.057	1069.720
モデル2 (弱測定不変) : 因子負荷量に等値制約	727.621	482	1.510	.883	.866	.057	1059.621
モデル3 (測定不変) : 因子負荷量、分散、共分散に等値制約	734.107	488	1.504	.883	.868	.057	1054.107
モデル4 (強測定不変) : 因子負荷量、分散、共分散、誤差分散に等値制約	817.974	527	1.552	.862	.855	.060	1059.974

最後に、図 11 は、測定不変性が確認されたモデル 3 における各グループの構造方程式モデリングの結果を示している。モデル 3 では、各グループ間における要因間の全体的なパターンがほぼ等しいことを意味しており、強い制約下でのパス係数の差異を検討した。差異は主に、個人的信念からホームタウンに対する責任感へのパスにおいて確認された。具体的には、在籍期間が 1 年未満の選手グループ A においては、チーム活動に対する強迫性パッションのみがホームタウンに対する責任感へ正の影響を与えている一方で、在籍期間が 1 年以上の選手グループ B では、チーム活動に対する調和性パッションとチームへの誇りが、ホームタウンに対する責任感へ正の影響を与えていたことが明らかになった。各グループにおける同じパス係数同士を比較する 1 対 1 のパラメーター比較では、グループ間に有意差は認められなかったが、構造的な差異が存在することが示唆される結果となった。

グループA: 在籍期間1年未満 (n=62)



グループB: 在籍期間1年以上 (n=95)

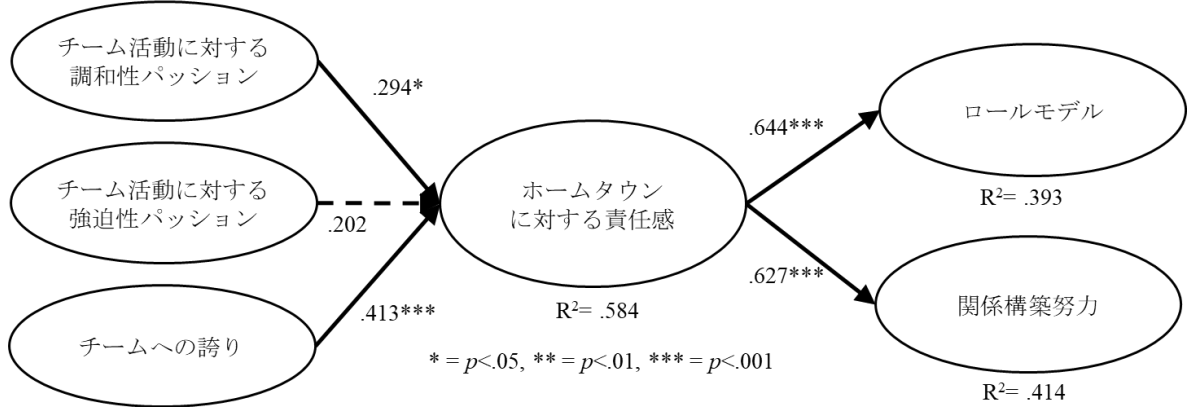


図 11. 多母集団構造方程式モデリングの結果

3.5. 考察

研究 1 では、3 つの学術的および実践的貢献が達成できたと考えられる。第一には、プロスポーツ組織研究に貢献したことである。研究 1 では、プロ野球独立リーグ球団所属選手の、ホームタウンに対してあるべき姿を目指すプロセスを検討することについて、責任としてのコミュニティ感覚理論を援用し実証した。SOC-R は、選手がチームに所属し活動することによって、個人的信念が醸成され、結果としてホームタウンへの態度を形成していくという心理的側面を描写するの

に適した概念であることが示唆された。これらの結果は、SOC-Rのもととなった March and Olsen (1989) による妥当性の論理にも裏付けられる。さらに、特定の地域をホームタウンとする地域密着型プロスポーツチームという特殊な文脈における、選手たちの複雑な心の動きを詳細にとらえることができたと考えられる。ルートイン BC リーグを創設した村山 (2011) の記述によると、選手の素行が悪かったためにホームタウンに受け入れられず、リーグ創設当初、試合ではしばしば乱闘騒ぎが起こることもあった。しかし、彼はまた、リーグとチームがホームタウンへの貢献を目的とした理念を構築し、実践していくことによって、選手の考え方も次第に変わっていき、ホームタウンにも受け入れられるようになったプロセスについても説明した。これは同時に、選手がチーム方針による活動に対して、ポジティブにもネガティブにもとらえていたことも示唆している (チーム活動に対する調和性・強迫性パッション)。さらに、研究 1 の結果は、プロスポーツチームの職員の心理的側面を明らかにした Swanson and Kent (2017) の研究結果を支持するものであった。さらに、今後も継続的な研究が必要ではあるが、長期間チームに所属している選手ほど、チーム活動に対する強迫性パッションが小さく、ホームタウンに対する責任感に影響しない一方で、チーム活動に対する調和性パッションとチームに対する誇りがホームタウンに対する責任感に正の影響を与えていたことは、興味深い結果だったと言える。選手がチームに長く在籍し、ホームタウンと長く関わり合うことによって、チームに対する自発的でポジティブな感情からホームタウンに対する責任感を育むことが可能になったことが考えられる。研究 1 はこのような点においても、プロスポーツチーム研究に貴重な知見を与えたものと考えられる。

また第二には、SOC および SOC-R 理論研究の一つの蓄積になった点である。SOC-R 研究の観

点からも、本研究はプロスポーツチームに所属する選手を対象とした初めての研究である。結果として、活動に対する情熱がポジティブ・ネガティブの如何に関わらず、選手はホームタウンへの責任を果たそうとし、ホームタウンに対する行動意図を形成するプロセスが明らかになったことから、地域密着型プロスポーツチームの特徴を顕著に表していることも示唆された。同時に、Swanson and Kent (2017) の研究では、情熱や誇りが直接仕事への関与に関わっていることが明らかになったが、研究1においては、その両者をSOC-Rが媒介している可能性も示唆された。つまり、仕事や責任を伴う環境下において、SOC-Rが重要な役割を示しているという結果は、妥当性の論理 (March and Olsen, 1989) および Nowell and Boyd (2014a) のSOC-R研究を補強するものである。

第三に挙げられるのは、実践へのインプリケーションである。研究1の結果は、地域に根差したプロスポーツチームの中でも、特に日常的にホームタウンに貢献し続けなければならない小規模チームにおいて、選手がホームタウン活動に従事することの利点と重要性を示している。SOC-Rに基づく利他的な態度は、地元の人々との交流を通じた社会的行動を促進することを可能にする。プロ野球独立リーグが、選手にとってキャリアを終える場所として機能していることを考慮すると、本研究の結果は、スポーツ組織の人的資源管理の観点からも価値を有している。プロスポーツチームとしては、選手の心の動きを適切に把握して人材育成につなげていくことも重要であろう。

3.6. 研究 1 のまとめ

研究 1 では、地域密着型プロスポーツチーム所属選手を対象とし、彼らのホームタウンに対する「あるべき姿」に対する行動的認知を形成するまでのプロセスを、SOC-R 理論に基づいて実証的に明らかにした。結果として、個人的信念（チーム活動に対する情熱とチームに対する誇り）が、ホームタウンに対する責任感を媒介し、ホームタウン関与（ロールモデルと関係構築努力）に正の影響を及ぼすことが明らかになり、地域密着型プロスポーツチームにおける、選手の特徴的な組織的社会化を説明することができた。

しかし、研究 1 にはいくつかの限界もある。一つ目は、尺度の脆弱性である。特に、チーム活動に対する調和性パッションは、Swanson and Kent (2017) でも収束的妥当性が確認できなかったことに加え、本研究においても、予備調査では AVE が $>.50$ を示したのに対して、本調査ではそれを若干下回った (AVE = .48)。今後、多様なサンプルにおけるテストを重ねていくことで、チーム活動に対する調和性パッション尺度を精査していく必要があると考えられる。また、ロールモデル因子に関しても、最終的に 2 項目の構成になったことは課題として挙げられるだろう。その原因としては、ワーディングが起因していることが考えられる。ロールモデル尺度は Arai et al. (2013) の尺度を参考に一人称視点に変換したものであるが、調査にて削除された 1 項目は「ホームタウン」という詳細な明記がなかったため、削除されたと考えられる（例：「私は、社会的に責任を感じている」）。今後、ワーディングを再考することによって、こちらもまた尺度の妥当性を高めていくことが重要であろう。

第二に、上記の尺度に関する課題と関連するが、サンプルサイズの小ささが統計的な結果に影響

響を与えている可能性がある。サンプルサイズにはいくつかの基準があるが、複数のパラメーターを持つ複雑なモデルでは、少なくとも 150、可能であれば 200 以上、もしくは項目数の 10 倍以上のサンプルを取得することが推奨されている（伊藤, 2018）。研究 1 の有効サンプルサイズは 157 であったことから、最低基準のみを満たしていた。さらに、多母集団同時分析では、グループごとに 100 のサンプルを収集することが推奨されていることから（Kline, 2005）、サンプルサイズを拡大することによって、研究の信頼性を向上させることが可能になると考えられる。

第三に、SOC-R の結果要因が、実際の行動（従事する時間や回数）ではないということである。協同組合内での SOC-R を研究した Nowell and Boyd（2014a）では、SOC-R の結果要因は従事した時間や会議への出席数、担当している役割数などで測定されていた。前述した通り、本研究の文脈においては、選手たちが自分でホームタウン活動の回数や時間をコントロールできるものではない。しかし、選手の行動的関与を従属変数と指定することによって、研究 1 の結果との比較も可能になることが考えられる。そのため、今後は、ホームタウンに対する責任感が強い選手がどのような行動をとるのかについて、定性的に検討していく必要もある。

第四に、研究 1 が一時点のみにおける横断的研究であったことである。プロ野球独立リーグは毎年 4 月に開幕し、中休みを経て 9 月に閉幕する。研究 1 におけるデータの収集時期はシーズン開幕付近であったことから、今後の研究では、シーズン終了時付近においても追跡データの収集を行い、各因子においてどのような変化があったのか、概念モデルにおいて各変数間の影響の変化がどの程度あったのかを明らかにする縦断的研究も必要になるだろう。

研究 1 では、これまで明らかにされてこなかった地域密着型プロスポーツチームの選手の心理

的側面を、SOC-R 理論に基づいて明らかにすることを目的とした。結果として、選手個人のホームタウンに対する社会化の一側面を見出すことができた。スポーツマネジメント領域における人的資源マネジメントの観点からも、地域におけるプロスポーツチームへの期待がますます高まる中、このような選手マネジメントに関連する研究はさらに進められるべきである。なぜなら、地域密着型経営における選手のマネジメントは、ホームタウン内のステークホルダーの共感を呼び、ホームタウンからの応援や支援、そして価値の共創にもつながるからである。また、研究 1 で試みたように、選手の心理的側面を検討していくことは、選手のキャリア教育にも大いに役立つことが考えられる。NPB の調査では、オフシーズンに開催されるキャンプに参加した若手選手のうち、6 割以上が「将来に不安を抱えている」と回答した。彼らをホームタウンで重要な役割を果たす存在へと成長させることが、ひいては、彼ら自身のキャリア教育へとつながり、ホームタウンにもプラスの効果をもたらすことが期待できる。

第4章 地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する責任感の変容(研究2)

4.1. 縦断的研究による SOC-R モデルの検証

研究1では、プロ野球独立リーグ球団所属選手におけるホームタウンに対する責任感の先行要因と結果要因が明らかになり、ホームタウンに包摂されたチームに所属する選手が、様々な活動に従事することでチームに対する個人的信念を形成し、ホームタウンに対する責任感を介してホームタウンへの関与を高めることが横断的に実証された。

研究2では、研究1の結果に時系列的な視点を付加することで、スポーツマネジメント領域におけるSOC-R研究の精緻化に寄与する。具体的には、一定期間ホームタウンで過ごした選手のホームタウンへの関与が、チームに対する個人的信念を強化するプロセスを明らかにすることで、図12に示された未検証のパスの検証を試みる。

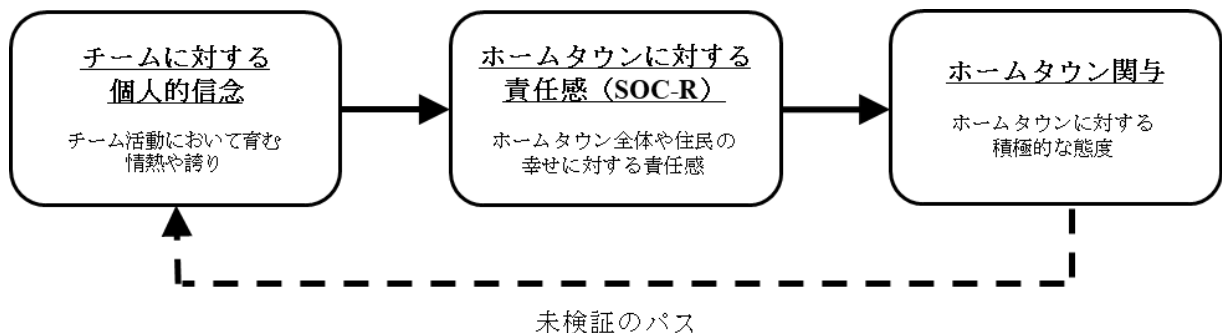


図12. プロ野球独立リーグ球団所属選手におけるSOC-Rモデル

研究2の目的は、研究1の知見を基盤とし、追跡調査による縦断データを活用することによって、①SOC-Rモデルに含まれる各変数(選手の個人的信念、ホームタウンに対する責任感、ホー

ムタウンへの関与) の縦断的变化を明らかにすること、②一定期間をホームタウンで過ごした選手のホームタウンに対する責任感の循環性 (ホームタウンへの関与→選手の個人的信念→ホームタウンに対する責任感) を検証することとする。

SOC-R モデルの循環性を実証するためには、特定のコミュニティ文脈において、新たに所属するメンバーを含むサンプルを対象とし、同じサンプルから少なくとも 2 時点以上の縦断データを収集し、経時変化を加味したモデルの成立を検証することが必要となる。

4.2. 理論的背景及び仮説の設定

研究 2 では、プロ野球独立リーグ球団所属選手が 1 シーズンを終え、様々な経験を通じて、SOC-R モデルにおける各変数をどのように変化させたかを明らかにするために、シーズン終盤のデータを取得し、シーズンの序盤・終盤における比較分析を行う。また、調整変数としてホームタウン活動への参加回数がどの程度各変数の変化に影響を与えたかを検討する。さらに、シーズン序盤のホームタウン関与 (関係構築努力とロールモデル) を出発点として、それらがシーズン終盤のホームタウン関与に与える影響、シーズン終盤におけるホームタウン関与からチームに対する個人的信念 (調和性パッション、強迫性パッション、誇り)、あるいはホームタウンに対する責任感への影響を検討することによって、研究 1 で明らかにならなかった新たな仮説モデルを構築する。図 13 は、研究 2 における仮説モデルを示しており、以下にそれぞれの仮説の導出根拠を説明する。

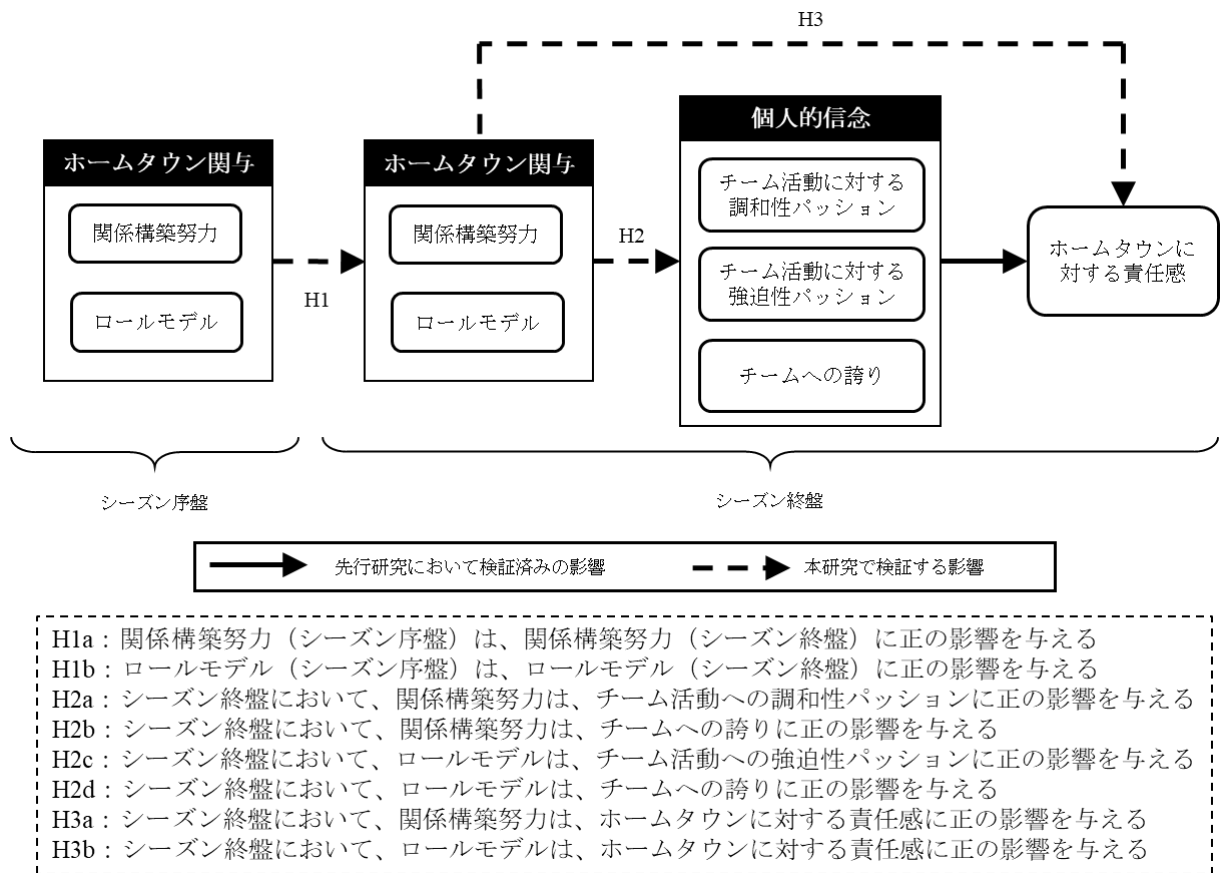


図 13. 研究 2 の仮説モデル

4.2.1. ホームタウン関与とチームに対する個人的信念

まず、研究 1 でも述べたように、ホームタウン関与（関係構築努力、ロールモデル）は、Arai et al. (2013, 2014) の消費者が抱くアスリートブランドイメージ構造のうち、主に競技に関わらないファンとのコミュニケーションを指している 2 つの要素を、選手側の視点に改変したものである (Maeda and Tomiyama, 2019)。関係構築努力は、選手が積極的にファンと交流を図ることによってファンの愛着形成をサポートするものであり、選手側ではファンからの応援やサポートを直接的に受ける場面で形成され、感謝を認知したり、積極的な精神状態を作り出す可能性がある (Arai

et al., 2014; Chow and Lowery, 2010)。ロールモデルは、社会への積極的な参加と貢献、社会的規範への適合、高潔な行動の意思表示であり (Arai et al., 2014)、自己統制的な側面を持っている。この2つ要素の時点間の関係については、シーズン序盤と終盤で同じ項目によって測定するため、それぞれの要素においてシーズン序盤から終盤にかけて正の影響が見られることが考えられる (H1a, b)。さらに、これら2つの要素と、従属変数となるチームに対する個人的信念 (調和性パッション、強迫性パッション、誇り) の関係を整理すると、まず、ホームタウンにおいてファンとの関係性を構築する行為そのものが積極性を含み、ファンから賞賛、応援されるものであるため、調和性パッションと誇りに正の影響を与えることが考えられる (H2a, b)。一方で、規範的にロールモデルになろうという選手の態度は、チーム活動に対する自己統制的なパッションに影響を与えると考えられるため、強迫性パッションに正の影響を与えることが想定され (H2c)、規範的な態度が自己の尊厳を育てるという視点からも (Todd and Harris, 2009)、誇りにも正の影響を与えることが考えられる (H2d)。

4.2.2. ホームタウン関与とホームタウンに対する責任感

次に、ホームタウン関与 (関係構築努力とロールモデル) がホームタウンに対する責任感へ与える影響を検討する。ファンとの触れ合いや規範的にロールモデルになろうとする態度は、SOC-R理論の基盤となった March and Olsen (1989) の妥当性の論理を参考にすると、ホームタウンというコミュニティにおいて「どのように振る舞うことが適切か」を体現したものであると言える。選手は、シーズン中にチームで定められた活動を通じてホームタウンとの相互作用を経験し続け

てきたことから、これらの 2 つの要素は、チームに対する個人的信念と同じく、ホームタウンに対する責任感も直接的に高めることが予想される (H3a, b)。

4.3. 研究方法

4.3.1. データ収集

研究 1 で取得されたシーズン序盤 (Time-1 : 2018 年 3 月～5 月) のデータに加え、研究 2 ではシーズン終盤 (Time-2 : 2018 年 9 月～10 月) のデータが取得された。調査方法は、郵送及び直接配布・回収法による質問紙調査であった。収集されたサンプルは、Time-1 では 172 票 (配布数 184 票, 回収率 93.5%)、Time-2 では 136 票 (配布数 143 票, 回収率 95.1%) であった。そこから、両時点にて全ての質問項目に回答を完了したサンプルを抽出した上、欠損値の含まれていたサンプルを除外し、残った 120 票を分析の対象とした (有効回答率 : 69.8%)³。調査時点における母集団 (両リーグの合計選手) のサイズは約 300 名 (1 チーム平均約 20～25 名) であり、有効回答数 120 について、信頼率 95%における標本誤差は 6.94%であった⁴。なお、本研究は、高知工科大学の「ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を受け実施された (受付番号 128)。

4.3.2. 測定尺度の設定

調査項目については、研究 1 で構築された SOC-R モデルに基づき、信頼性と妥当性が確認された 6 因子 24 項目の尺度を用いた。関係構築努力 3 項目及びロールモデル 2 項目 (Arai et al., 2013)、調和性パッション 6 項目及び強迫性パッション 4 項目 (Vallerand et al., 2003)、誇り 3 項目 (Todd

and Harris, 2009)、ホームタウンに対する責任感 6 項目 (Nowell and Boyd, 2014) がそれぞれ、5 段階リッカート尺度 (1. 全く当てはまらない～5. 大いに当てはまる) によって測定された。

4.3.3. 分析方法

4.3.3.1. 縦断データの因子分析

研究 2 では、同じサンプルから得られた 2 時点の縦断データを用いた因子分析を行った。分析の手順としては、まず時点毎に確認的因子分析によって測定尺度の信頼性・妥当性の検証を行った後サンプルを一つのデータセットに統合し、平均構造を導入した縦断データの因子分析によって、測定尺度の信頼性・妥当性の再検証および因子平均の比較を行った (豊田, 1998; 尾崎, 2003; 清水・山本, 2008; Lock et al., 2014)。縦断データの因子分析の手続きは豊田 (1998) および尾崎 (2003) に基づき、①Time-1 のそれぞれの因子平均と分散の固定 (因子平均 = 0、分散 = 1)、②2 時点における同じ観測変数同士の切片に対する等値制約、③因子負荷量に対する等値制約 (測定不変)、④測定誤差の等分散、⑤測定誤差間相関の仮定という 5 つの制約を課した。測定尺度の信頼性・妥当性の検討には、因子負荷量、CR、AVE を用い、モデルの適合度指標の検討には CFI、TLI、RMSEA を用いた。さらに、縦断データを用いることで検討可能になる尺度の一貫性・再現性については、再検査信頼性 (Time-1 と Time-2 の同一因子間の相関係数) (尾崎・荘島, 2014; 高本・服部, 2015; 小塩, 2016) と安定性係数 (Time-1 と Time-2 の同一因子間のパス係数) (清水・山本, 2008) を算出することによって評価した。以上の手続きによって、SOC-R モデルを構成する各因子がシーズン序盤と終盤で安定的に測定できているかを確認し、どの程度変容したかを明らかにした。

4.3.3.2. 共分散構造分析による仮説モデルの検証

次に、共分散構造分析による構造方程式モデリングを行い、図 3 に示した仮説モデルの検証を行った。モデル適合度指標の検討には、CFI、TLI、RMSEA を使い、潜在変数間のパスの影響を検討し、仮説検証を行った。

4.4. 結果

4.4.1. サンプル属性

回答者は、男性が 100% (n=120) であり、年齢は 23 歳が 22.5%で最も多く、次いで 22 歳が 14.2%であり、23 歳以下の選手で約 8 割を占め、平均は 22.3 歳であった。出身地は、ホームタウン内が 16.7%、外が 83.3%と、出身地以外の地域でプレーする選手がほとんどであった。在籍年数は、Time-1 の時点で 1 年未満が 36.7%で最も多く、3 年未満までが全体の 8 割以上を占める結果となった。ポジションは投手が 40.0%、内野手が 23.3%、外野手が 22.5%、捕手が 12.5%であった (表 7)。

表 7. サンプルの個人的属性

		n	%			n	%
性別	男性	120	100.0	出身地	ホームタウン内	20	16.7
	女性	0	0.0		ホームタウン外	100	83.3
年齢 (Time-1時点) 平均：22.3歳	18歳	7	5.8	在籍年数 (Time-1時点) 平均：1年5.17か月	1年未満	44	36.7
	19歳	14	11.7		1年～2年未満	37	30.8
	20歳	13	10.8		2年～3年未満	19	15.8
	21歳	12	10.0		3年～4年未満	10	8.3
	22歳	17	14.2		4年～5年未満	8	6.7
	23歳	27	22.5		5年以上	2	1.7
	24歳	12	10.0	ポジション	投手	48	40.0
	25歳	7	5.8		内野手	28	23.3
	26歳	4	3.3		外野手	27	22.5
	27歳	1	0.8		捕手	15	12.5
	28歳	2	1.7		投手／内野手	1	0.8
	29歳	2	1.7		内野手／外野手	1	0.8
	33歳	1	0.8				
36歳	1	0.8					

4.4.2. 縦断データの因子分析

収集したデータを用い、6 因子 24 項目において時点別に確認的因子分析を行った結果、Time-2 における調和性パッションの 3 項目、誇りの 1 項目において因子負荷量が基準値を下回ったため ($\lambda > 0.55$, Tabachnick and Fidell, 2007; Comrey and Lee, 1992)、当該 4 項目を削除した 6 因子 20 項目で再度時点毎の確認的因子分析を行った。その結果、Time-2 における誇り因子の AVE が .42 となり基準値 ($\geq .50$, Fornell and Lacker, 1981) を下回った。しかし、2 時点における尺度の妥当性は、再検査信頼性や安定性係数の算出を以て統合的に判断すべきであること (村山, 2012)、AVE は保守的な値であり、信頼性が許容できていたとしても基準値を下回る場合が多いこと (Jiang et al., 2002)、因子間相関の二乗との比較では弁別的妥当性が認められたことなどから、誇り因子を除外せず縦断データの因子分析へと進んだ⁵。なお、時点別の確認的因子分析におけるモデル適合度は、基準値 (CFI, TLI $\geq .90$, Bentler and Bonnet, 1980; RMSEA $\leq .10$, Browne and Cudeck, 1993) を概ね満たしていた (Time-1/Time-2: $\chi^2/df=1.67/1.58$, CFI=.91/.93, TLI=.89/.91, RMSEA=.075/.070)。

図 14 は、縦断データの因子分析におけるモデル構造を示している。本モデルは、①Time-1 のそれぞれの因子平均と分散の固定 (因子平均 = 0、分散 = 1)、②2 時点における同じ観測変数同士の切片に対する等値制約、③因子負荷量に対する等値制約 (測定不変)、④測定誤差の等分散、⑤測定誤差間相関の仮定という 5 つの制約を課している。

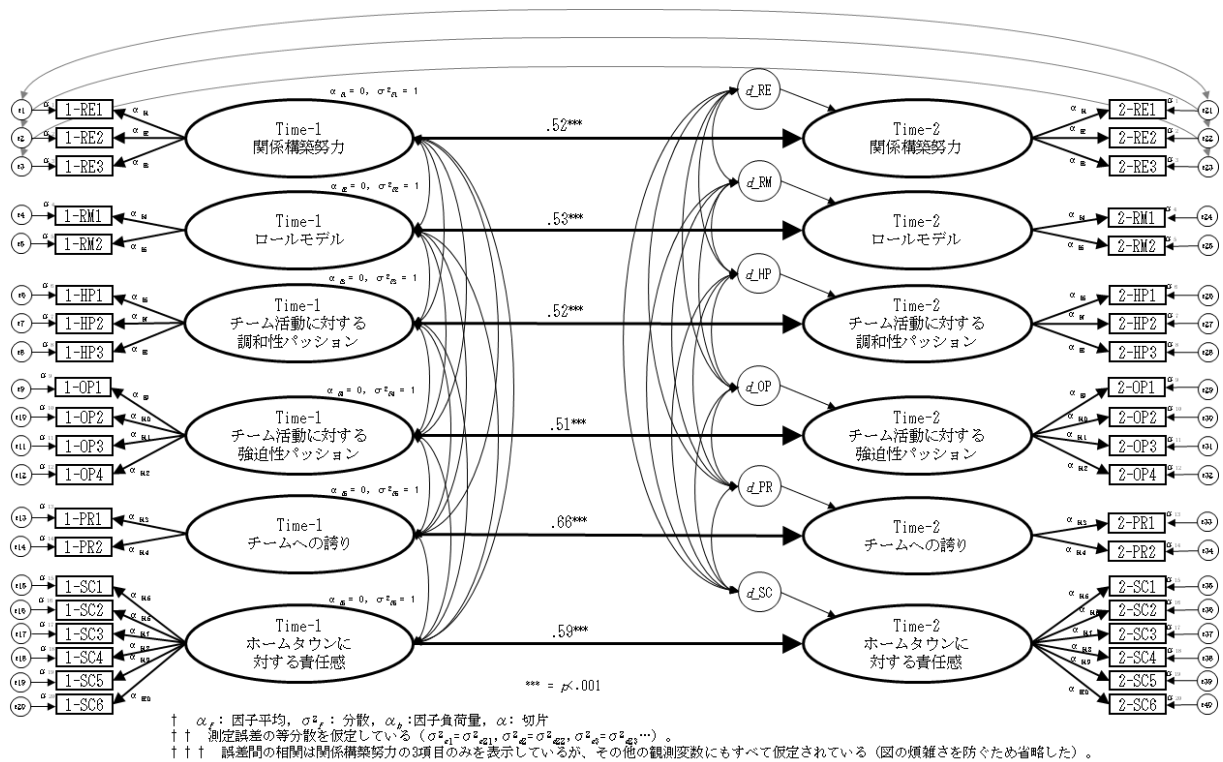


図 14. 縦断データの因子分析モデル

表 8. 縦断データの因子分析結果：因子負荷量（標準化推定値）、CR、AVE

因子	質問項目	Time-1 (n=120)			Time-2 (n=120)		
		λ	CR	AVE	λ	CR	AVE
関係構築努力			.82	.61		.80	.57
	1. 私は、ホームタウンのファンに感謝の意を表す	.71			.68		
	2. 私は、ホームタウンのファンをよく考えている	.86			.84		
	3. 私は、ホームタウンのファンとよく交流しようとする	.76			.73		
ロールモデル			.75	.60		.74	.59
	1. 私は、ホームタウンの良い手本である	.82			.81		
	2. 私は、ホームタウンの良いリーダーである	.73			.72		
チーム活動に対する調和性パッション			.79	.55		.81	.58
	1. 私は、(チーム名)での活動で、様々な経験をする事ができる	.70			.72		
	2. 私は、(チーム名)での活動で発見した新しい物事を高く評価する	.74			.76		
	3. (チーム名)での活動は、私に思い出に残る体験をさせてくれる	.79			.81		
チーム活動に対する強迫性パッション			.87	.62		.89	.66
	1. 私は、(チーム名)での活動なしでは生きられない	.80			.83		
	2. 私にとって、(チーム名)での活動は大きな意味を持っているため、辞められない	.82			.84		
	3. 私は、(チーム名)での活動がなければ、私の人生を想像することが難しい	.81			.84		
	4. 私は、(チーム名)での活動に依存している	.72			.75		
チームへの誇り			.73	.57		.68	.51
	1. 私は、(チーム名)のことを話すとき、社会的に尊敬されていると感じる	.75			.71		
	2. 社会的に、私は(チーム名)に所属していることによって、評価され賞賛されているように感じる	.77			.72		
ホームタウンに対する責任感			.89	.57		.89	.57
	1. 私は、ホームタウンをより良くすることについて強い思いがある	.76			.76		
	2. 私がホームタウンをより良くする為にできる一番のことは、このホームタウンに貢献することである	.63			.63		
	3. 私は、ホームタウンをより良くするという責任感が特に強いと感じる	.83			.83		
	4. たとえ困難だったとしても、私はホームタウンに貢献する準備ができている	.80			.80		
	5. 私は、ホームタウンをより良くしようという強い個人的義務を感じている	.86			.86		
	6. 私は、ホームタウンに見返りを求めずに貢献することが私の義務だと思う	.64			.64		
	χ^2/df						1.64
	CFI						.83
	TLI						.82
	RMSEA						.073

表 8 は、縦断データの因子分析を行った結果算出された各因子の因子負荷量（標準化推定値）、CR、AVE 値を示している。収束的妥当性に関して、全ての値が基準値（ $\lambda > .55$, Comrey and Lee, 1992; $CR \geq .60$, Bagozzi and Yi, 1988; $AVE \geq .50$, Fornell and Lacker, 1981）を上回った。モデル適合度については、CFI、TLI が基準値（ $\geq .90$, Bentler and Bonnet, 1980）を下回ったものの、RMSEA は基準値（ $\leq .10$, Browne and Cudeck, 1993）を満たした。適合度については、時点別の確認的因子分析の結果が良好であったことや、厳しい制約を課した分析であったことを考慮した上で、許容範囲であると判断し次の分析へ進んだ⁶。

表 9 は、各因子における合成変数の平均値、標準偏差、因子間相関を示している。表の左下に分割された 6 行 6 列の相関行列を参照すると、再検査信頼性を表す Time-1・Time-2 の同一因子同士の相関係数が有意な正の値を示したことから（対角成分の位置にある相関）、時点が異なっても安定した測定ができている証左を得た。さらに、それに比べて非対角要素の値が低いことから、6 つの潜在変数が異なった概念を測定していることも認められた（中村, 2003）。なお、図 14 において安定性係数（Time-1 の因子から Time-2 の対応する因子へ影響）がすべて有意であったことから、測定の安定性が認められた（関係構築努力: $\beta = .52, p < .001$, ロールモデル: $\beta = .53, p < .001$, 調和性パッション: $\beta = .52, p < .001$, 強迫性パッション: $\beta = .51, p < .001$, 誇り: $\beta = .66, p < .001$, ホームタウンに対する責任感: $\beta = .59, p < .001$ ）。基準値の検討において、各因子の AVE と因子間相関の二乗を比較した結果、すべての因子において AVE の値が上回ったことから、測定尺度の弁別的妥当性が認められた。以上のことから、SOC-R モデルを構成する本尺度群は Time-1・Time-2 の間で測定不変性が成立し、非常に強い制約下において統合的な妥当性、信頼性を高い水準で確認する

ことができた。

表 9. 各因子における合成変数の平均値、標準偏差、因子間相関

要因	平均	標準偏差	RE1	RM1	HP1	OP1	PR1	SC1	RE2	RM2	HP2	OP2	PR2	SC2
関係構築努力 (RE1)	4.26	0.64	<u>.61</u>	.20	.13	.06	.06	.31	.23	.01	.05	.02	.02	.08
ロールモデル (RM1)	3.20	0.79	.45 **	<u>.60</u>	.09	.14	.07	.29	.12	.18	.01	.01	.04	.07
チーム活動に対する 調和性パッション (HP1)	4.23	0.59	.37 **	.30 **	<u>.55</u>	.05	.05	.22	.06	.01	.16	.01	.01	.05
チーム活動に対する 強迫性パッション (OP1)	2.93	0.92	.24 **	.37 **	.22 *	<u>.62</u>	.24	.36	.02	.03	.00	.21	.07	.04
チームへの誇り (PR1)	3.17	0.88	.24 **	.27 **	.22 *	.49 **	<u>.57</u>	.22	.05	.12	.01	.09	.26	.08
ホームタウンに対する 責任感 (SC1)	3.60	0.74	.56 **	.54 **	.47 **	.60 **	.47 **	<u>.57</u>	.12	.06	.05	.10	.15	.29
関係構築努力 (RE2)	4.10	0.61	.48 **	.09	.22 *	.15	.16	.28 **	<u>.57</u>	.07	.23	.04	.01	.28
ロールモデル (RM2)	3.25	0.76	.34 **	.43 **	.08	.08	.20 *	.26 **	.27 **	<u>.59</u>	.01	.05	.08	.18
チーム活動に対する 調和性パッション (HP2)	4.17	0.61	.24 **	.12	.40 **	.10	.11	.23 *	.48 **	.11	<u>.58</u>	.02	.02	.19
チーム活動に対する 強迫性パッション (OP2)	2.70	0.99	.16	.19 *	-.02	.46 **	.27 **	.19 *	.20 *	.21 *	.16	<u>.66</u>	.23	.08
チームへの誇り (PR2)	3.15	0.81	.21 *	.35 **	.11	.31 **	.51 **	.28 **	.10	.29 **	.14	.48 **	<u>.51</u>	.12
ホームタウンに対する 責任感 (SC2)	3.52	0.74	.35 **	.24 **	.23 *	.32 **	.39 **	.54 **	.53 **	.42 **	.44 **	.28 **	.34 **	<u>.57</u>

† * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

†† 平均分散抽出 (AVE) を対角線上に表示し、因子間相関の二乗を対角線から右上半分に表示した。

表 10. 時点間における因子平均の差の検定 (Time-2 における因子平均 : 切片の推定値)

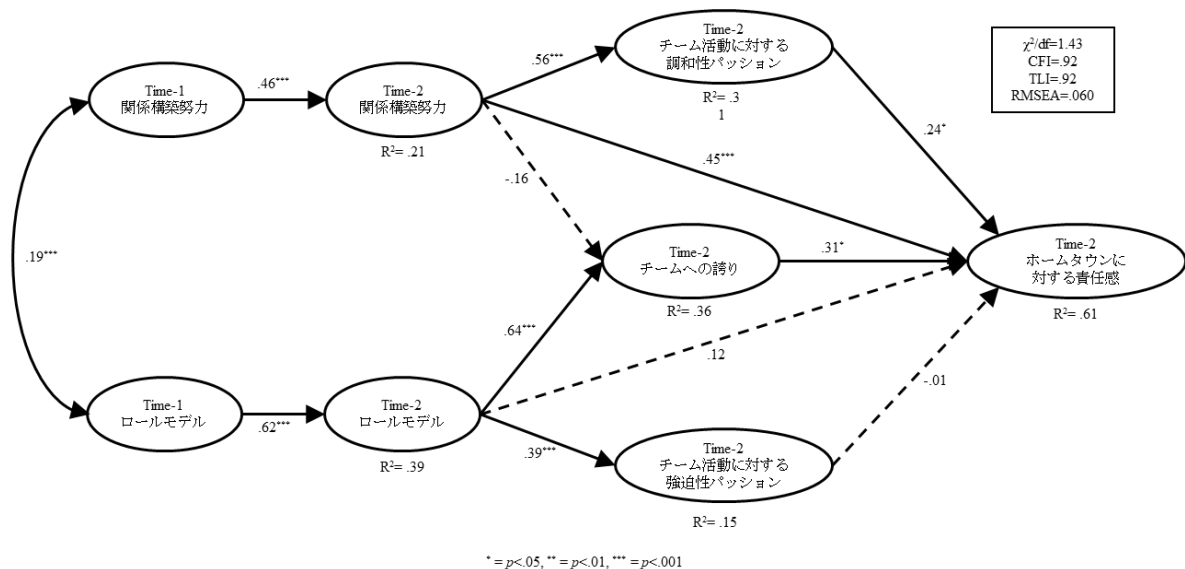
要因	標準化推定値	標準誤差	検定統計量	有意水準
関係構築努力	-.34	.10	-3.30	***
ロールモデル	-.01	.11	-0.07	n.s.
チーム活動に対する調和性パッション	-.17	.12	-1.44	n.s.
チーム活動に対する強迫性パッション	-.35	.11	-3.23	**
チームへの誇り	-.08	.10	-0.79	n.s.
ホームタウンに対する責任感	-.14	.09	-1.52	n.s.

† ** $p < .01$, *** $p < .001$

次に、各因子の時点間の比較を行った。表 10 は、各因子における Time-2 の因子平均の値をまとめたものである。基準となる Time-1 の因子平均が 0 であることから、すべての変数においてマイナスの値をとり、時間の経過とともに値が減少していることが明らかになった。中でも、関係構築努力と強迫性パッションが有意に低下したことが明らかになった。

4.4.3. 共分散構造分析による仮説モデルの検証

尺度の妥当性と信頼性が確認できたことから、仮説モデルの検証へと進んだ。ここでは、研究 2 で新たに仮説設定した SOC-R モデル構造において、ホームタウン関与、チームに対する個人的信念およびホームタウンに対する責任感の関係性を明らかにするため、共分散構造分析を行った。



† 観測変数および誤差は省略した。
 †† 関係構築努力およびロールモデルの時点間の関係については、対応する観測変数の因子負荷量・切片の等値制約、測定誤差の等分散、測定誤差間相関を仮定した。

図 15. 仮説モデルの検証結果

図 15 は、仮説モデルの検証結果を表している。まず、モデルの適合度指標に関しては、 $\chi^2/df=1.43$ 、CFI=.92、TLI=.92、RMSEA=.060 であり、基準値をすべて満たした。要因間のパスに関しては、まず、ホームタウン関与の時点間の関係においては、Time-1 から Time-2 にかけて関係構築努力 ($\beta=.47, p<.001$)、ロールモデル ($\beta=.62, p<.001$) とともに有意な影響が示された。よって、H1a・b は採択された。ホームタウン関与とチームにおける個人的信念の関係においては、関係構築努力からは調和性パッション ($\beta=.56, p<.001$) にのみ有意な影響が確認され、ロールモデルからは強迫性パッション ($\beta=.39, p<.001$) と誇り ($\beta=.64, p<.001$) への有意な影響が確認された。よって、H2a、c、d が採択され、H2b は棄却された。ホームタウン関与とホームタウンに対する責任感の関係においては、関係構築努力 ($\beta=.45, p<.001$) からのみホームタウンに対する責任感への正の影響が認められた。よって、H3a は採択され、H3b は棄却された。個人的信念とホームタウンに対する責任感の関係においては、調和性パッション ($\beta=.24, p<.05$) と誇り ($\beta=.31, p<.05$) からホームタウンに対する責任感への有意な影響が認められた。

4.4.4. 調整変数の検討：ホームタウン活動への参加回数が各変数の変化量に与える影響

本項では、前田・富山 (2020) への追加分析の結果として、選手のホームタウン活動への参加回数が各変数の変化量に与える影響を検証した結果を示す。調査におけるホームタウン活動への参加回数は自己申告であったため、回答が得られた 98 名について、中央値を基準に 4 回以下 ($n=52$) と 5 回以上 ($n=46$) に分け、各群における変数の変化量の平均値比較を行うため、 t 検定を行った (表 11)。なお、表 11 には参考値として Time-1 時点における在籍期間の平均値比較の結果も示し

ている。

t 検定の結果、ホームタウン活動数が少ない群より多い群の方が、ロールモデルの変化量が有意に大きいことが明らかになった。また、在籍月数の平均値比較の結果に有意差が無かったことから、在籍期間の長さに関わらず、ホームタウン活動の回数がロールモデルを高めた可能性が示唆された。その他の要因の変化量には、有意差は見られなかった。

表 11. ホームタウン活動数カテゴリ毎の各要因の変化量比較

各因子の変化量／在籍期間	ホームタウン活動 4回以下 (n=52)		ホームタウン活動 5回以上 (n=46)		<i>t</i> 値	<i>p</i> 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
関係構築努力 (Time-1・2の差)	-0.13	0.62	-0.21	0.60	.608	.544
ロールモデル (Time-1・2の差)	-0.08	0.85	0.28	0.81	-2.134	.035*
チームに対する調和性パッション (Time-1・2の差)	-0.02	0.62	-0.04	0.51	.147	.883
チームに対する強迫性パッション (Time-1・2の差)	-0.27	0.96	-0.26	1.07	-.091	.928
チームへの誇り (Time-1・2の差)	-0.08	0.88	0.05	0.88	-.740	.461
ホームタウンに対する責任感 (Time-1・2の差)	-0.06	0.74	-0.03	0.66	-.226	.822
在籍期間 (単位：月、Time-1時点)	17.63	15.27	18.87	25.78	-.292	.771

**p* < .05

4.5. 考察

研究 2 の目的は、プロ野球独立リーグ球団所属選手のホームタウンへの責任感に関する SOC-R モデルに関して、モデルを構築する要因の縦断的变化をとらえることと、経時的変化を含んだ新たなモデルを提案し、SOC-R モデルの循環性を検証することであった。

まず、研究 2 では、研究 1 にて信頼性と妥当性が確認された尺度を用い、関係構築努力、ロールモデル、調和性・強迫性パッション、誇り、ホームタウンに対する責任感という構成概念につ

いて、同一サンプルに対して 2 時点における測定を行った。その結果、数項目を削除し、モデル適合度にもわずかに課題は残ったものの、縦断データの因子分析によって、測定尺度の不変性が確認された。Time-2 の誇り因子において AVE が基準値を満たさなかったことに関しては、プロ野球独立リーグという特異な環境に要因があると考えられる。選手の契約のほとんどが単年契約であるため、シーズン終盤は、多くの選手が移籍や引退などの去就を考える時期になる。誇りは本研究で唯一の、チームそのものへの意識を測定する尺度であることから、シーズン終盤という一時点だけでみた場合にばらつきが生じた可能性がある。縦断データの因子分析においては、因子平均と分散の固定、因子負荷量と切片への等値制約、誤差の等分散および誤差間相関の仮定という強い制約を課した中でモデルが成立し、さらに収束的・弁別的妥当性、再検査信頼性、安定性が確認されたことは、これらの尺度の統合的な妥当性、信頼性が高いレベルにおいて保証されたことを裏付けた。

次に、各因子平均の縦断的比較では、シーズン序盤から終盤にかけて関係構築努力と強迫性パッションが有意に低下したことが明らかになった。関係構築努力の低下については、これにもプロ野球独立リーグという環境が影響していると推察される。シーズン終盤に、一定数の選手がホームタウンを離れるという選択肢が出てくるタイミングであったことが要因として考えられる。ただし、平均値は 4 点台と比較的高い値を推移していることから、依然としてホームタウンに対する態度は積極的であることも認められる。また、強迫性パッションの低下に関しては、研究 1 の知見を支持し、チーム活動に対する自己統制が時間の経過とともに弱化したことも考えられる。チームに所属し、ホームタウンとの交流を重ねたことによる効果であるという見方もできる

であろう。

さらに、Nowell and Boyd (2010) が提案した SOC-R モデルを経時的変化の視点を含めて検証するために、ホームタウン関与の時点間の影響を仮定した上で、シーズン終盤においてホームタウン関与がチーム活動に対するパッションやチームへの誇りに影響し、さらにホームタウンに対する責任感に影響を与えるという仮説モデルを検証した。設定した 8 つの仮説のうち、6 つの仮説が採択され、モデル適合度の観点からも、縦断データを含む各変数の影響と関係性を正しく評価することができたと言える。まず、関係構築努力とロールモデルに関する時点間の影響は測定の実証性を示すものであった。関係構築努力から誇りへの有意な影響がみられなかったのは、ホームタウンのファンからの応援や賞賛を受けながら積極的な関係構築を目指したとしても、自らが育成チームに所属しているという現状に満足できず誇りを持つことができない選手が一定数含まれていることが影響していると考えられる。一方で、ロールモデルはチームが目指す規範への適合や高潔な行動の意思表示であることから、誇りへの強い影響が認められたことが推察され、誇りが自己統制的に醸成されていることが示唆された。また、ロールモデルからホームタウンに対する責任感への影響が認められなかった点に関しては、直接効果ではなく、ロールモデルが誇りを介してホームタウンに対する責任感に影響を与えるという、誇りによる間接効果が影響していると考えられる。これは、ホームタウンにおいてお手本であろうという態度が直接的に責任感を高めるのではなく、シーズンを通して活動を重ねるにつれて、チームに所属していることに対する価値観がまず高められた事を意味している。そして、関係構築努力からホームタウンに対する責任感へ直接的な影響、調和性パッションを介しての間接的な影響が認められたこと、強迫性パ

ッションからホームタウンに対する責任感への影響が認められなかったことは、Swanson and Kent (2017) および研究 1 で得られた知見を支持する結果となった。1 シーズンという一定期間ホームタウンとの相互作用を経験してきた選手において、ホームタウンとの関係性を積極的に構築しようという気持ちが責任感を強化すると同時に、翻ってチーム活動に対する心地よいパッションを強化することにもつながっていることが明らかになった。また、ホームタウンにおいて手本になろうという意識は、チームへの誇りを介して責任感を強化するが、チーム活動に対する強迫的で義務的なパッションを育てることも明らかになった。ホームタウンに対する責任感への影響について、シーズン序盤において強迫的パッションが最も強く影響していたのに対し、シーズン終盤で有意な影響が見られなかったことは、ホームタウンに対する責任感を構成する性質が、時間を経ることによってポジティブなものに変容したことを示唆している。シーズン終盤にかけて各変数の平均値には減少傾向が見られたものの、変数間の影響に関しては、新たな仮説モデルの検証が行われたことによって、Nowell and Boyd (2010) の構築した SOC-R モデルの循環性を実証することができた。

また、1 シーズンを通して選手が行ったホームタウン活動の回数が、各要因の変化量に与える影響を検証した。結果として、ホームタウン関与の要因うち、ロールモデルの変化量について、ホームタウン活動回数が多い群の方が有意に大きかったことは、選手がホームタウン活動を通じて、地域のお手本になろうという意識を育てた可能性を示唆している。ロールモデルは、研究 2 の仮説モデルにおいて、チームへの誇りを媒介してホームタウンに対する責任感を高める要素となっている。したがってホームタウン活動は、選手自身が「ホームタウンのため」という責任感や、

社会性を育てることに寄与するものであると言える。

以上のことから、研究2の学術的貢献は、Nowell and Boyd (2010) のSOC-Rモデルに関して、これまで個別の研究を組み合わせることで構築していたモデルであったために残っていた「SOC-Rと関係変数との因果関係の不明瞭さ」を部分的に解消することができた点にある。これまでSOC-Rは、あるコミュニティ文脈において個人が様々な経験をすることによって個人的信念を育み醸成されるものとされており、積極的なコミュニティ関与を生み出す性質のものとして説明されていた。しかし、コミュニティ関与を高めていく（コミュニティに対して積極的な態度や行動をとる）ことによって、自らのコミュニティ文脈における信念を強化するという影響も検討の余地があり、縦断的研究が必要とされていた。研究2では、ホームタウンに包摂された地域密着型プロスポーツチームに所属する選手を対象とし、シーズンの序盤と終盤において同一のサンプルからデータを収集することにより、彼らの心理的側面に関する縦断的变化をとらえることができた。さらに時間の経過を考慮することによって、過去のSOC-R研究に新たな知見をもたらすことができた。実践の場面においては、プロ野球独立リーグ所属球団では、選手が好成績を収めてNPBのプロ野球チームに入団することを目指しているため、選手が長期間同じチームに所属し続けることが稀な環境の中でのチームマネジメントが求められる。研究2の結果を踏まえると、選手のポジティブな心境の変化（シーズン終盤にかけての強迫性パッションの低下）があったこと、ホームタウンへの関与がさらに個人的信念を強化する結果が得られたことから、選手を野球だけでなくファンとの相互交流の場に積極的に向かわせることによって、技術向上などに自発的に関わるチーム活動へのパッションを育てることができる。つまり選手自身が良い精神状態でスポーツ

に打ち込めるようになることが期待される。シーズン序盤と終盤の半年の期間ではあるものの、選手の心境の変化をとらえることができたことは、チーム全体にとって重要な経営資源・ブランドである選手の質を高める可能性を示すことにつながったのではないだろうか。組織は、選手の心理的側面を理解したマネジメントによって、ホームタウンからより支援される組織を目指すことが今後も求められる。

4.6. 研究2のまとめ

研究2では、研究1で使用したサンプルへの追跡調査によって、プロ野球独立リーグ球団所属選手のシーズン終盤にかけての個人的信念、ホームタウンに対する責任感、ホームタウン関与の変容を縦断的に検討した。その結果、チーム活動に対する強迫性パッション、関係構築努力が有意に低下したことが明らかになり、さらに、ホームタウン活動への参加数が多い選手ほど、ロールモデルになろうという意識が高まることも明らかになった。次に、経時変化を加味した新たなSOC-Rモデルを構築することによって、ホームタウン関与から個人的信念とホームタウンに対する責任感への影響を確認し、SOC-Rモデルの循環性を実証した。

一方で、研究2には、以下のような点で限界が存在する。一つ目は、縦断データ収集における課題が残る点である。本来、縦断データとして扱うことに対して望ましいのは3時点のデータであると言われており（シンガー・ウィレット, 2012）、2時点でも増減などの変化が示されるもの（高橋, 2017）、説明力はどうしても低下してしまう。しかし、本研究の対象としたプロ野球独立リーグに関しては、シーズンが4月～9月と約半年弱という短い期間の中で、効果的に3時点の

データを収集することが難しいというジレンマもある。研究 2 の結果からも、シーズン序盤から終盤にかけて、ほとんどの変数に有意な変化が見られなかったことについて、測定期間の影響を検討する必要がある。

二つ目は、サンプルサイズの問題である。一般的に縦断データを収集する際には、各時点において、同一人物からの回答を得る必要があり、回を重ねるごとに欠損値が多くなるとされている。本研究では、まず対象がプロ野球独立リーグ球団所属選手ということもあり全体の母数が 300 程度（1 チーム平均 20~25 名）であり、さらにシーズン中に移籍したり引退する選手がいることを鑑みると必然的に対象サンプルも減少する。実際のデータ収集においては、それに加えて Time-1 から Time-2 にかけて約 50 のサンプルを不完全な測定値があったことで欠損扱いとしなければならなかった。サンプルサイズの小ささが、縦断データの因子分析における一部の尺度の信頼性低下や、モデル全体の適合度の低下を引き起こした直接的な要因であったという見方もできるため、今後はより多くのサンプルの収集が必要となるだろう。

三つ目は、研究結果の一般化に向けて課題を有している点である。研究対象がプロ野球独立リーグの選手であったことから、NPB や J リーグ等のトップリーグのチームに所属している選手とは、多様な点において特性が異なることが考えられる。本研究結果の一般化に向けては、今後、幅広いプロスポーツチームに所属する選手を対象とした研究の更なる蓄積が必要であろう。

研究 2 では、地域密着型プロスポーツ組織に所属する選手のホームタウンに対する責任感と、それを取り巻くホームタウン関与や個人的信念の関係性を縦断的に明らかにすることを試みた。ただし、具体的に選手自身のどのような経験、体験が各変数に影響していたのかは量的調査の範

疇を超える点でもある。今後は、インタビュー調査等の質的研究を通じて、さらに詳細な選手たちの心理的変容をとらえることで、より適切なマネジメントが可能になるだろう。

第5章 総合考察

5.1. 総合考察

本研究の目的は、地域密着型プロスポーツチームが行う地域密着戦略の観点から、その中核的な役割を担う選手のホームタウンに対する態度がどのような要因と関わり合って形成されるかを明らかにすることであった。目的を達成するため、第2章では選手を取り巻くコミュニティの重層性を理解するための関連研究のレビューを行い、選手がホームタウンへの関与を高める要素を特定する手段として、責任としてのコミュニティ感覚理論（SOC-R）の援用が効果的であることが明らかになった。また、SOC-Rに関する先行研究レビューでは、Nowell and Boyd（2010）が最初に概念化したSOC-Rモデルの実証について、これまで対象が限られており実証研究が不足していること、SOC-Rの先行要因が十分に検討されていないこと、コミュニティの重層性が考慮できていないこと、時間の経過を加味しているにもかかわらず縦断的研究が行われていないことが先行研究の限界として示された。そこで、本研究では、2つの実証研究によって、地域密着型プロスポーツチーム所属選手のSOC-Rモデルを構築し、ホームタウンに対する責任感および関連要因の縦断的変化、モデルの循環性の検証を行うこととした。

第3章の研究1では、シーズン序盤における横断的研究によって、選手のSOC-Rモデルを構築した。具体的には、選手のホームタウンに対する責任感（SOC-R）について、先行要因としてのチームに対する個人的信念（選手のチーム活動に対する調和性・強迫性パッションとチームへの誇り）からの影響と、結果要因としてのホームタウン関与（ロールモデルと関係構築努力）への影響を検討した。チームに対する個人的信念はホームタウンに対する責任感に正の影響を与え、ホ

ームタウンに対する責任感はホームタウン関与に正の影響を与えることが明らかになり、SOC-Rモデルが実証された。この結果から、SOC-Rモデルは地域密着型プロスポーツの文脈においても援用可能であることが実証され、コミュニティの重層性（チーム→ホームタウン）を加味した上でも成立することが明らかになった。さらに、選手の在籍期間が1年未満のグループと1年以上のグループに分けて各変数の平均値比較を行ったところ、在籍期間の長い1年以上のグループの方が、チーム活動に対する強迫性パッションが有意に低いことが明らかになった。さらに、同グループ比較において、SOC-Rモデルの要因間の影響についても比較検討したところ、特にホームタウンに対する責任感を説明する先行要因からの影響に差異が見られた。在籍期間が1年未満のグループでは、チーム活動に対する強迫性パッションのみが有意に正の影響を与え、1年以上のグループでは、チーム活動に対する調和性パッションとチームへの誇りが有意に正の影響を与えていることが明らかになった。これは、チームへの在籍期間が長くなるほど選手のホームタウンでの生活も長くなり、チーム活動への強迫観念が薄くなったことによって、自発的な感情からホームタウンに対する責任感を生み出すようになったことを示唆している。

第4章の研究2においては、シーズン終盤における追跡調査のデータを用いた縦断的研究を展開し、選手のSOC-Rモデルに含まれる各変数の縦断的变化を確認した。さらに、時間の経過を加味した新たなSOC-Rモデルを構築したことによって、シーズン終盤においてホームタウン関与が個人的信念とホームタウンに対する責任感に与える影響を明らかにし、SOC-Rモデルの循環性を実証した。また、調整変数としてのホームタウン活動回数の影響も検証した。各変数の縦断的变化においては、関係構築努力とチーム活動に対する強迫性パッションが、シーズン序盤から終盤

にかけて有意に低下したことが明らかになった。特に、チーム活動の強迫性パッションがシーズン終盤にかけて有意に低下したという結果は、研究 1 において 1 年以上在籍していた選手グループの方が低いという結果と連動するものであり、チーム活動に対する強迫性パッションは、時間の経過によって低下するものであることが実証されたと言える。また、SOC-R モデルの循環性を検証できたことは、既存の SOC-R 研究への大きな学術的貢献である。シーズン終盤の SOC-R モデルでは、ホームタウンに対する責任感が関係構築努力およびチーム活動に対する調和性パッション、チームへの誇りから影響を受けていることが明らかになったが、これは、シーズンを通じて選手をマネジメントしながら地域密着を図っていく地域密着型プロスポーツチームの特徴を反映したものであると言える。さらに、ホームタウン活動数の少ない群と多い群における各変数の変化量比較では、在籍期間に関わらずホームタウン活動が多い選手ほどロールモデルの意識が高まったことが明らかになった。この結果は興味深く、選手はホームタウン活動を通じて地域住民やファンとの触れ合いを重ねることにより、選手としてのあるべき姿を育てていることが考えられる。このことから、チームが行うホームタウン活動は、ホームタウンへの貢献や課題解決の手段として機能する一方で、選手の人材育成の手段としても効果的に機能している可能性がある。

研究 1 と研究 2 の結果を総合すると、本研究では、コミュニティの重層性を理解し、コミュニティ感覚理論を援用することによって、地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する態度の形成過程と発展過程を可視化することに成功した。スポーツマネジメントにおいて、地域密着型プロスポーツチームは、常にホームタウンをより良くするように努め、多様なステークホルダーとの良好な関係を構築しなければならない。特に、経営基盤の安定していないチ

ームにおいては、試合以外でホームタウンに価値を提供するために、多くのホームタウン活動を展開している。ホームタウン活動の質を向上させることは数多くのステークホルダーからの支援にも繋がるため、その活動の中核となる選手のマネジメントは特に重要であると同時に、選手にとって活動が負担になっている側面もあり、小規模チームではなおさらである。そのような状況において、本研究では、選手がシーズンを通して、ホームタウンという文脈に長らく身を置くことによってチーム活動全般に対して強迫観念を持たなくなり、ホームタウン活動の経験から社会的責任の意識を獲得する様子が描かれた。チーム活動に対する強迫性パッションが低下することは、つまり、選手が活動を強制されている感覚が薄くなることを意味し、燃え尽き症候群などのネガティブな影響が引き起こりにくくなることも期待される (Trepanier et al., 2014)。また、選手のホームタウン活動の経験がロールモデルの意識を高めていたことは、選手がホームタウンの人々との触れ合いの中で、適切な振る舞いがどのようなものかを理解するようになったことを示唆している。ロールモデルの意識は、チームへの誇りの感情に影響することに加え、それを介してホームタウンに対する責任感を高める要素でもある。つまり、ホームタウンに対する責任感形成するプロセスにおいて、ロールモデルの意識の高まりは、選手の自己効力感を高めたり、活動に対するパフォーマンスを高めることにもつながる可能性がある (Todd and Harris, 2009)。総合的にみると、選手にとってホームタウンと密接に関わる地域密着型プロスポーツチームに身を置くことそのものや、ホームタウン活動に参加することは、結果としてポジティブな影響を生み出すことにつながっていることが明らかになった。

今後も、地域密着型プロスポーツチームは、ホームタウンにおける多様なステークホルダーと

の関係性構築のためにどのような活動を行えば良いかを永続的に検討していかなければならない。

チームの運営組織としては、ホームタウン活動の意義を改めて認識し、選手に対しても地域と選手自身に与える効果を伝えていくことが、選手のモチベーション維持にもつながっていくだろう。

5.2. 本研究の限界と今後の課題

最後に、本研究の限界と課題についてまとめる。まず、第一にサンプルサイズおよびデータ収集についての課題が挙げられる。第3章および第4章でも述べた通り、本研究で扱った変数や分析方法に対してサンプルサイズが十分でなかったことにより、尺度の信頼性の低下が見られた上、分析方法が制限された。さらに、縦断データを2時点ではしか収集できなかった点にも課題は残る。

本来、縦断的研究に適しているのは3時点以上で取得されたデータを用いることであり、2時点のデータ収集では分析方法も限られてしまう。そもそも1シーズンにおける在籍選手が300程度であるプロ野球独立リーグという特殊な文脈であるものの、さらなるサンプルの獲得や収集時点の追加を試みることによって、研究の信頼性を向上させることが可能になるだろう。

第二に、SOC-Rモデルの構成要素に検討の余地が残されていることである。本研究では、個人的信念やホームタウンに対する責任感だけでなく、ホームタウン関与についても心理的変数を用いてSOC-Rモデルを構築した。その結果、選手自身がホームタウンに対して責任感を形成した結果として、地元ファンとの関係構築やロールモデルとしての意識を持つようになり、さらにそれらはチーム活動に対する個人的信念への影響も有していることが明らかになった。今後は、ホームタウン関与に実際の行動変数（従事する時間や回数）を組み込むことで、SOC-Rモデルのさら

なる多面的な検証が可能になることが考えられる。研究 2 においては、ホームタウン活動への参加回数を調整変数としてその影響を検討することができたが、選手のホームタウンに対する責任感、生活圏においての出来事や、チームの観客動員数による応援されている実感にも影響されることが考えられる。さらなる展望としては、質的研究にも取り組むことにより、選手のホームタウンに対する責任感を刺激する行動要因に対する検討を重ねていくことが重要となる。

第三に、一般化に向けての課題が挙げられる。本研究は、研究対象をプロ野球独立リーグ球団所属選手とした一つの事例研究にすぎない。リーグやチームの規模や取り巻く環境によって、選手の特性は非常に異なっていることが考えられる。特に、地域密着型プロスポーツの中でも、NPB や J リーグ等のトップリーグにおける選手との差異は大きいことが予測される。また、時代背景やチームの取り組む活動内容によっても、細かな要因が数多くあげられるため、今後は規模やスポーツの異なる他のリーグ・チームとの比較が求められるだろう。

注釈

1. JリーグやBリーグでは、チームを運営する運営会社を含む全体のスポーツ組織のことを「クラブ」と呼称し、競技組織のことを「チーム」と呼称するなど、呼称の使い分けを行っている場合もあるが、野球などでは「球団」「チーム」という呼称が一般的である。そのため本研究においては、一般的な表現として、あらゆるスポーツ組織の運営会社を含む組織全体のことを示す場合には「チーム」という表現を統一的に用いることとする。ただし、主語が明確な場合、例えばJリーグやBリーグの場合には「クラブ」、NPB、プロ野球独立リーグ等の場合には「球団」および「チーム」という表現を用いることとする。
2. Nowell and Boyd (2014a) が SOC-R 尺度を開発するために使用した Mabry (1998) の市民態度尺度には、「個人の社会的価値」(例: コミュニティに貢献するといコミットメントの自己評価) および「市民態度」(例: 人々の社会問題を解決するための個人の責任) という2つの要素が含まれている。実際に、サービスマーケティングを学びコミュニティで実践を行う学生において、サービス受益者と対話する時間がある場合に市民態度尺度における価値が増加したという結果が得られた。したがって、選手がホームタウンで過ごす時間が長くなるにつれて、ホームタウンに対する責任感が高まることが予測され、ホームタウンに対する責任感の先行要因と結果要因の間の影響に多少の変化をもたらす可能性がある。
3. 追跡調査においては、調査の過程においてサンプルが脱落するケースが多く、特に脱落が内生変

数によるものである場合、推計結果に深刻なバイアス（サンプル減少バイアス）をもたらす可能性がある（坂本,2006）。したがって、Figlio et al. (2013) の手順を参考にし、本研究におけるサンプル減少バイアスの有無を確認した。まず、Time-1 から Time-2 にかけて 36 票のサンプルが脱落していることから、Time-1 の取得群（n=136）と脱落群（n=36）において、測定尺度である 6 因子それぞれの合成得点の平均値比較を行った。その結果、両群間に統計的な差異は確認されなかった（関係構築努力 $t(168)=1.015, n.s.$; ロールモデル $t(168)=-.095, n.s.$; 調和性パッション $t(168)=.236, n.s.$; 強迫性パッション $t(169)=.616, n.s.$; 誇り $t(168)=.862, n.s.$; ホームタウンに対する責任感 $t(167)=.859, n.s.$ ）。次に、Time-2 において最終的に採用した採用群（n=120）と、それを基軸とした Time-1 からの脱落群（n=52）においても同様に、両群間での 6 因子それぞれの平均値比較を行った結果、全ての因子において両群間の統計的な有意差は無かった。以上のことから、本研究で採用したサンプルにおけるサンプル減少バイアスは確認されなかった。

4. 本研究における母集団はサイズが 10 万人以下の有限母集団であることから、標本誤差 e を以下の数式にて算出した（西内,2013; 菅,2018）。（ N = 母集団、 n = 標本数、 p = 回答率 : p は 0.5 とした場合に最大値となるため、以下の計算では $p = 0.5$ とした。）

$$e = 1.96 \times \sqrt{\frac{N-n}{N-1} \times \frac{p(1-p)}{n}}$$

5. 村山 (2012) は、Messick (1989, 1995) や Cronbach (1971) の妥当性に対する解釈をまとめ、

妥当性の検証は「ある・ない」といった2 値的ではなく最終的には統合的に判断すべきであるとし、目的や解釈による程度問題としてとらえることの重要性を説いている。特に、「ある尺度得点が安定的なパーソナリティ特性を反映すると解釈する場合は、再検査信頼性が高いという証拠が必要になるため、信頼性が妥当性を支える重要な証拠ととらえられる」という主張が本研究の手続きとも一致する。

6. 南風原（2002）は、一般化可能性および妥当性の向上に伴うモデル適合度の低下を許容してもかまわないと主張しているが、本研究における縦断データの因子分析の手続きおよび結果に限りそれに該当すると判断した。モデル適合度が許容可能かどうかについては、Schermelleh-Engel et al.（2003）と 芳賀・阿久津（2014）を参照し、 $\chi^2/df \leq 2$ という基準を満たしていること、自由度に影響を受けない RMSEA が基準値を満たしていることを総合的に評価した。

7. サンプルサイズ決定法（菅, 2018）に基づき、母集団のサイズを 300 とした場合、信頼率 95% において標本誤差を 5%以下とするために必要なサンプルサイズは 169 票であった。計算式は以下の通りである。

$$n \geq \frac{N}{\left(\frac{e}{1.96}\right)^2 \left(\frac{N-1}{p(1-p)}\right) + 1}$$

参考文献

- Agha, N. (2013) The Economic impact of stadiums and teams: the case of minor league baseball. *J Sport Econom.*, 14 (3) : 227-252.
- Agha, N. and Coates, D. (2015) A compensating differential approach to valuing the social benefit of minor league baseball. *Contemp. Econ. Policy.*, 33: 285-299.
- Anagnostopoulos, C., Winand, M., and Papadimitriou, D. (2016) Passion in the workplace: empirical insights from team sport organisations. *Eur. Sport. Manag. Q.*, 16: 385-412.
- Arai, A., Ko, Y. J., and Kaplanidou, K. (2013) Athlete brand image: Scale development and model test. *Eur. Sport Manag. Q.*, 13: 383-403.
- Arai, A., Ko, Y. J., and Ross, S. (2014) Branding athletes: exploration and conceptualization of athlete brand image. *Sport Manage. Rev.*, 17: 97-106.
- 新井彬子・浅田瑛 (2019) アスリートのブランド価値マネジメント. *スポーツマネジメント研究*, 10: 7-18.
- 朝倉雅史 (2016) 体育教師の学びと成長—信念と経験の相互影響関係に関する実証研究—. 学文社：東京.
- 浅野良輔 (2014) 多母集団同時分析. 小杉考司・清水裕士編著, *M-plus と R による構造方程式モデリング入門*, 北大路書房：京都, pp. 103-116.
- Babiak, K. and Wolfe, R. (2009) Determinants of corporate social responsibility in professional sport: internal and external factors. *J. Sport Manag.*, 23: 717-742.

Bagozzi, R. and Yi, Y. (1988) On the evaluation of structural equation models. *J. Acad. Mark. Sci.*, 16: 74-94.

Bentler, P. M. and Bonnett, D. G. (1980) Significance tests and goodness of fit in analysis of covariance structures. *Psychol Bull*, 88: 588-606.

Bess, K.D., Fisher, A. T., Sonn, C. C., and Bishop, B. J. (2002) Psychological sense of community: theory, research, and application. In: Fisher, A. T., Sonn, C. C., and Bishop, B. J. (Eds.) *Psychological sense of community: research, applications, and implications*. Springer: New York.

Bishop, P. D., Chertok, F., and Jason, L. A. (1997) Measuring sense of community: beyond local boundaries. *J Prim Prev.*, 18 (2) : 193-212.

備前嘉文・原田宗彦 (2010) スポーツ選手が消費者の購買行動に及ぼす影響：商品推奨者としての役割. *スポーツマネジメント研究*, 2: 19-32.

B.LEAGUE (B リーグ) 公式サイト. <https://www.bleague.jp/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

B.LEAGUE (B リーグ) 公式サイト. B.LEAGUE 2018-19 シーズン (2018 年度) クラブ決算概要. https://www.bleague.jp/files/user/about/pdf/financial_settlement_2018.pdf, (参照日 2020 年 10 月 20 日) .

Boyd, N. and Nowell, B. (2017) Testing a theory of sense of community and community responsibility in organizations: An empirical assessment of predictive capacity on employee well-being and organizational citizenship. *J Community Psychol.*, 45: 210-229.

Boyd, N. and Nowell, B. (2020) Sense of community, sense of community responsibility, organizational

- commitment and identification, and public service motivation: a simultaneous test of affective states on employee well-being and engagement in a public service work context. *Public Manag. Rev.*, 7: 1024-1050.
- Boyd, N., Nowell, B., Yang, Z., and Hano, C. M. (2017) Sense of community, sense of community responsibility, and public service motivation as predictors of employee well-being and engagement in public service organizations. *Am Rev Public Adm.*, 1-22.
- Bronfenbrenner, U. (1979) *The ecology of human development: experiments by nature and design*. Harvard University Press: Cambridge.
- Browne, M. W. and Cudeck, R. (1993) Alternative ways of assessing model fit. In: Bollen, K.A., and Long, J.S. (Eds.) *Testing structural equation models*. Sage: Newbury Park, pp. 136-162.
- Carron, A. V., Loughhead, T. M., and Bray, S. R. (2005) The home advantage in sport competitions: Courneya and Carron's (1992) conceptual framework a decade later. *J Sports Sci.*, 23: 395-407.
- Chalip, L. (2006) Toward a distinctive sport discipline. *J. Sport Manag.*, 20: 1-21.
- Chavis, D. M., Hogge, J. H., McMillan, D. W., and Wandersman, A. (1986) Sense of community through Brunswick's lens: a first look. *Am J Community Psychol.*, 14: 24-40.
- Chow, R. M. and Lowery, B. S. (2010) Thanks, but no thanks: the role of personal responsibility in the experience of gratitude. *J Exp Soc Psychol.*, 46: 487-493.
- Clopton, A. W. (2007) Predicting a sense of community amongst students from the presence of intercollegiate athletics: what roles do gender and BCS-affiliation play in the relationship? *The SMART Journal*, 4 (1) :

95-110.

Clopton, A. W. (2008) College sports on campus: uncovering the link between fan identification and sense of community. *International Journal of Sport Management*, 9 (4) : 343-362.

Comrey, A. L. and Lee, H. B. (1992) *A first course in factor analysis* (2nd ed.) . Lawrence Erlbaum Associates: Hillsdale.

Cronbach, L. J. (1971) Test validation. In: Thorndike, R. L. (Ed.) *Educational measurement* (2nd ed.) . American Council on Education: Washington, pp 443-507.

Curran, T., Hill, A. P., Appleton, P. R., Vallerand, R. J., and Standage, M. (2015) The psychology of passion: a meta-analytical review of a decade of research on intrapersonal outcomes. *Motiv Emot.*, 39: 631-655.

出口順子・沖村多賀典・井澤悠樹・徳山友・菊池 秀夫 (2017) Jリーグ観戦者のクラブ支援意図：チームアイデンティフィケーションとの関係性の検討. *スポーツマネジメント研究*, 9 (2) : 19-34.

出口順子・辻洋右・吉田政幸 (2018) チーム・アイデンティフィケーション：理論的再検証. *スポーツマネジメント研究*, 10: 19-40.

Elkins, D. J., Forrester, S. A., and Noel-Elkins, A. V. (2011) The contribution of campus recreational sports participation to perceived sense of campus community. *Recreational Sports Journal*, 35: 24-34.

Figlio, D., Rush, M., and Yin, L. (2013) Is it live or is it internet? experimental estimates of the effects of online instruction on student learning. *J Labor Econ.*, 13: 763-784.

Flaherty, J., Zwick, R. R., and Bouchey, H. A (2014) Revisiting the sense of community index: a confirmatory

factor analysis and invariance test. *J Community Psychol.*, 42 (8) : 947-963.

Fリーグ公式サイト. <https://www.fleague.jp/>, (参照日 2020年11月23日) .

Fornell, C. and Larcker, D.F. (1981) Evaluating structural equation models with unobservable variables and measurement error. *J Mark Res.*, 18: 39-50.

Godfrey, P. C. (2009) Corporate social responsibility in sport: an overview and key issues. *J. Sport Manag.*, 23: 698-716.

Gusfield, J. R. (1975) *The community: a critical response*. Harper Colophon: New York.

藤本淳也 (2008) スポーツ・スポンサーシップ. 原田宗彦・藤本淳也・松岡宏高編著, スポーツマーケティング. 大修館書店 : 東京, pp. 133-155.

藤本淳也・原田宗彦・James, J. D.・奥永憲治・梅本祥子 (2012) Jリーグクラブの「ファンづくり」が「まちづくり」に及ぼす影響に関する研究 : ホームタウン住民のチームアイデンティティと地域意識に注目して. *SSF スポーツ政策研究*, 1 : 160-167.

南風原朝和 (2002) モデル適合度の目標適合度 : 観測変数の数を減らすことの是非を中心に. *行動計量学*, 29: 160-166.

芳賀麻誉美・阿久津聡 (2014) 顧客ゴールの動的変容と思考形式の影響 : 顧客ゴール育成のシナリオの可能性. *マーケティング・ジャーナル*, 33 (3) : 46-71.

原田宗彦 (2015a) スポーツマネジメントをめぐる社会的背景. 原田宗彦・小笠原悦子編著, スポーツマネジメント (改訂版) 大修館書店 : 東京, pp. 3-26.

原田宗彦 (2015b) スポーツチームのマネジメント. 原田宗彦・小笠原悦子編著, スポーツマネジ

- メント (改訂版) 大修館書店 : 東京, pp. 127-149.
- Hassan, D. (2014) Sport and communities: an introduction. *Sport Soc.*, 17 (1) : 1-5.
- 林泰良 (2016) 第 3 章スポーツビジネスマネジメントー地域と結びつくスポーツクラブチームの構築. 特集 : いま, 注目を集めるスポーツビジネス, 企業診断ニュース, 2016. 9.
- Hillery, G. (1955) Definitions of community: areas of agreement. *Rural. Sociol.*, 20: 111-123.
- 広瀬一郎 (2004) 「J リーグ」のマネジメント. 東洋経済新報社 : 東京.
- Hu, L. T. and Bentler, P. M. (1998) Fit indices in covariance structure modeling: sensitivity to underparameterized model misspecification. *Psychol Methods.*, 3: 424-453.
- 堀繁・木田悟・薄井充裕 (2007) スポーツで地域をつくる. 東京大学出版会 : 東京.
- 市木亮・山本悦史・山下秋二 (2014) J クラブの地域密着戦略と組織的知識創造プロセス. 体育経営管理論集, 6: 19-29.
- 飯田香織 (2014) コミュニティ心理学におけるコミュニティの定義とコミュニティ心理学の独自性. 立命館産業社会論集, 49 (4) : 79-99.
- 池田純 (2016) 空気をつくり方. 幻冬舎 : 東京.
- 猪俣宏之 (2009) 選手マネジメント「税務と資産形成」. 広瀬一郎編著, スポーツ・マネジメント : 理論と実務. 東洋経済新聞社 : 東京, pp. 138-163.
- 井上雅雄 (2009) 職業としてのアスリートとプロスポーツの諸問題. *スポーツ社会学研究*, 17 (2) : 33-37.
- 井上尊寛・松岡宏高・吉田政幸・蔵柵利恵子 (2018) スタジアムにおけるスポーツ観戦関与. スポ

ーツマネジメント研究, 10: 41-58.

石原豊一 (2015) もうひとつのプロ野球. 若者を誘引する「プロスポーツ」という装置. 白水社 : 東京.

伊藤大幸 (2018) 構造方程式モデリングの基礎. 伊藤大幸編著, 心理学・社会科学研究のための構造方程式モデリング: Mplus による実践[基礎編]. ナカニシヤ出版 : 京都, pp. 1-32.

Jリーグ (2019) Jリーグホームタウン活動調査 2019 年度版.

<https://www.jleague.jp/docs/aboutj/hometown/2019-hometown.pdf>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

Jリーグ公式サイト. <https://www.jleague.jp/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

Jリーグ公式サイト. 2019 年度 J クラブ個別経営情報開示資料.

https://www.jleague.jp/docs/aboutj/regulation/2020/02_03.pdf, (参照日 2020 年 10 月 20 日) .

Jリーグ公式サイト. About Jリーグ : Jリーグの歴史. <https://www.jleague.jp/aboutj/history/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

Jリーグ公式サイト. Jリーグ規約. https://www.jleague.jp/docs/aboutj/regulation/2020/02_03.pdf, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

Jiang, J. T., Klein, G., and Carr, C. L. (2002) Measuring information system service quality: SERVQUAL from the other side. MIS Q., 26: 145-166.

菅民郎 (2018) アンケート分析入門 : Excel による集計・評価・分析. オーム社 : 東京.

金子郁容・玉村雅敏・宮垣元編 (2009) コミュニティ科学—技術と社会のイノベーション. 勁草書房 : 東京.

神吉直人 (2014) 香川オリーブガイナースの現状と課題. 香川大学経済論叢. 86 (4) : 101-119.

勝田隆 (2005) 真のコーチングはアスリートをどう育てるのか. 中村敏雄編, 現代スポーツ評論 12.

創文企画 : 東京, pp. 42-53.

風見正三 (2009) 持続可能な社会を築くコミュニティビジネスの可能性. 風見正三・山口浩平編著,

コミュニティビジネス入門. 地域市民の社会的事業. 学芸出版社 : 京都, pp. 11-47.

喜瀬雅則 (2016) 牛を飼う球団. 小学館 : 東京.

清宮政宏 (2016) プロ野球独立リーグにおける顧客関係性の構築に関する一考察～ルートイン BC

リーグでの様々な顧客接点が果たす役割を通して～. 彦根論叢 407: 36-55.

Kline, R. B. (2005) Principles and Practice of Structural Equation Modeling (2nd ed.) . Guilford Press:

New York.

小林至 (2019) プロ野球ビジネスのダイバーシティ戦略－改革は辺境から。地域化と多様化と独

立リーグと. PHP 研究所 : 東京.

公益財団法人日本バスケットボール協会. 新リーグの概要.

<http://www.japanbasketball.jp/newleague/outline/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

Kraus, S. R. (2003) Minor league baseball: community building through hometown sports. The Haworth

Press: New York.

久保雄一郎・山口泰雄 (2017) 地域スポーツチームにおけるチーム・アイデンティティがコミュ

ニティ感覚に及ぼす影響 : 高校部活動チームにおけるチーム・アイデンティティの高低差から

の検討. 笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, 194-200.

- Lock, D., Funk, D. C., Doyle, J., and McDnald, H. (2014) Examining the longitudinal structure, stability, and dimensional interrelationships of team identification. *J. Sport Manag.*, 28: 119-135.
- Long, D. A. and Perkins, D. D. (2007) Community social and place predictors of sense of community: a multilevel and longitudinal analysis. *J Community Psychol.*, 35: 563-581.
- Long, J. and Sanderson, I. (2001) The social benefit of sport: Where's the proof? In: Gratton, C. and Henry, I, P. (Eds) *Sport in the city*. Routledge: London, 309-314.
- Mabry, J. B. (1998) Pedagogical variations in service-learning and student outcomes: how time, contact, and reflection matter. *Michigan Journal of Community Service Learning*, 5: 32-47.
- マッキーバー：中久郎・松本晴訳（1975）コミュニティー社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論. ミネルヴァ書房：東京. < MacIver, R. M. (1917) *Community, a sociological study; being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*. Macmillan and Co., Limited: London. >
- 前田和範（2019）地域におけるスポーツ市場. 相原ほか著, スポーツマーケティング入門. 晃洋書房：東京, pp. 77-85.
- Maeda, K. and Tomiyama, K. (2019) An athlete's sense of community as responsibility for the hometown: perspective on community-based professional sport organizations. *International Journal of Sport and Health Science*, 17: 155-169.
- 前田和範・富山浩三（2020）プロスポーツチームに所属する選手のホームタウンに対する態度変容：コミュニティ感覚理論を援用した縦断的研究. *スポーツマネジメント研究*, 12（1）：35-50.

March, J. and Olsen, P. (1989) *Rediscovering institutions: The organizational basis of politics*. Free Press: New York.

松橋崇史・金子郁容 (2007) スポーツ組織マネジメントにおける地域コミュニティ戦略-J クラブの事例研究-. *スポーツ産業学研究*, 17 (2) : 39-55.

松野将宏 (2013) 現代スポーツの制度と社会的構成 : スポーツの地域密着戦略. 東北大学出版会 : 宮城, pp. 123-157.

松尾哲矢 (2015) アスリートを育てる〈場〉の社会学 : 民間クラブがスポーツを変えた. 青弓社 : 東京.

McClelland, D. C. (1961) *The achieving society*. Van Nostrand: New Jersey.

McMillan, D. W. (1996) Sense of community. *J Community Psychol.*, 24 (4) : 315-325.

McMillan, D. W. (2011) Sense of community, a theory not a value: a response to Nowell and Boyd. *J Community Psychol.*, 39 (5) : 507-519.

McMillan, D. W. and Chavis, D. M. (1986) Sense of community: a definition and theory. *J Community Psychol.*, 14: 6-23.

Messick, S. (1989) Validity. In: Linn, R. L. (Ed.) *Educational measurement (3rd ed.)*. American Council on Education and Macmillan: Washington, pp. 13-104.

Messick, S. (1995) Validity of psychological assessment. *Am Psychol.*, 50: 741-749.

村山航 (2012) 妥当性: 概念の歴史的変遷と心理測定学的観点からの考察. *教育心理学年報*, 51: 118-130.

- 村山哲二 (2011) もしあなたがプロ野球を創れといわれたら: 「昇進」より「夢」を選んだサラリーマン. 株式会社ベースボール・マガジン社: 東京
- 武藤泰明 (2009) プロスポーツクラブの地域密着活動の意味と意義とは何か. 調査研究情報誌 ECPR (1) : 3-8.
- 中村健太郎 (2003) つまづきとその対処: 相関行列の比較. 豊田秀樹編著, 統計ライブラリー 分散構造分析[疑問編]: 構造方程式モデリング. 朝倉書店: 東京, pp. 91-93.
- 仲澤眞・吉田政幸 (2015) ファンコミュニティの絆: プロスポーツにおけるファンコミュニティ・アイデンティフィケーションの先行要因および結果要因の検証. スポーツマネジメント研究, 7: 23-38.
- Nicholson, M., Brown, K., and Hoyer, R. (2014) Sport, community involvement and social support. *Sport Soc.*, 17 (1) : 6-22.
- 西田公昭 (1988) 所信の形成と変化の機制についての研究 (1) -認知的矛盾の解決に及ぼす現実性の効果-. 実験社会心理学研究, 28: 65-71.
- 西内啓 (2013) 統計学が最強の学問である: データ社会を生き抜くための武器と教養. ダイアモンド社: 東京, pp. 48-55.
- Nowell, B. and Boyd, N. (2010) Viewing community as responsibility as well as resource: deconstructing the theoretical roots of psychological sense of community. *J Community Psychol.*, 38: 828-841.
- Nowell, B. and Boyd, N. (2011) Sense of community as construct and theory: authors' response to McMillan. *J Community Psychol.*, 39 (8) : 889-893.

Nowell, B. and Boyd, N. (2014a) Sense of community responsibility in community collaboratives: advancing a theory of community as resource. *Am J Community Psychol.*, 54: 229-242.

Nowell, B. and Boyd, N. (2014b) Psychological sense of community: a new construct for the field of management. *J. Manag. Inq.*, 23: 107-122.

Nowell, B. and Boyd, N. (2017) Testing a theory of sense of community and community responsibility in organizations: an empirical assessment of predictive capacity on employee well-being and organizational citizenship. *J Community Psychol.*, 45: 210-229.

NPB.jp 日本野球機構. <https://npb.jp/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

Obst, P. L. and White, K. M. (2004) Revisiting the sense of community index: a confirmatory factor analysis. *J Community Psychol.*, 32 (8) : 691-705.

Obst, P. L. and White, K. M. (2007) Choosing to belong: the influence of choice on social identification and psychological sense of community. *J Community Psychol.*, 35 (1) : 77-90.

Obst, P. L., Zinkiewicz L., and Smith, S. (2002a) Sense of community in science fiction fandom, part 1: understanding sense of community in an international community of interest. *J Community Psychol.*, 30 (1) : 87-103.

Obst, P. L., Zinkiewicz L., and Smith, S. (2002b) Sense of community in science fiction fandom, part 2: comparing neighborhood and interest group sense of community. *J Community Psychol.*, 30 (1) : 105-117.

大西孝之 (2018) CSR. 原田宗彦・藤本淳也・松岡宏高編著, スポーツマーケティング (改訂版) .

大修館書店：東京, pp. 252-255.

押見大地・原田宗彦（2010）スポーツ観戦における感動場面尺度. スポーツマネジメント研究, 2:
163-178.

小塩真司（2016）心理尺度構成における再検査信頼性係数の評価：「心理学研究」に掲載された文
献のメタ分析から. 心理学評論, 59: 68-83.

尾崎幸謙（2003）モデル紹介：2時点での因子の違い. 豊田秀樹編著, 統計ライブラリー 共分散
構造分析[疑問編]：構造方程式モデリング. 朝倉書店：東京, pp. 194-196.

尾崎幸謙・荘島宏二郎（2014）パーソナリティ心理学のための統計学：構造方程式モデリング. 誠
信書房：東京, pp. 62-63.

Perkins, D. D., Florin, P., Rich, R. C., Wandersman, A., and Chavis, D. M. (1990) Participation and the
social and physical environment of residential blocks: crime and community context. *Am J Community
Psychol.*, 18: 83-115.

Peterson, N. A., Speer, P. W., and McMillan, D. W. (2008) Validation of a brief sense of community scale:
confirmation of the principal theory of sense of community. *J Community Psychol.*, 36 (1) : 61-73.

Prezza, M., Pacilli, M. G., Barbaranelli, C., and Zampatti, E. (2009) MTSOCS: A multidimensional sense
of community scale for local communities. *J Community Psychol.*, 37 (3) : 305-326.

プロバスケットボール bj リーグ公式ブログ. <http://bjleague.livedoor.biz/>, (参照日 2020 年 11 月 23
日) .

Proescholdbell, R. J., Roosa, M. W., and Nemeroff, C. J. (2006) Component measures of psychological

sense of community among gay men. *J Community Psychol.*, 34 (1) : 9-24.

Rokeach, M. (1968) *Beliefs, attitudes and values: a theory of organization and change*. Jossey-Bass: San Francisco.

坂本和靖 (2006) サンプル脱落に関する分析: 「消費生活に関するパネル調査」を用いた脱落の規定要因と推計バイアスの検証. *日本労働研究雑誌*, 6: 55-70.

ルートイン BC リーグ -Baseball Challenge League-. <https://www.bc-l.jp/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日).

Sarason, S. B. (1974) *The psychological sense of community: prospects for a community psychology*. Jossey-Bass: San Francisco.

笹川スポーツ財団 (2017) *スポーツ白書 2017～スポーツによるソーシャルイノベーション*. 笹川スポーツ財団. 東京.

Schermelleh-Engel, K., Moosbrugger, H., and Müller, H. (2003) Evaluating the fit of structural equation models: tests of significance and descriptive goodness-of-fit measures. *Methods of Psychological Research Online*, 8 (2) : 23-74.

四国アイランドリーグ plus 公式サイト. <http://www.iblj.co.jp/>, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .

四国アイランドリーグ plus 公式サイト. 2019 年 5 月 法人経営報告詳細.

<http://www.iblj.co.jp/assets/uploads/2020/04/8a4925aaa09ed0f20fbad2637978710a.pdf>, (参照日 2020 年 10 月 20 日) .

清水和秋・山本理恵 (2008) 感情的表現測定による Big Five 測定の半年間隔での安定性と変動 : 個人間差、状態・特性不安、自尊感情との関連. *関西大学社会学部紀要*, 39 (2) : 35-67.

- シンガー・ウィレット：菅原ますみ監訳（2012）縦断データの分析I：変化についてのマルチレベルモデリング．朝倉書店：東京，pp. 1-14. < Singer, J. D. and Willett, J. B. (2003) Applied longitudinal data analysis: modeling change and event occurrence (1st ed.) . Oxford University Press: Oxford. >
- Smith, H. J. and Tyler, T. R. (1997) Choosing the right pond: the impact of group membership on self-esteem and group-oriented behavior. *J Exp Soc Psychol.*, 33: 146-170.
- 鈴木広（1986）都市化の研究—社会移動とコミュニティ．恒星社厚生閣：東京．
- Swanson, S. and Kent, A. (2017) Passion and pride in professional sports: investigating the role of workplace emotion. *Sport Manage. Rev.*, 20: 352-364.
- Tabachnick, B. G. and Fidell, L. S. (2007) Using multivariate statistics (5th ed.) . Pearson: New York.
- 高橋雄介（2017）パーソナリティの変化と健康の変化の関係性の検討を行う：潜在変化モデルを用いた2時点の縦断データ分析．荘島宏二郎編，計量パーソナリティ心理学．ナカニシヤ出版：京都，pp. 207-218.
- 高本真寛・服部環（2015）国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向．心理学評論，58: 220-235.
- Tリーグ．<https://tleague.jp/>，（参照日 2020 年 11 月 23 日）．
- テンニエス：杉之原寿一訳（1957）ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粹社会学の基本概念（上）．岩波文庫：東京．< Tönnies, F. (1887) *Gemeinschaft und gesellschaft: Grundbegriffe der reinen soziologie.* >

- Todd, S. Y. and Harris, K. J. (2009) What it means when your work is admired by others: observations of employees of professional sport organizations. *Journal of Behavioral and Applied Management*, 10: 396-414.
- 戸塚啓 (2015) 低予算でもなぜ強い? 湘南ベルマーレと日本のサッカーの現在地. 光文社: 東京.
- 富山浩三 (2014) チーム・アイデンティティ構築におけるチーム・レピュテーションとセンス・オブ・コミュニティの影響: J2 リーグ所属サッカークラブサポーターの事例. *スポーツ産業学研究*, 24: 195-210.
- 富山浩三 (2017) スポーツがもたらす社会的インパクトがスポーツチーム・クラブマネジメントに与える影響-地域愛着の視点から-. 大阪体育大学大学院博士学位論文.
https://www.ouhs.jp/wp/wp-content/uploads/2018/05/2017_ronbun_y_tomiya.pdf, (参照日 2020 年 11 月 23 日) .
- 豊田秀樹 (1998) 統計ライブラリー共分散構造分析[入門編]: 構造方程式モデリング. 朝倉書店: 東京, pp. 170-188.
- Treitler, P.C., Peterson, A. N., Howell, T. H., and Powell, K. G. (2018) Measuring sense of community responsibility in community-based prevention coalitions: an item response theory analysis. *Am J Community Psychol.*, 62: 1-11.
- Trepanier, S. G., Fernet, C., Austin, S., Forest, J., and Vallerand, R. J. (2014) Linking job demands and resources to burnout and work engagement: does passion underlie these differential relationships? *Motiv Emot.*, 38 (3) : 353-366.

- 植村勝彦・笹尾敏明 (2007) コミュニティ感覚と市民参加. 植村勝彦編, コミュニティ心理学入門. ナカニシヤ出版 : 京都, pp. 161-182.
- Vallerand, R. J., Blanchard, C., Mageau, G. A., Koestner, R., Ratelle, C., Leonard, M., and Gagne, M. (2003) Les passions de l'âme: on obsessive and harmonious passion. *J Pers Soc Psychol.*, 85: 756-767.
- 和田由佳子・松岡宏高 (2020) プロ野球チームのブランド連想がアタッチメントに及ぼす影響 : パシフィックリーグに所属するチームを対象として. *スポーツマネジメント研究*, 12 (1) : 17-33.
- Warner, S. and Dixon, M. A. (2011) Understanding sense of community from an athlete's perspective. *J. Sport Manag.*, 25: 258-272.
- Warner, S., Dixon, M. A., and Chalip, L. C. (2012) The impact of formal versus informal sport: mapping the differences in sense of community. *J Community Psychol.*, 40: 983-1003.
- Warner, S., Kerwin, S., and Walker, M. (2013) Examining Sense of community in sport: developing the multidimensional 'SCS' scale. *J. Sport Manag.*, 27: 349-362.
- Wombacher, J., Tagg, S. K., Bürgi, T., and MacBryde, J. (2010) Making sense of community in the military: cross-cultural evidence for the validity of the brief sense of community scale and its underlying theory. *J Community Psychol.*, 38 (6) : 671-687.
- Yang, C., Wang, Y., Hall, J. B., and Chen, H. (2020a) Sense of community responsibility and altruistic behavior in Chinese community residents: the mediating role of community identity. *Curr Psychol.*, 39: 1999-2009.

- Yang, C., Wang, Y., Wang, Y., Zhang, X., Liu, Y., and Chen, H. (2020b) The effect of sense of community responsibility on residents' altruistic behavior: evidence from the dictator game. *Int. J. Environ. Res. Public Health.*, 17: 460-470.
- Yokum, J. T., Gonzalez, J. J., and Badgett, T. (2006) Forecasting the long-term viability of an enterprise: the case of a minor league baseball franchise. *J. Sport Manag.*, 20: 248-259.
- 吉田政幸 (2011) スポーツ消費者行動：先行研究の検討. *スポーツマネジメント研究*, 3: 5-21.
- 吉田政幸・仲澤眞・岡村敬子・吉岡那於子 (2017) スポーツファンの誇り：プロサッカーとプロ野球における検証. *スポーツマネジメント研究*, 9 (1) : 3-21.
- Zhang, J. J., Pease, D. G., and Smith, D. W. (1998) Relationship between broadcasting media and minor league hockey game attendance. *J. Sport Manag.*, 12: 103-122.

参考資料

研究1 調査用紙（予備調査）

（大学名）学生アスリーの大学・部活動に対する考え方に関する調査

この調査は、学生アスリーの皆様の大学や部活動に関する考え方をお伺いすることを目的に実施しております。

以下、各質問に対して個別に指示がありますので、よく読んで回答してください。

回答は無記名でいただき、すべて統計的に処理致しますので、ご回答の内容によって皆様にご迷惑をおかけすることは決してございません。以上の目的をご理解頂き、どうか率直なご回答をお寄せ下さいますようお願いいたします。

【調査代表者】

高知工科大学

経済・マネジメント学群 助教

スポーツマネジメント研究室

前田 和範

*必須

1. 調査に同意する場合は「同意する」にチェックしてください。*

1つだけマークしてください。

同意する

Q 1. 以下の項目についてお答えください。

2. 部活動名*

3. 役職・ポジション（ある方のみ記入してください）

4. 学部*

5. 学年*

1つだけマークしてください。

1年

2年

3年

4年

大学院

6. 性別*

1つだけマークしてください。

男性

女性

7. 年齢*

8. 出身地*

1つだけマークしてください。

- (大学のある) 県内
 (大学のある) 県外

9. 現在の部活動の在籍年数*

1つだけマークしてください。

- 1年未満
 1年以上2年未満
 2年以上3年未満
 3年以上4年未満
 4年以上

10. 現在行っているスポーツの競技を始めたのは何歳頃ですか？*

11. 大学での主な競技成績があれば記載してください。(例：地区大会優勝〇回、全国大会優勝〇回、個人タイトル獲得〇回など)

12. 入試区分*

1つだけマークしてください。

- スポーツ推薦入試
 推薦入試
 一般入試

Q2. 以下の質問について、(大学名)に対するあなたの考えにあてはまる番号一つを選んでください。

13. 私は、社会的に責任を感じている*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

14. 私は、(大学名)の良い手本である*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

15. 私は、(大学名)の良いリーダーである*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

16. 私は、(大学名)の関係者や応援してくれる人に感謝の意を表す*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

17. 私は、(大学名)の関係者や応援してくれる人のことをよく考えている*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

18. 私は、(大学名)の関係者や応援してくれる人とよく交流しようとする*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

19. (大学名)は私にとって重要である*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

20. (大学名)にとっても愛着がある*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

21. (大学名)に強い思い入れがある*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

22. 私は、(大学名)をより良くすることについて強い思いがある*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

23. 私が(大学名)をより良くする為にできる一番のことは、この大学に貢献することである*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

24. 私は、(大学名)をより良くするという責任感が特に強いと感じる*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

25. たとえ困難だったとしても、私は(大学名)に貢献する準備ができています*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

26. 私は、(大学名)をより良くしようという強い個人的義務を感じている*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

27. 私は、(大学名)に見返りを求めずに貢献することが私の義務だと思う*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

Q3. 以下の質問について、あなたが所属する部活動に対する考えにあてはまる番号一つを選んでください。

28. 誰かが私たちの部活動を批判すると、自分への侮辱のように感じる*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

29. 私は、他の人が私たちの部活動についてどのように思っているか、とても関心がある*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

30. 私が、私たちの部活動のことを話すとき、たいてい「彼ら」ではなく「私たち」と呼ぶ*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

31. 部活動の成功は、私自身の成功である*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

32. 誰かが、私たちの部活動を賞賛するとき、自分への賛辞のように感じる*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

33. 周囲が、私たちの部活動を批判していると、私はきまり悪く感じる*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5
まったくあてはまらない 大いにあてはまる

34. 私は、私たちの部活動で、様々な経験をすることができる*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

35. 私は、私たちの部活動で発見した新しい物事を高く評価する*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

36. 私たちの部活動は、私に思い出に残る体験をさせてくれる*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

37. 私たちの部活動は、私自身の趣向を反映している*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

38. 私たちの部活動は、私の人生における他の活動とバランスがとれている*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

39. 私たちの部活動は、私にとって情熱であり、コントロールできるものだ*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

40. 私は、完全に部活動のとりこになっている*

1つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
まったくあてはまらない	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	大いにあてはまる

41. 私は、部活動なしでは生きられない*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

42. 私にとって、部活動は大きな意味をもっているため、やめられない*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

43. 私は、部活動がなければ、私の人生を想像することが難しい*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

44. 私は、感情的に部活動に依存している*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

45. 私は、部活動をする欲求をコントロールすることが難しいときがある*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

46. 私は、部活動に対して、やらされている感を感じる*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

47. 私の気分は、部活動ができるかどうかによって左右される*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

48. 私は、私たちの部活動のことを話すとき社会的に尊敬されていると感じる*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

49. 私が外部の人と話すとき、私たちの部活動は重要な意味をもつ*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

50. 社会的に、私は私たちの部活動に所属していることによって、評価され賞賛されているように感じる*

1つだけマークしてください。

1 2 3 4 5

まったくあてはまらない 大いにあてはまる

研究 1 調査用紙 (本調査)

(チーム名) の選手の皆様へのアンケート

このアンケートは、高知工科大学スポーツマネジメント研究室が、プロ野球球団の皆様への「ホームタウンに対する態度」などをお伺いすることを目的に実施しております。本調査は、シーズン前後の計 2 回を予定しております。ご記入いただいたお名前は、アンケート内容のシーズン前後の変化を比較するためだけに必要なため、個人情報は一切公表することなく厳重に管理いたします。また、回答はすべて統計的に処理致しますので、皆様にご迷惑をおかけすることは決してございません。以上の目的をご理解頂き、どうか率直なご回答をお寄せ下さいますようお願いいたします。

(調査代表者：高知工科大学 助教 スポーツマネジメント研究室 前田和範)

Q1. 以下に質問について、当てはまるものに○もしくは、回答をご記入ください。

氏 名		ポジション	
性 別	1. 男性 2. 女性	年 齢	() 歳
お住まい	1. 高知県 2. 高知県外	出 身 地	() 県
在籍年数	() 年 () ヶ月		
2018 年の ホームタウン活動実績	例：野球教室・5 回など 種類 () ・回数 () 回 種類 () ・回数 () 回 種類 () ・回数 () 回 種類 () ・回数 () 回 種類 () ・回数 () 回		

Q2. 以下の質問について、ホームタウンに対するあなたの考えに当てはまる番号ひとつに○をつけてください。

	まったく あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえない	あてはまる	大いに あてはまる
私は、社会的に責任を感じている	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンの良い手本である	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンの良いリーダーである	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンのファンの人たちに感謝の意を表す	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンのファンの人たちのことをよく考えている	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンのファンの人たちとよく交流しようとする	1	2	3	4	5
ホームタウンは私にとって重要である	1	2	3	4	5
ホームタウンにとっても愛着がある	1	2	3	4	5
ホームタウンに強い思い入れがある	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンをより良くすることについて強い思いがある	1	2	3	4	5
私がホームタウンをより良くする為にできる一番のことは、 このホームタウンに貢献することである	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンをより良くするという責任感が特に強いと感じる	1	2	3	4	5
たとえ困難だったとしても、私はホームタウンに貢献する準備ができている	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンをより良くしようという強い個人的義務を感じている	1	2	3	4	5
私は、ホームタウンに見返りを求めずに貢献することが私の義務だと思う	1	2	3	4	5

Q3. 以下の質問について、あなたの考えに当てはまる番号ひとつに○をつけてください。					
	まったく あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえない	あてはまる	大いに あてはまる
誰かが私たちの（チーム名）を批判すると、自分への侮辱のように感じる	1	2	3	4	5
私は、他の人が（チーム名）について どのように思っているか、とても関心がある	1	2	3	4	5
私が、（チーム名）のことを話すとき、 たいてい「彼ら」ではなく「私たち」と呼ぶ	1	2	3	4	5
（チーム名）の成功は、私自身の成功である	1	2	3	4	5
誰かが、（チーム名）を賞賛するとき、自分への賞辞のように感じる	1	2	3	4	5
メディアが、（チーム名）を批判していると、私はきまり悪く感じる	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動で、様々な経験をすることができる	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動で発見した新しい物事を高く評価する	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、私に思い出に残る体験をさせてくれる	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、私自身の趣向を反映している	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、私の人生における他の活動とバランスが取れている	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、私にとって情熱であり、コントロールできるものだ	1	2	3	4	5
私は、完全に（チーム名）での活動のとりこになっている	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動なしでは生きられない	1	2	3	4	5
私にとって、（チーム名）での活動は 大きな意味をもっているため、やめられない	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動がなければ、私の人生を想像することが難しい	1	2	3	4	5
私は、感情的に（チーム名）での活動に依存している	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動に対する 欲求をコントロールすることが難しいときがある	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動に対して、やらされている感を感じる	1	2	3	4	5
私の気分は、（チーム名）での活動ができるかどうかにか左右される	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）のことを話すとき社会的に尊敬されていると感じる	1	2	3	4	5
私が外部の人と話すと、（チーム名）は重要な意味をもつ	1	2	3	4	5
社会的に、私は（チーム名）に所属していることによって、 評価され賞賛されているように感じる	1	2	3	4	5

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

第 2 回 (チーム名) 選手の皆様へのアンケート

このアンケートは、高知工科大学スポーツマネジメント研究室が、プロ野球独立リーグ所属選手の皆様の「ホームタウンに対する意識調査」を目的に実施しており、今シーズンはこれで最後となります。ご記入いただいたお名前は、アンケート内容のシーズン前後の変化を比較するためだけに使用し、個人情報は一切公表することなく厳重に管理いたします。また、回答はすべて統計的に処理致しますので、皆様にご迷惑をおかけすることは決してございません。以上の目的をご理解頂き、どうか率直なご回答をお寄せ下さいますようお願いいたします。

(調査代表者：高知工科大学 助教 スポーツマネジメント研究室 前田和範)

氏 名： _____

Q 1. 2018 年シーズン中 (4~9 月) のホームタウン活動実績を、思いつく限りすべてお答えください。

例：野球教室・5 回など	
種類 (_____)	・回数 (_____) 回
種類 (_____)	・回数 (_____) 回
種類 (_____)	・回数 (_____) 回
種類 (_____)	・回数 (_____) 回
種類 (_____)	・回数 (_____) 回

Q 2. 以下の質問について、ホームタウンに対するあなたの考えに当てはまる番号ひとつに○をつけてください。

※大変お手数ですが、正確な調査のため、すべての項目にもれなくお答えください。
 ※また、すべて同じ番号に○をつけるなどもお控えください。

	まったく あてはまらない		どちらとも いえない		大いに あてはまる	
	1	2	3	4	5	
私は、社会的に責任を感じている	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンの良い手本である	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンの良いリーダーである	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンのファンの人たちに感謝の意を表す	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンのファンの人たちのことをよく考えている	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンのファンの人たちとよく交流しようとする	1	2	3	4	5	
ホームタウンは私にとって重要である	1	2	3	4	5	
ホームタウンにとっても愛着がある	1	2	3	4	5	
ホームタウンに強い思い入れがある	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンをより良くすることについて強い思いがある	1	2	3	4	5	
私がホームタウンをより良くする為にできる一番のことは、 このホームタウンに貢献することである	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンをより良くするという責任感が特に強いと感じる	1	2	3	4	5	
たとえ困難だったとしても、私はホームタウンに貢献する準備ができています	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンをより良くしようという強い個人的義務を感じている	1	2	3	4	5	
私は、ホームタウンに見返りを求めずに貢献することが私の義務だと思う	1	2	3	4	5	

Q3. 以下の質問について、チーム活動に関するあなた考えに当てはまる番号ひとつに○をつけてください。

	まったく あてはまらない	あてはまらない	どちらとも いえない	あてはまる	大いに あてはまる
誰かが私たちの（チーム名）を批判すると、自分への侮辱のように感じる	1	2	3	4	5
私は、他の人が（チーム名）について どのように思っているか、とても関心がある	1	2	3	4	5
私が、（チーム名）のことを話すとき、 たいいてい「彼ら」ではなく「私たち」と呼ぶ	1	2	3	4	5
（チーム名）の成功は、私自身の成功である	1	2	3	4	5
誰かが、（チーム名）を賞賛するとき、自分への賛辞のように感じる	1	2	3	4	5
メディアが、（チーム名）を批判していると、私はきまり悪く感じる	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動で、様々な経験をする事ができる	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動で発見した新しい物事を高く評価する	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、私に思い出に残る体験をさせてくれる	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、私自身の趣向を反映している	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、 私の人生における他の活動とバランスが取れている	1	2	3	4	5
（チーム名）での活動は、 私にとって情熱であり、コントロールできるものだ	1	2	3	4	5
私は、完全に（チーム名）での活動のとりこになっている	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動なしでは生きられない	1	2	3	4	5
私にとって、（チーム名）での活動は 大きな意味をもっているため、やめられない	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動がなければ、私の人生を想像することが難しい	1	2	3	4	5
私は、感情的に（チーム名）での活動に依存している	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動に対する 欲求をコントロールすることが難しいときがある	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）での活動に対して、やらされている感を感じる	1	2	3	4	5
私の気分は、（チーム名）での活動ができるかどうかにか左右される	1	2	3	4	5
私は、（チーム名）のことを話すとき、社会的に尊敬されていると感じる	1	2	3	4	5
私が外部の人と話すとき、（チーム名）は重要な意味をもつ	1	2	3	4	5
社会的に、私は（チーム名）に所属していることによって、 評価され賞賛されているように感じる	1	2	3	4	5

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました

謝辞

博士論文の執筆にあたっては、多くの方々のご指導、ご協力を賜りました。

指導教員である富山浩三先生には、博士前期課程から長期間にわたり、研究の基礎から研究に対する姿勢、プロジェクトの進め方、研究者・教育者としての心構えについて、時に厳しく、温かく丁寧なご指導を賜って参りました。研究以外の面でも公私にわたり多くのご指導・ご支援をいただいたことで、博士論文を完成させることができました。心の底から感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。富山先生のもとでスポーツマネジメントに出会い、学び、博士論文を執筆できたことを誇りに、これからも研究者・教育者として高みを目指して参ります。

ご多忙の中、副査を引き受けて下さった土屋裕睦先生、藤本淳也先生に心から感謝申し上げます。土屋先生には、博士後期課程の一年目に研究室に快く迎え入れていただき、多くの研究指導を賜りました。藤本淳也先生には、スポーツマネジメント分野の研究に対する核心的なご指摘をいくつもいただいたほか、多くの叱咤激励をいただきました。お二人の先生方には、審査発表会、口頭試問においても、アドバイスと温かいご指導をいただいたことで、論文の精度を高めることができました。誠にありがとうございました。

本務校である高知工科大学の他分野の先生方からも、研究方法・分析方法に関して、多くのご示唆をいただきました。学際的な知見に基づいた様々なアドバイスが、研究の発展につながりました。また、大学院の先輩である日本福祉大学の住田健先生にも、研究方法や分析における多くのアドバイスをいただきましたほか、常に励ましの言葉をいただきました。心から感謝申し上げます。

研究データの収集にあたっては、プロ野球独立リーグ・四国アイランドリーグ Plus およびブルーイトン BC リーグの各球団スタッフ・選手の皆様に、多大なるご協力をいただきました。本当にありがとうございました。高知ファイティングドッグス球団株式会社副社長・北古味潤様をはじめとする球団スタッフの皆様には、関係各所のご紹介および調整を行っていただき、常にプロスポーツ現場からのご示唆をいただくことができました。皆様のご協力無くしては、博士論文を完成させることはできませんでした。公私ともに支えていただいたこと、心から感謝申し上げます。学位取得に際しては、高知工科大学の先生方、学生にも多くのご理解とご協力、温かい応援をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

最後に、私を支え続けてくれている妻の祥子と娘の和香、両親、兄、祖母にも心から感謝します。毎日の生活においては、妻と娘がいつも近くで支えてくれたからこそ、辛い時間も前に進む力に変えることができ、研究を少しずつ進めることができました。そして、家族の支えと応援がなければ、大学院進学も修了も実現しませんでした。本当にありがとうございました。